

徒使の理眞

— ロウパ聖 —



著ンマーボ・ルーミ江
譯 郷文塚戸

424

91



始



特209
613



エミール・ボーマン著
戸塚文郷譯

聖の使徒
パウロ



聖人傳
第1卷

聖パウロ會叢書



（堂聖大スンレ）ロウバ聖



『聖パウロ』日本版緒言

エミール・ボーマン

聖パウロは、自分の生涯のことを書いた書物が、自分の殉教の千八百五十八年の後に、日本で讀まれることを驚くであらうか。

もろくの島は新しき子等をとほきより主にさしげんが爲に、彼をまちのぞんだ。彼はガラチヤ人に云つた『汝等はキリスト・イエズスに於て皆一人なり』と、人類の將來に關する神の計劃は、此の一致が更に遠く及び、且、堅固たらんことを要求する。この一致は、キリスト・イエズスによつて、又、彼に於ての他に、可能性がない。國際聯盟の表面的一致は、『神聖なる利己主義』の裡に於て頑にするだけである。しかしながら、神に於て、諸聖人の交りに於ては、ユデヤ人もなく、ローマ人もなく、フランス人もなく、日本人もない、そこには、一にして永遠なる眞理に憧憬るゝ靈魂があるだけである。聖パウロは、最後の一致、即ち『主イエズス、其の能力の天使等を隨へて天より顯れ給ひて、神を知らざる人々、及び福音に従はざる人々に報い給ふ時』に完成する、一致の豫言者である。

幸に翻譯された此の書物が、大なる平和の近づきを早めんことを。又、日本人にして既にキリストの友たる者、及び、友とならんとする者に、これを知らしめるために努力した其の人に賞讃あらんことを。

Au révérent Père
Tot-suka
"Donner, c'est plus de béatitude
que recevoir."

(Actes, xx)

E. Baumann

22 janvier
1929

戸塚靈父に

「與ふるは受くるよりも福なり」

(使徒行録第二十章)

エミール・ポーマン

一九二九年一月二十二日

東京帝國大學名譽教師

エミール・エック先生書簡

親愛なる靈父よ

貴君が、エミール・ポーマンの『聖パウロ』を日本語に譯されたと云ふのは、至極結構な思ひつきです。此の本は、先年、夏期休暇の間に、偶々私の手に入りました。私は之れを殆ど小説を讀むやうな、非常な興味をもつて讀み了へました。さうして、隠さずに申しますが、この讀書は私にとつて大變利益になりました。もとより、私は久しい以前から、此の偉大なる『異邦人の使徒』の改心、不思議な生涯、眞に超人的な勞役を熟知してゐました。けれども、この時ほど人間的な彼の心が私の心に近く搏動するのを感じたことはありませんでした。それは、此の書の著者が在俗の人で、有名な小説家で、神學者と云ふよりはむしろ歴史家であつて、しかも、自ら主人公が經過した各地を遍歴したからであるのです。彼は、エルサレム、シリアのダマスコ、シリシアのタルソ、テサロニケのフィリッピ、アデンス、コリント、エフェゾ、ローマとパウロのあとを慕つて行きます。彼は非凡な觀察眼を有して、是等各地の地方色を克明に描寫し、パウロが順次に接觸していつた民族の民族的精神と風習とを忠實に表現します。彼は老練なる心理解剖家として、主人公の精神状態をよく分析し、彼を特徴づける自然的才能を示すと

序

三

共に、彼もまた有してゐた種々の缺點を隠さうと致しません。これを讀むと、神の極めて特殊の御扶助なくしては、パウロは、彼の説教を妨げる至難の障碍を打破し、敵人の陥穽を通れ、使徒的大傳道旅行を完了することが、絶對的に不可能であつたと云ふことが解ります。さうして、彼が單獨でなかつたこと、即ち、神の靈が彼の上にあつて、彼の旅行に伴ひ、彼の勞役を支へ、彼の苦惱を慰め、無數の困難時に發現した超人的の力と勇氣とを彼に與へ給うたと云ふ事を感じます。讀者の心はパウロの心と共鳴し、キリストの神性に對する彼の確信は我等の精神の最奥にまでも迫り來り、主に對する彼の無邊の愛は我等の靈魂を奪つて、我等もまた自ら、最後に、パウロと共に *Mihi vivere Christus est* 『我にとりて活くるはキリストなり』と書くことが出来るやうになるのです。

親愛なる靈父よ、願はくは此の叫びの讀者の多數の胸より自然に發せんことを。さうして、私はそれを疑ひません。何故ならば、貴方の譯文は(私が傳承する所によれば)、簡素であり而も優美であつて、原文の生命に躍動し、且繪畫的に絢爛なる趣きを譯出してゐるさうであるからであります。: *L'Immortelle* . . . *La Fosse aux Lions* を書いた原著者の藝術は既に定評があつて、彼が現代フランス文壇に於て大小説家の一人たることもまた當然であります。貴君が此の種の著書の翻譯に興味を有つて居られるのですから、私は、貴君に、最近、他の一人のフランスの小説家、即ちフランス翰林院のルイ・ベルトランが書いた『聖アウグスチン』及び『アヴィラの聖女テレザ』の二篇を御紹介申上げませう。聖パ

ウロ傳の如く、この二の傳記を、よく日本語に翻譯したならば、貴君の同胞の多數のものゝ興味を惹くでありませう。さうして、それは、たゞにキリスト教徒のみならず、恐らくはことに未だその幸福を有しない人々の興味を唆るでありませう。是等の書を讀めば、正しき心を有てる如何なる人も、己が頭上に一種の超自然的なるあるものゝ通過するを感じ、神の存在、キリストの神性、永遠の生命の信仰が、己が心に芽ぐむことを覚えるのであります。

親愛なる靈父よ、私は貴君がなされたところの、文學的並びに宗教的のよい御仕事に、衷心よりの祝詞を呈し、又、貴君の譯書の御成功を最も熱心に祈つて居ります。

貴君の忠實なる 舊師

マリア會員 エミール・エック

東京、曉星學校に於て、一九三〇年三月二十五日

再版に際してパウロ師に贈る

エミール・エック

尊敬すべき靈父よ

承はれば、故戸塚文卿師によつて邦譯されたエミール・ポーマン著「聖パウロ」の再版を準備中なる由、誠に慶賀の

至りに存じます。

想へば一九二九年の或日、教子戸塚師が私を曉星學校にたづねてくれた時、師の信仰と秀れた文才とを知つてゐた。私は、師に本書の邦譯を勧めたのでした。

私が戸塚師に本書の邦譯を勧めたのは、キリストの神性に對する信仰と十字架にかけられ給へるイエズスに對する熱と愛とを明示するかの異邦人の大使徒の活動が、日本に數多い純眞率直な善意の人の精神を打ち、心を動かかし、彼等をして、曾つてエルザレムに於いて、しかも己を殺さうとたくらみつゝあつた律法學士とファリザイの徒との面前で、「我は世の光なり、我に従ふ者は暗黒を歩まず、却つて生命の光を得べし」(ヨハネ八ノ十二)と言ひ放つた御者の比類なき御教を學ばんと熱望を惹起するに相違ないと確信したからであります。

戸塚師は私の勵めを容れて、仕事に取りかゝりました。そして一九三〇年の三月、その邦譯「聖パウロ」は世にあらはれ、多くの日本人、しかも未信者からも愛讀されました。私は後者に屬する者のうち、天主の聖寵に感じて眞面目なカトリック・キリスト者となつた者を數名存じてをります。

親愛なる靈父よ、貴下が、時局下の困難をかへりみず、發行されようとする新版が、天主なる牧者、人となり給へる神の御子、わが主イエズス・キリストの羊舎に、新たなる羊を導き入れんことを切に冀望いたします。

一九四二年二月十一日

清瀬に於いて

敬具

譯者序

三四年前のことであつた。私はある人達と共に、使徒行録の研究をしてゐる。あの膨大なジャッキエ Jaquier やその他の二三の註解書乃至は註解付の聖書にたよりながら、皆と一緒にそれを讀みながら私は、今日では稍古くなつた感じがするが、それでも、その貴い價值と興味とを失はないフワール Fouard のペトロ傳やパウロ傳(この最後のものは『聖パウロとその傳道』『聖パウロの晩年』の一卷よりなつてゐる)を讀み返してゐた。その頃、私は不圖、此の書、即ちエミール・ポーマンの『聖パウロ』を手に入れたのである。原著が世に出てから、やつと一年か二年半たつた後のことであつたが、それはもう第六十二版に達してゐた。私は緒言の第一頁を讀むや、それからもう率き入れられるやうな感激と昂奮とを以て、全篇を讀破したことを覚えてゐる。ポーマンは文學者である。彼は決して聖書學者でも、神學者でもない。印象的な著者の文章が、大なる効果を以て、租い線で描き上げた聖パウロの姿は、著者がレンス市の大聖堂の塔の彫刻に發見したユデアの古豫言者的風貌を具へた見神者のそれであつた(卷頭寫眞版)。しかも、聖者はどこまでも、その人間らしさを失はずにゐる。ポーマンが専門的な聖書學者でも、神學者でもないことが、我等一般の讀者には幸なのである。しかし、かう私が云ふのは、彼が聖書

學についても神學についても全然無智であるとするのではない。彼が如何に専門家に近い學的良心を以て、初代教會史を研究したかは、本書の内容、ことに、その所々に加へられた註によつて知られるであらう。著者はその上、聖パウロの足跡を追うて、東方諸國を巡禮してゐる。

昔の聖人傳は、信者の修徳のたすけとなる事を第一の目的としてゐたから、一般に、概念的な退屈なよみものである事が多かつた。しかし、近頃歐洲で出版されるものは、之れとはよほど傾向を異にして古代或は中世の聖者を主人公とするものでさへ、近代人の胸に力づよく迫り來る暗示に富んでゐる。しかも、それと同時に、歴史的の考證がよほど精細になつて來た。ボーマンの『聖パウロ』はこの新しい聖人傳の、すぐれた代表として認めらるべきものである。

私が本書を邦譯しようと思つたのは、「ルナンの使徒」の邦譯を見た瞬間であつた。ルナンのフランスで、今日、最もすぐれたパウロ傳として異常の成功を収めてゐるのが本書である。私は我國に於ても、ボーマンがルナンを葬り去らんことを冀ふ。

ボーマン氏は私に本書の邦譯を快く許されて、特に日本版のための序文を寄せられた。私はその厚意を深く感謝する。本譯書の原文としては、特に著者の指示に従つて、氏が私に寄贈された第七十七版を用ひた。それに署名された著者の筆蹟は巻頭緒言の裏面にある。

私の恩師、東京帝國大學名譽教師エミール・エック先生は、この翻譯の仕事に對して、親切な書簡を下さつた。私は先生の讚辭には値しないが、この書面を巻頭に掲げることを得るのは、私の大なる喜悅である。翻譯に關しては、原文を省略せず、達意を旨とした。聖書の引用は、ラゲ師譯『新約聖書』によつた。

最後に本譯書の出版に關して、何日も變らぬ日本カトリック刊行會の御盡力、特に長江邦四郎氏の御世話を衷心より感謝するものである。

一九三〇年九月二十六日

於洗足田園都市

譯者識

戸塚文卿師小傳

グインセンシオ・ア・パウロ戸塚文卿師は明治二十五年三月十二日神奈川縣横須賀稻岡に生る。東京私立曉星中學を経て、明治四十二年第一高等學校に入學、同年十一月受洗。東京帝國大學に入るや醫學を専攻し、大正五年卒業に際しては恩賜の銀時計拜受の榮を擔ふ。引續き佐藤博士の許にて研究。大正十年五月北海道帝國大學助教授拜命、同月文部省より歐米留學を命ぜられ、巴里市パスツール研究所にて組織學研究。同年九月倫敦にて哲學研鑽、且つ巴里にて神學を修め、十三年六月司祭に叙せらる。九月より十二月迄布教博覽會準備委員として羅馬にあり、十四年一月歸朝す。二月依願北海道帝國大學教授を免ぜられ、三月聖ヨハネ汎愛醫院を開く、十五年教皇ピオ十一世より布教博覽會有功章並に賞狀、翌昭和二年シユヴァリエ・サン・セブルクル勳章受領。四年公教神學校教授に任ぜられ自然科學を講ず。同年十月結核療養所ナザレト・ハウス開設。後海上寮と稱す。五年一月雜誌「カトリック」編輯長依囑、六年一月日本カトリック新聞創刊に際し初代主筆に就任す。同年十一月國際聖母病院初代院長囑託、翌七年六月に及ぶ。九年第十五回國際赤十字會議東京に開催さるゝや、羅馬教皇廳主席代表委員たり。後教皇ピオ十一世より功勞章拜受。十年八月、日本姉妹會會長に就任。十三年四月日本カトリック新聞社社長に就任。五月聖ヨハネ醫院を擴張して櫻町病院を開設し、聖ヨハネ會創立に着手す。十四年一月數年來の高血壓頓につのり、同八月十七日午後十時十分櫻町病院にて逝去。享年四十八。師は繁忙なる劇務の餘暇翻譯、繙案に麗筆を振ひ、『聖パウロ』『信心生活の入門』『天主の完徳』『念禱の生活』『司祭默想說教集』『サハラの際者』『農村の改革者』『聖體の默想』等の名著を遺せり。

目次

緒言……………一

一 迫害者サウロ……………三〇

 ステファノの殉教……………三〇

 サウロと『教會』……………四三

 サウロの過去……………五六

二 異象を見る……………七〇

 ダマスコの途上にて……………七〇

三 サウロの召命……………八四

四 使徒の第一歩……………九四

五 タルソにての不明の歲月……………一二〇

六 門出……………一二六

目次……………一

七 クプロ島、パウロとローマ帝國と……………一四三

八 信仰の門……………一五四

九 律法に關する論争……………一七六

一〇 西に向ひて……………一九六

 ガラチヤに於けるパウロ……………一九六

 フィリッピにて、鮮血による證明……………二〇三

一一 パウロとテサロニケのユデア人……………二一八

一二 アレオバグに於る説教……………二三〇

一三 コリント教會……………二四四

一四 エフェゾの騷擾……………二六七

一五 再びギリシヤに、ローマ人に贈る書簡……………二八九

一六 エルサレムへの最後の旅行——彼の逮捕……………三二三

一七 セザルに上告す……………三四二

一八 難航海……………三五八

一九 ローマにて、キリストの囚人……………三七〇

二〇 殉教……………三九二

二一 聖パウロの面影……………四一六

 人間として、聖者として……………四一六

 萬國の教師……………四二五

緒言

過去に於て、世界が聞いた最大の聲の一は、彼の聲である。
使徒時代に最も傑出した姿は、彼である。

彼の傳記を單に、一個人の運命として觀ても、既に不思議と云はねばならぬ。律法に對する熱情に驅られて、不敬邪惡なる異端を根絶しようとする若いファリサイ人が、忽ち、從來敵視した新説の最も熱心な使徒となり、此のユデア人が、自分の最初の意志に反して反ユデア人となつた事實は、一の靈魂が、一轉して、他の人々が之に加はる事に關してすら、憤慨措く能はざりし、正反對の主張に歸依したと云ふ、稀に見る出來事の一例として、我等の驚異する眼に映るのである。セン・ジユスト〔註一〕が、ブラック・リストを作つてゐる際に、突然、敵黨の主義に共鳴したと假定するがよい。迫害者サウロの改心は、ほゞ之にひとしく、然も、更に奇怪であつたのだ。

さうして、彼の改心後の生涯は、すこしもたゆまなかつた。三十年間の、驚くべき、又恐るべき冒險であつた。

彼は、時としては、二三人の同志、或は小數の護衛と共に、又時としては、全く單身で、山賊強盜の

横行する難路を経て、異教徒、蠻族の棲む僻地に向ひ、都會に於ては、私が嘗てタルソにて山羊の毛で遊牧者の天幕を織つてゐるのを實見した職人のやうな、機工の業を營んで、毎日の糧を得てゐた。

何處に行つても、彼は、新しき神、豫言せられしメシア、神の子、救主、主にして、生者と死者との審判者なるものを説いた。ところが、此の神と云ふのは、ナザレト生れの浮浪人で、冒瀆者、煽動者として、エルサレムの小高い丘の上で十字架に磔けられた人、弟子等が、復活せりと主張する人にすぎない。パウロが此の人を信ずるのは、就中、彼が之を見、その言葉を聞いたからである。此の異象は、彼を、途上の砂塵中に顛倒せしめ、三日の間、盲目たらしめるまでに、彼の眼精を焼き毀つた。彼は、キリストの光榮が、なほいまだ彼の眼に輝き、その御聲が彼の耳朶に響き渡るを覺える。

彼は此の人を、會堂シナゴグの中で、兄弟たるユデア人に説教した。少數は、彼の天啓を信ずる。しかし、大部分の人々は、信ぜずして怒聲を發し、人民を煽動し、彼を害せんと計る。彼は彼等に對して革履サンダルの塵をふるひ、然る後、彼を信ぜんと欲する異邦人に向ふ。

シリアのアンチオキアよりクプロ島へ、クプロ島よりピシディアのアンチオキア、イコニオム、リストラ、デルベンへ、それより、シリシアよりトロアデ、又、マケドニア、テサリア、アッチカ、アカヤの各州へ、次で、コリントよりエフェゾまで、あらゆる都市に教會を建て、約束の福音を播く。暴風雨の

時に、東より西へと、電光のきらめくが如く、彼の聲は、諸國民の上を馳せて往來する。

彼がローマ書の中で『我は、エルサレムよりイルリコ州に至る迄の地方を巡りて、キリストの福音を滿たせり……今は早、此の地方に爲すべき事なく、(註二)汝等に至らん事は、年來の切なる願なれば、イスパニアへ往かん時に、立寄りて汝等を見ん事、又、汝等を以つて幾分の満足を得たる後、汝等より彼處へ送られん事、是わが希望なり。』(ローマ書、一五ノ一九—二四)と書いたのは誇張の言でない。

『イスパニアへ往かん時に』彼の野心の擴りは、ローマ帝國の境界を以つて、満足しない。昨日までは、名を知る者もなかつたイエズスを、如何なる土地に於ても拜禮せしめんと焦燥は甚大である。彼は、地の際涯に至るまで、主の識られん事を冀ふ。かくして、一切の國民が救主の來り給ひたるを知る時、豫定の時は充つること速にして、何人も豫期せざりし日に、審判者は雲の上に降り給ひ、キリストは世々に統治し給ふに至るであらう。

パウロが、この超人的の征服をする爲に、如何なる値を支拂つたかは、使徒行録の記事でも解るし、又、彼自身の證言でも之を推することが出来る。曰く、

『ユデア人より四十に一足らず、打擲せられし事五度、笞刑を受けし事三度、石を擲たれし事一度、破船に遇ひし事三度にして、一晝夜の間海中に在りき。數次旅行して、河の難、盜賊の難、邦人よりの難

異邦人よりの難、都會に於る難、僻地に於る難、海上の難、僞兄弟よりの難に遇ひ、勞働し、且、惱み、數次夜眠らず、飢渴き、斷食する事度々にして、凍え、且、裸なりき。是等、外部の事の外、亦、日々差迫れる諸教會の憂あり』と。〔コリント後書、一ノ二四—二九〕

殆ど、何處の市からも追出されるが、すこしもひるまず、復、其處に戻つて来る。反抗は彼の氣力を激發する。しかし、エフェゾの暴動、及び、それに引續く不明の事件の後には、彼も『責めらるゝ事過度にして力及ばず、活くる望をすら失ふに』至つた〔コリント後書、一ノ八〕と告白してゐる。

紀元五六年、最後にエルサレムに上つた時、彼は、ユデア人に神殿の外に牽き出された。此の際、ローマ人の干渉が無かつたならば、或は群衆の爲に不測の危難に遇つたかも知れない。それから、彼はカイザリアで、二年間、鐵鎖に繋がれた。次で、ユデア人の手中に陥る事を避けんが爲に、自らローマ皇帝に上告したので、ローマへ護送された。途上、十四晝夜の大暴風雨の爲に難船したが、恙なくマルタ島に上陸するを得、遂にローマに到着した。ローマでも、更に二年間の囚人生活を送つたが、此の間には、自由に人に接し、説教し傳道することが出来た。

その後の彼の生涯は明瞭でない。しかし、チモテオへの書簡の中で語る所を綜合すれば、彼は一旦、解放せられて、アジアに還り、再び、ローマに来て獄に繋がれた。さうして遂に此の地で殉教の榮冠を戴いたことは、確實なる傳説の傳ふる所であり、同時に、五種の古文書の證する所である。就中、最古の證言は、九二—一〇二年の間に書かれた、ローマのクレメンスの次の重要な記事である。即ち『七度鎖に繋がれ、放逐せられ、石を擲たれ、東西に於ける信仰の役者となりし後に、彼はその信仰の爲に、貴き榮譽を贏ち得たり。全世界に正義を教へ、西の際涯を極め、支配する人々の前にて殉教を果したる後、彼は世界を離れて忍耐の大いたる模範として、聖なる處に行けり』と。

外部より觀察して、粗いスケッチを描き上げただけでも、聖パウロの生涯は、彼を典型的使徒たらしむる確信と深い信念との能力の表現である。

世の中に、嚴密な意味で、無くてはならぬ人間と云ふものは無いが、或人々は全く獨自的存在を有してゐる。彼等以外に彼等の任務を、その通りにやつてのけるものはない。例へば、ナポレオンが居なかつたならば、オステルリッツの戰鬪は、全く違つた態を示したであらうと思はれる。

イエズスの弟子等の中で、何人が最大なりしか、これは、我等の決すべき問題ではない質朴な、比喩ない善良性は、ペトロのものであつた。『主よ、然り、我が汝を愛するは汝の知り給ふ所なり』〔ヨハネ二ノ一六〕の言葉、或は神殿の門のところに居た跛者を痊す前に、『我に金銀なし、されど我が有てるものを

ば汝に與へん』使徒行録三ノ六』と告げた言葉、かくの如きは到底、パウロの口を洩れ得る言でない。

此の無智の人が、命令し、教示することを得るやうになり、此の臆病者が、祭司の長等の前に敢然と立つやうになつた事實は、彼が行つた奇蹟よりも、我等にとつて驚異すべき事柄である。

しかしながら、そのすべてに拘らず、ケファの面影は、比較的簡単な線に盡きてしまふ。彼の説教、及びその二篇の書簡は、彼の主張、並びに、彼が打勝つた論争を示すけれども、彼自身について、我等の知る所はあまり寡少である。

ヨハネは、或意味で神の火焰に、高く包まれてゐる人である。彼は彈奏者を見ずして、其の響を聴く熾天使のかなでるオルガンである。

ステファノはパウロの前驅者、豫言者の影繪、天の光明の降り注ぐ『天使の面』であつた。神殿の永續性を信するイスラエルの錯覺を、イエズスの後に最初に壞したのは彼であつた。しかしながら、彼の下手人、サウロが、彼の勇氣を相續し彼の努力を完成に導く爲に、彼は姿を没せねばならなかつた。

バルナバは、強い伴侶であつた。ロアジールはパウロを貶して、彼を擧げる。ミシュレがロクロアの戦勝の榮光を、コンデー公より奪つて、シロに與へたのと同筆法である。傳統的所説を覆へさんと欲するものゝ常套的に案出する拙いロマンテクな解釋と云はねばならぬ。バルナバの事業は驚嘆に値するが、

それはパウロと協同の仕事である。彼が何かを書いたかも知れぬが、今日に残つてゐるものは一篇もなす。(註三)

之に反して、幸にも、パウロは我等に親しい。彼の存在は或部分は、密雲に鎖されてゐるが、それにも拘らず、我等は彼と共に棲むの感を以つて、彼に近づくことが出来る。さうして我等が彼に親しむほど、彼の美しい靈魂、力づよい天才を感得する。

我等は今まで、冒瀆されすぎて來た天才なる文字に、その眞意義を恢復せねばならぬ、使徒等はみな聖靈を享けた。しかし、トマ學派の成語に云ふが如く、賜は『受くる者の性質に隨ひ』即ち、その容量に比例して果を結ぶものである。

パウロが『選みの器』と呼ばれたのは、由緒なき事ではない。彼は、その使命の爲に、神より不思議な性能を附與せられ、それが、聖籠によつて淨められ、高められたのである。彼の天性は、二つの要素を、奇しきまでに併せてゐた。その一は、いつでも極端な決心を作ることが出来る神経質な、鋭敏な、エネルギーで、その他は、極めて大膽で、しかも、極めて變通自在な、一目で人々を見渡し、最も見慣れぬものを同化し、巧智なるギリシヤ人の智慧のやうに、自由に種々の思想の間を徜徉することの出来る智慧であつた。

しかし、彼はギリシャ文化の影響を深く受けたタルソに生れ、ギリシャ語をアラミアン語と同様に樂にあやつり、ユデア的教養に異教の智識を交へてゐたと云ふものゝ多分に彼の身體をめぐつてゐたのはやはりユデア人の血であつた。彼の誇は、自らユデア人なりと云へることにあつた。彼の辯證法にはラビに仕込まれた痕跡があり(註四)彼の倫理にはユデア教的觀念の名残を存してゐる。彼がキリスト教徒を迫害した頃の狂熱は、ユデア人種の特徴である。組織的、且、實際的精神も、亦、さうであつた。彼は、青年時代から、宗教的情熱をして、あらゆる行動を支配せしめた。彼は律法の爲に生きたと自ら云ふ(ガラチア書、一ノ一四)彼は常に眼を神殿に注ぎ、聖書の中に約束せられたる屈辱後のイスラエルに勝利をもたらすべきメシアを待ち望んでゐた。

彼は律法に満足してゐたのだ。彼はファリザイ的偏見に捉はれて、毫も假借するところが無かつた。キリストに關する智識は、單に之を嫌惡させるだけであつた。夢にも、更新の『力』のひそかなる誘ひを、感じてゐたであらうか。

従來の信念の正反對なる信仰の中に、あのやうに遽に没入して、決して背方を顧みず、かの舊約の豫言者が幻に見た——翼を擴げつゝ前進して、行くに廻ることなりしと云ふ——かの神祕的な動物の如くなつたのは不思議である。

『隅石』を置くべき所につき立つてゐた、古りし律法の障壁を打倒し、『聖書』の門扉を萬國民の爲に押開くことが出來たのは、彼の賢く、且、勇敢な飛躍の賜であつた。

しかしながら、律法を棄てるのは、彼にとつて斷腸の苦であつた。又、それに引續いて、イスラエルが、救靈の福音に項を剛くするのを見なければならぬのが、彼の絶間ない嘆きであつたのである。

パウロは、何處までユデア人であつたか、何處からユデア人でなくなつたか。此の問題は、歴史的に詳しい研究を要しよう。彼の變化に伴ふた内心の悲劇は、この書を充たすに充分である。

しかし、私は急いで附言せねばならぬ。心理學者の好奇心が、私にこれを書かせたのではない。

私は最初のうちは祈禱書中に散在する彼の書簡によつて、たゞ斷片的にのみ、聖パウロを識つてゐた。それから、二十六歳、即ち、私が自分の仕事の爲の勉強を始めた頃から、だん／＼と深く、彼に觸れていつた。私が彼に教へられた一切、現に教へられてゐる本質的のものを云ひつくすことは到底不可能である。彼に追つ従いてさへ行けば、あらゆる玄義に關して、『主の光榮を鏡に映すが如く見奉りて、光榮より光榮に進む』(コリント後書、三ノ一八)ことが出来る。神の豫定、極端が喚び起す他の極端、救済の大慈悲の機縁を作つた原罪の深淵、諸聖人の通功、すべて是等の神祕を、パウロは、『御言』によつ

て照らされし人間の智慧の許さるゝ限り、深くさぐつた。彼の思想の中庸は、また、その崇高さに伴つてゐる。

論理の飛躍、了解し悪い連絡、無理な省略の如きも、そのたいした缺點でない。種々の難問を悉く説明した後に、最も明白な、激越な、時としては、最も廣闊な、甘美な、親切な態度が示される。

彼はコリント人に『キリストに於る小兒に語るが如くにして、汝等に乳を飲ましめき』と書き送つた

(コリント前書三ノ二)

彼の書簡の章句に表はれた生命の教は、野の芳香と酸味とを混ずる、田舎の牛乳のやうな味がする。

又、この素朴なキリスト教は、使徒が立ち寄つた海港市の微風を含んでゐるやうだ。それは單純な信仰と、希望し、愛する賜とを、その原始的清新さのまゝで示してくれるが、希望と愛とが、いつはりなきものに對ふが故に、この賜は、この上もなく貴い。さうして、我等が所有するその大部分は、實にパウロによるものである。これは、形容ではない。ガリア、即ち、ローヌの溪谷、及び、リオンのあたりに來た最初の宣教師等は、パウロとその弟子等が勞役した、エフェゾ、フリジア地方から來たのだ、と云ふことを、私は度々想起した。私が生れたりオンのミステイシスムは、熱烈な、修道的な、かのキリスト教的古アジアの名残りである。

もしも、パウロが、原始的教會より、モイゼの戒律の轡を奪ふの使命を有たなかつたならば、果して我等、異邦人の子等は、キリスト教徒となつただらうか。たとひ、割禮が無くとも、異教世界が悉くユデア教に歸依することは、想像に難い。使徒等のうちで、パウロ一人が、此の事を洞察したのではないが、モイゼの戒律を廢する必要を實現する爲に、彼は何人よりも熱心に働いたのである。

多くのキリストの證人の中で、彼は最も打ち負かしくい證人であつた。何故ならば、彼がその證人となつたのは、自己が選んだのではなかつたからだ。キリスト教は、ユデア教的神觀と、ギリシヤの密義から生れた空想ではない。それは事實に基くもので、この事實を除外したならば、もう、何物も残らない。或は、更にパウロのすぐれた言を借りるならば、キリスト教の眞理に對する一切の信仰は、キリストは復活せりや、否やの、たゞ一個の事實に根ざしてゐるのである。

イエズスの復活、不朽、イエズスがその靈體たる教會の内部に存在し、教會の頌ち與へる賜物によつて信者の靈の裡に在す事、パウロは以上のすべてを、全的、永遠の眞理として、これを肯定し、主張することを一時もやめなかつた。彼は、その眞實を支持するが爲に、一切の艱難を凌ぎ、自己の鮮血を流した。彼の書簡の中に、これ以外の事を教へる一頁、一行をも指摘することは不可能である。

私が只今云ふ事は、護教論的の立場からでなく、聖書解釋學の方面より見てのことである。しかし、

私が、私自身の信仰の實體を、聖パウロの中に發見すると云ふことを、緘黙する必要はない。

キリスト教の起原を研究する人々は、殆ど常に、先入主的偏見を有つてゐる。ドイツ學派に屬する聖書解釋學者は、擧つて、福音書及び正統神學を葬り去らうとの、明確な意思を抱いてゐる。猜疑心の深い冷な皮肉にみちた批評家ルナンは、彼が背いた神を、傷け殺さうと焦慮するのを隠すことが出来ない。聖パウロの見た異象に關して、『彼はキリストを見たのではない。彼に個人的の天啓を與ふるキリストは、彼の想像力の所産である。彼がイエズスの言を聞いたと信する時、彼は自分の言を聞いてゐるのである。』と云ふルナンは、歴史家でなくして、虛無を愛する理想家である。

ギニューベール、ロアジの如き人々もその通りで、彼等の學究的態度は、絶えず狂信的主張に禍されてゐる。私はロアジの使徒行録註解を二回讀み直した。彼の努力は、私が少年時に、田舎の教會の司祭館に泊つて、納屋の頑丈な大梁を絶間なく嚙じる、野鼠の音を聞いた時のことを私に思ひ出させた。ロアジは本文、しかも、聖書の本文を嚙つて、そこから、すこしでも嚙りとつたと信すれば、それで幸福なのだ。彼の批評は、既存の難點では満足せずして、更に多くの難點を探すことである。彼は正確眞率な原典を假定して、後人の手によつて之に附加削除が行はれたと考へる。彼は此の添削家が、或所では、全く不用意な無能を暴露し、或所では、非常に巧な狡智を示し、出來上つたものは、ごまかし

と、不器用と、虚偽との混合だと云ふ。之では、まるで探偵小説家の作品のやうだ。歴史ではない。しかし、それでは、聖書が素朴、眞率の中に、深い意味を宿す事實を、全然看過するのである。

ロアジは、彼が師事するドイツの學者等のやうに、『書き込み』interpolationと云ふ色目鏡を放すことが出来ない。ある説話が、他のものに少しでも類似すると、直ぐに剽竊だと叫ぶ。最も眞實な實際の出來事も絶えざる反覆であると云ふことを忘れたかのやうに。

しかしながら、私は、それで、この否定的聖書解釋學の效果は、悉く空しかつたと主張するのではない。此の種の學者は、新約聖書の權威を滅さうとして、反つて當時の環境を詳にし、種々の影響を闡明し、各種の教説の類似を説明した。さうして、最初の豫期に反して、正統的聖書解釋學の發展に資したのである。此の否定的聖書解釋學なくして、例へば、プラ師の『聖パウロの神學』P. Prat, La théologie de St. Paul. ラグランジ師の『ユデア人の間に於るメシア思想』P. Lagrange, Le Messianisme chez les Juifs 及び、ローマ書、ガラチア書等の註釋の如き、權威的大著述のすることはなかつたであらう。

否定的聖書解釋學は、その臆面なき誇負にも拘らず、一の重大なる宿病を有し、不幸にも、自らそれを痊さうとしない。分析し、解剖するのみで、建設しないのがそれである。かくて、パウロの強大なる

統一的人格も、支離滅裂になりたり、彼は自分が巡歴した、ストア哲學、密義教と、ミトラ教と、種々の接神論アポシタと、ありとあらゆるグノーシスの諸の神秘的觀念とを、巧妙に、或は、無意識的に集蒐し、織交る柝衷家にすぎず、彼のキリスト教は、古代宗教の頽敗せる土地に、偶然に生えた一の菌になるのである。(註五)

異教の密義とパウロのそれとを比較し、言辭、或は儀式の類似に立脚して、その混交を暗示するは容易い。而して、この曖昧な混交状態の裡に、その根本的相違が見逃されてしまふ。

加之、彼等は重要な二點を閑却する。人間と云ふものは、先づ、思想によつて導かれるものでない。此の人を説明する爲には、どうしても、彼の意志の急所をつかまへ、同時に、彼の屬する民族、その性癖、傳統的風俗習慣と云ふものを看過してはならない。此の事は特に、ユデア人の傳記を書く時に、殊に重要である。ジュステルは、ローマ帝國の各地に散在した、所謂ディアスポラのユデア人が、彼等のゲットーに孤立し、傳統を忠實に遵奉し、一般の人々と別れて生活してゐたことを證言した。(註六)

ユデア人は、古人の傳統の一を棄つるよりも、むしろ、死を選ばうとまでに、頑に思ひつめてゐた。それは、ある建築物より一の石を抜き去つたならば、外觀的には異狀がなくなるとも、時日と共に次第に狂ひが生じて、遂に崩壊するに至ると同様である、と彼等は確信してゐた。以上は、既にフィロンが證する所である。

彼等は會堂シナゴグの他に、自分等の學校、文庫、法廷、墓地を有してゐた。さうして、ローマ風の服裝はしてゐたが、父祖の法律、及び、習慣を永久に守る特權をローマ人から貰つてゐた。たとひ、ヨゼフスのやうなユデア人、ローマ人に絶大の讚美を獻げ、その驥尾に附するやうなことがあつてもそれは、自身を假りに適應させたばかりであつて、本當に變化したのではないのである。

加之、パウロを無理にでも、ギリシヤ化しようとする學者等は、使徒行録、並に、彼自身の證言さへも之を無視して、誠實聰明な彼に、卑劣な虚構、小兒らしい錯誤を犯させる。彼が直接に天上よりの啓示を得たと主張するのは、自己に動かし難い確證があつたからである。キリストの生涯、並に、その教旨については、彼は他の使徒より之を受けて、そのまゝ傳へられた通りを宜べた。彼は、ダマスコでもアンチオキアでも、ローマでも、既に他人に開拓された教會に身を寄せたのだが、それらの場所でも、彼の神學説は、承認せられ理解せられた。是等の原始的諸教會には、既に一定の聖傳があつた。この聖傳の出所は、パレスチナの教會、即ち、本來のユデア人的環境ならずして、何處たり得ようか。

要するに、何と云つても、言語學者の机上の空論よりも、彼の書簡の本文テキスト、使徒行録の物語は遙かに有力な證左であつて、歴史家は何時も是等動かす可からざる原文ドキュメントに依憑することであらう。

超自然が必須的に働いてゐる事實を語るに際して、これをその説明の中に織込む人と、『超自然は存在せず』と云ふ前提の下に、超自然的事件を解釋しようとする人との間には、世の終りに至るまでも、議論が續くであらう。

しかしながら、簡単に歴史家の立場からしてみても、前者は、彼等が取扱ふ人物の生涯を左右した信念を基礎として説明してゐる利益がある。之に反して、懷疑家は、物語の主人公たる信者の靈魂と斷えず矛盾してゐなければならぬ。自己が愛せざるもの、或は、虚偽として之を排するもの、眞相は握みにくいものであると、ルナンも白狀した。

聖パウロの歴史家ルナンも、この無理解を逃れることは出来なかつた『賤しげな、倭軀のユデア人』は、彼の怪訝と、毛ぎらひと的であつた。彼は、パウロがキリスト教の虚偽を全世界に擴めたと考へ彼を、偏狹、頑固と評した。事實は之に反して『ユデア人を儲けん爲には、ユデア人に對して、ユデア人の如くになり……弱き人々を儲けん爲には、弱き者に對して弱き者となり、如何にしても、衆人を救はん爲には、衆人にして如何なる者にもなれり』〔コリント前書、九ノ二〇—二二〕と自ら云つたパウロの、實際的方面に於ける融通性を理解しないにも程があると云はねばならぬ。

彼はパウロが空虚しき智者を輕蔑したことを許しがたく感じ、パウロは智識を否定した、且、活動の人たりしが爲に、貧弱な藝術家だつた、と云つて、今度は自分が彼を輕蔑する。

勿論、聖パウロにとつては、智識も、藝術も第一義のものではない。彼は多くの事を知つてゐた。パウロよ、汝は狂へるなり。博學汝を狂はせたり』〔使徒行録、二六ノ二四〕とのフェストの皮肉が、既に彼の智識が、教養あるローマ人をさへ、後に瞠若たらしめたと云ふ事を證するに足りる。しかしながら、彼が關心した唯一の智識は、十字架につけられたイエズスを識ることであつた。又、彼は、他のユデア人とひとしく偶像禮拜の器具となる彫像、繪畫の如きものを、重んじなかつた。しかし、彼は人體の美しさを感得し、全信徒の首長にして、生命の賦與者たるキリストの像なる頭と四肢との調和を讚美した。彼は、宏壯な建設物を愛した。さうして、よく出来た家、或は、神殿の比喻を最も愛好し、基礎を据ゑる敏き建築者に自分をたとへた。〔コリント前書三ノ一〇〕彼は、又、聖樂の趣味を有して、之を獎勵した。〔エフェソ書五ノ一九〕彼がすぐれたる詩人たりしことは、彼の書簡を讀む何人と雖も、敢て疑ふまい。ノルデンの如きは、その中に、詩の部分のやうに、韻律が現はれてゐる場所を注意した。あの榮誦の如きは讚美歌の面影がある。且最後に、近世の藝術に不朽の種子を與へた人は、誰あらう、パウロである。

『今、我等の見るは鏡を以つてして朧なれども。』〔コリント前書、一三ノ一二〕

大聖堂の象徴主義はこれである。ダンテも、ベトーフエンもこれである。我等自身が、今日、理想と

してゐるところを云ひ現はすに、此の言にまさるエピグラフはない。

我等は聖パウロを研究して、滅びた宗教の説教者、過去の亡靈を活かすのではない。彼の歴史は、我等にとつて、靈であり、生命である。我等は、この中に、我等が準備せんと欲する將來の形態すがたを素めるのである。

世界は、今や再び、使徒等の時代に似た世相に陥らうとしてゐる。

教會の面前には未來の生命を欲しないサドカイ人、快樂主義者エビキユリヤンが居る。自己に満足しきつて、習慣と、禮儀と、口上との以上に、何物をも見ないフリーザイ人が居る。運命に服従する悟性の平和を、自力のみ求めるストイックが居る。魔術と幻像とによつて、見えざる世界を測り知らうとする接神論者テオソフィストとグノスチックとが居る。無政府主義、又は共產主義によつて、地上に樂園を築からとする一千年間ミレナリア基督再臨論者が居る。それから、彼等の偶像の名をまだ變へてゐない、無数の異教徒が居る。

パウロが現代に戻つて來たならば、各國の都會で、コリントに於てよりも、遙かに多くの娼婦に行逢ふであらう。また、エフェゾに於てよりも、もつと多くの守護札まもりふだの商人を、彼に抗して同盟させるであらう。強者の憎惡と群衆の愚昧とを激發させることは、もつとはげしいであらう。世間は、彼の事業を讒し、之を歪ゆがめるであらう。彼は偽兄弟の陷罪、分裂に逢ひ、それから、もつと卑劣な異端を再度見る

であらう。彼が群衆の喧囂の間に口を開いても、何人も、彼の言葉に注意しないかも知れない。これが、彼にとつても最も苦しいだらう。

それでも、彼はやめないであらう。

彼がバルナバと共に、クプロ島に向けて出發した當時の教會の状態は、其處此處の會堂の外部に分散してゐた熱烈な信徒の小團體にすぎなかつたが、現代では、それは三億にあまる信徒を抱擁する強力なる大教會であり、その原則、並に、その目的を些も變更することなくして、二十世紀の長年月を経て來た唯一の靈的社會である。

パウロは、この教會の爲に、紀元六七年の昔に於けるが如く、一九二五年の今日でも喜んで自分の血を流し、また、同じ眞理を教へるであらう。肉によらず、靈によりて、キリストの裡に生きよ。我等の裡に活くる者は、我等に非ずして、キリストたるの心境に達し、忍耐と愛とを以つて、正義の時、惡の敗北、光榮あるキリスト再臨を待てよ、と。

人々の靈魂が、平和を得る爲には、他に如何なる教訓をも要しない。彼が惱める人類にもたらす言葉は、

『眠れる人よ、起て。死者の中より立上れ。キリスト汝を照らし給はん』〔エフェゾ書、五ノ一四〕と、嘗て

エフェゾ人に書き贈つた、そのもの、そのまゝであらう。

本書は——果して、それを云ふ必要があらうか——單に、記述を主としたのではないか。私は、また單に、事實の爲の事實に執着しない心算である。私が描かうとするのは、パウロの内面である。私は彼の総合的の肖像を仕上げようとする。これは、或は、身の程を知らぬ野心かも知れない。しかしながら偉大なる使徒よ、それは、私が、永遠の世界に入る前に、此の世で既に汝を奥底まで知悉したいと云ふ熱心な希望から生れたのであるから、汝はそれを許して下さると思ふ。汝の周圍には、種々の書籍が、山のやうに積上げられてゐる。中には、嘗て汝に擲げられし石塊で出来たとさへ思はれる、誤謬のもの、虚偽のものも少くない。學者にしか適しないが、ごく優れた本もある。私の書物は、正確な史實を離れず、それで居て、汝を無學者にも近づき易くしようとしたのである。汝の傳記者中には、汝の肖像を柔らげ、異教的にした輩もあるが、私は汝の面影に、そのヘブレオ風な神聖な嚴肅さを恢復すのである。

私は、パウロの記念が残る名高い國々を旅行して、彼の足跡を尋ねてみた。サロニケの丘陵の上からは、彼がヴィア・エヤニシアの街道をたどつて、此の地に到着した時に、ながめたであらうそのまゝのオリンポス山を、私も雲間に望見した。『シリシアの門』を過ぎて、タウルス連山の峡谷に入つては、彼が渴を醫したであらうと思はれる溪流の水の一掬を、私もすゝつた。偉大なるアジアは、數回にわたる

蠻民の侵略に昔日の面影がない。回教徒は、古代の町々を、焦土に委してしまつた。しかしながら、山河は、今も、さながらの形貌を止めて、思ひ掛けない種々の事實を、私に啓示してくれた。

例へば、タルソから、タウルス連山を超えようとした時、案内者は、金字塔の形をした小高い丘陵の中腹にある一の洞窟を指さして、私に、此處がパウロが隱遁者の生活を送つた蹟であるとの、古傳説を教へてくれた。使徒行録の記事によれば、使徒がエルサレムで始めてヘレニストのユデア人と衝突した後、彼等がパウロに危害を加へようとしたので『兄弟等覺りて、彼をカイザリアに送り、タルソに往かしめたり』〔九ノ三〇〕と云ふ。彼が此處で過ごした三年間は、隠れた祈禱の生活であつたらしい。何故ならば、記者は、次で『バルナバ、サウロを尋ねんとて、タルソに至り、之に遇ひて、アンチオキアに伴ひ行き』〔註八〕と、記述を續けてゐるからである。サウロがタルソで公然の布教に従事してゐたと假定する解釋家は、此の事實を説明するに困難を感じる。

パウロが、活動してゐたならば、何故にバルナバが、彼を『探ね』彼を『發見』しなければならなかつたか。之に反しても、もしも、其處に沈黙、隱遁の時期があつて、パウロが洞窟に行ひすましてゐたとすれば、此の困難の解決は極めて容易になる。洞窟の正確な所在地とか、古傳の指示するそのもの、眞偽の如き問題は重要でない。古代の記憶の名残りである洞窟の觀念が、本文に適應する説明の途に我

等を導いてくれるのである。

タルソでも、私は下に述べる相似に非常に驚いた。シリシアの平野が西にタウルス連山の高峰に界せられ、その中をシドヌス河が紆曲しつゝ海に流れ落ちる状は、サビーナ地方の山脈からテヴェレ河が流れて来るオスチアの平野に酷似する。パウロが殉教の場へ歩を進んだ時に、彼の眼前に展開した景色は彼が少年期を過ごした土地そのまゝであつた。さうして、一方に於て險しく遮られ、他方は廣漠として際涯もないこの双方の風景はともに、彼の靈魂のさながらの象徴であつた。しかしながら、パウロの遍歴した、殆どすべての地について『彼の國はもはや彼を知らず』と云ふことが出来る。タルソの町には聖パウロの門、聖パウロの井戸と稱するものがあるが、名のみにして、使徒と何等の關係もない。ダマスコでは、最早、眞直でない『直町』すくのまちにある、アナニアの家と傳へられる家の中で、彼の面影を發見する爲には、異常の空想力が必要であり、又、信者等が彼を籠の中に入れて吊下げたところだと云ふ、廻廊となつてゐる城壁の一部でも同然である。彼が異象を見た地點について議論が分れてゐる。通説によれば奇蹟は町のごく近所で起つたと云ふが、他の傳説は、町から三里ほど隔つた地點を指示してゐる。

エフェゾでは、私は書記官が暴徒化せんとした群衆に演説をした劇場の舞臺に上つた。南國の太陽の下に、眞新しきものゝ如く輝く純白の舗道は、彼が必ず踏んだものに相違ないが、その跡は何も残つて

ゐない、エフェゾはパウロよりも、ヨハネを覚えてゐる。私は其處の嚴肅にして甘美なる景色の中に、福音書の章句の中にあるやうな韻律的な一種の感情を感じ得た。

エルサレムでは『岩の殿堂』(註九)にゆくと、左手に、古代のアントニア岩の跡に建てられた、トルコの兵營がある。こゝでは、パウロがユデア人の群衆に、神殿の外に牽出される状、ローマの士官が兵卒をひきゐて、彼を救助する爲に、砦の門から駆け出す状を想像することが出来る。しかし、それも、遠くからの追想で、パウロが激昂してユデア人にした演説を、明瞭に思出させる何物もない。

古代コリントの遺跡ではアメリカの考古學者等が、レケウム Lechaum 港へ下りてゆく街道を發掘した。今日、この道は絲杉の並木と繁茂する葡萄樹との間を通るが、パウロの時代には、その兩側は穹窿アーチになつて、東洋諸國の何處にもあるやうな、小さい店が並んでゐたのである。私共がある一基のローマの標柱の傍に來た時に、其の邊を管理してゐた番人は、地に拵め込んだ一枚の平たい石を指して、滑稽な程眞面目な調子で云つた。

『此處は使徒パウロが説教をした處です。』

『どうして解るのです?』

と私は反問した。

『發掘の先生がさう仰しやいました。』

私は別に議論もせず、單純にさう信じてゐる人に疑惑を起させようとしなかつた。要するに、パウロがこの繁華だつた道を歩いたことは、極めて確實である。アクイラとプリスカとは此の附近に店を有つてゐたかも知れない。彼等は、パウロが作る天幕の爲の材料を賣つてゐたのである。

アクロコリントは、私共の前に、巨大な劇場の奥壁のやうに聳えてゐた。頂上に一千人の巫女が仕へるアフロディテ女神の宮があつたのは、此處である。(註十)間近く、古い大きな石段があつて、その上には、六本の不格好な太い石柱が、いまだに長押を支へて立つてゐる。こゝには、ネプチューンか、アポロの神殿があつた。蒼黒い雲間を洩れた太陽の光は、にはがぎ俄分限者、古コリントの、無趣味な榮華のたゞひとつの名残りなる、灰色の柱幹を照し出した。私共の右には、パラコーラのけはしい山背が、眞青い灣の水に臨んで聳えてゐる。その上に、遙かに遠く、パレナス連山が、非常に鋭い、犬牙の錯綜するが如き山容を示して列つてゐる。左方には、之に對する他の山脈が、もつと穩な線を描きながら、海の方に漸々と低くのびてゐる。私共の前には、絲杉と、黄くなつた葡萄圃との下に、海がある。海は私共の背面にもある渺茫たる大洋が突出する岬角に抱かれて、私共に呼びかけてゐるやうだ。これが呼吸する煙波は、山と云はず、地峽と云はず、この一體を包藏つんでゐる。パウロは、あまり風景に心をとゞめな

かつた。しかし、この風景は、たしかにパウロの氣魄を宿すものである。

嵐の日の太陽が照らし出したこの石柱は、傲慢と、富裕と、邪淫とに滅んだ教會のよい都徴ではないか。彼が潔めた、しかし、遂にその死を救ふことが出来なかつた町の。

かくの如く、私は、コリントで始めて、使徒の存在の幾部分を感じた。しかし、それが充滿した活々としたものとなつて、彼の聲の耳朶に響くが如く私に思はせたのは、アンデスのアクロポリスの下、アレオパグの丘陵の上であつた。

私が神聖な丘陵を昇つたのは、彼を覓めんが爲であつた。以前にも、私は杉林の傍から、この巖丘に昇つたことがある。そこからは、新しいアデンスの町と、堡壘の不規則なる側面を圍む城壁とを見下すことが出来た。アクロポリスを前にして、私は、ギリシャの使命、その使命とキリスト教の啓示との關係、と云ふやうな事を思つたのであつた。しかし、私は、ある日曜日の晩に、この不朽の場所に來てパウロが、アンデス人に對してした演説を、黄昏の微光の中で讀んだ。

もし、彼が此の地點で、この演説をしたならば、——私はさう考へるのが嬉しかつた——彼は右に、アクロポリスの高臺の上に、その端に聳えてゐるアテネ・ニケの神殿を始め、その他、宏壯なるプロピレア、人像柱に裝飾かざられてゐたエレクティオン、華麗なパルテノンの殿堂等が相並ぶのを見たに相違な

い。アクロポリスの表面は、此の當時には、神像と殿堂とで蓋はれてゐた。今日では、青空の下に廢墟がある。一切の神像は崩れ落ち、たゞ石柱のみが直立して、恰も祈りつゝあるかのやうに、残つてゐる。その大きな繪様帯の一片の上に、跪いてゐる婦が、彼女の爲に何事をもなす能はざる神に向つて、兩手をさしのべて祈つてゐるが、これが彼女の哀憐を請うた『知れざる神』ではなかつたらうか。

此の晩、私共がアレオパグの石段を登つた時、恰度、コリントに於る時のやうに、太陽が雲を破つて出現した。さうして、一筋の光線は、褐色に焦げた建物と岩の上に落ちた。パルテノンの蔭にも光がさした。繪様帯の中に居た、後脚で立ち上つた一頭の馬は、忽然、再び生命を取戻した。壊れかゝつた、軒蛇腹も、壁の上部にゆるんでゐた石塊も、みな金色に輝き出した。遠くの海も明るくなつた。その中に、暗い岬角と島々との輪廓が、更にほがらかに、更に活々と浮出した。

此の光榮は忽ちにして消え失せた。しかし、アクロポリスは、より偉大なものとなつたやうだつた。ニケ〔勝利の女神〕の神殿は、最早、翼なき勝利のやうには見えなかつた。私には、それが軽くなつて、宙に浮んだやうに思へた。私共の周圍の岩は、もはや、さだかに見え辨かず、ヒメット山の長い山背、プニツク山の隆起も黒くなつた。聳え立つリカベツト山の頂上、森の上部に、白い聖堂がくつきりと見えた。大きな市街に無数の燈火が閃々とする頃には、聖堂のあたりにも一點の燈火が輝き出した。さう

して、突然、喜ばしきやうな鐘聲の、重々しい響が、矢つぎ早に、幸福に酔うた讚美歌のやうに、あちらこちらから鳴り出した。

主日の夕の歡喜の鐘聲は、パウロの勝利であり、アデンスの死せる神々に對するキリストの永遠の支配である。私は小さな使徒行録の一卷を披いて、聲高く讀み出した。

『アデンス人よ、我は、汝等が萬事に於て、宗教心の甚だ厚きが如きを認む。即ち、通りがけに、つらく、汝等の禮拜物を見て、知れざる神に捧ぐ、と記せる詞をも見付けたればなり。されば、我、汝等が知らずして尊べるその者をば汝等に告げん……〔二七ノ二二―二三〕。』

私は、パウロがかう云つてゐるのを聞いたかのやうな、一種の戰慄を感じた。何故ならば、それは、確に、彼の唇を洩れた言だからである。異教徒が漠然として『眞理』を待てる狀を如何に正確に云ひ現はせしぞ。しかし、説教者は續けてゆく。

『世界と其の中に在る一切の物とを造り給へる神は、天地の主にて在せば、手にて造れる宮に住み給はず……我等は神の裔なれば、神を金、或は銀、或は石、即ち、藝術、及び、人の想像に由れる彫刻に似たる者と思ふべからず。』〔同上、二四―二九〕

かく宣言しながら、パウロはパルテノンの方に手をさしのべたに相違ない。彼の靜な呪咀の下に、偶

像はわななきつゝ地に倒れてしまつた。

あゝ、偽りの神々よ、我等の裡に眞神の活き給はんが爲に、死ぬがよい。女神アテネよ、汝の戦帽ヘルメットの鏘が、汝の眼に入らないか。汝の槍の電光は消え失せよう。航海者の燈臺となつた、汝の神殿の燈火も消えてしまふのだ。汝の偶像には、裁縫の指導の指貫きを切出すだけの象牙も残らないだらう。しかし汝が虚偽に變へた智慧は、活ける者と死せる者とを照らすであらう。審判者は間もなく來りたまふ。彼に於て一切の肉は不可知のものを知り、彼に依つて、地上のもの、天上のもの、一切は、十字架の上で獻げられた鮮血の平和のうちに和睦される。

絹の被覆布ヴェールのやうに、夜がアクロポリスと私共との上に、その帳帳を下す間に、私は快美の感を以つてかの神祕的な一句をくりかへした。

In ipso vivimus movemur et sumus. 彼にありてこそ、我等は且活き、且動き且存在するなれ。——彼のうちに、即ち、見るべからざる靈の能力のうちに、我等は存在と、運動と、神的生命とを有するのである。さうして、これは、活ける我等が、茲に呼吸し、神を讚美しつゝある此の地點に於て、嘗てパウロが云つた言葉であつた。

(註一) ロベスピエールと共にフランス革命を遂行した人。

(註二) その意味は『我が建つべき教會は皆建て終りたり』との義である。

(註三) ヘブレオ書が彼の筆でなかつたとしたならば。

(註四) この點は、今日、之を否定する學者があるが、本書、第七二頁以下を参照されたい。

(註五) 特に Norden, Agnostos theos; Ramsay The cities of Saint Paul; Toussaint, l' Hellenisme et l'apôtre Paul 参照せよ。

(註六) Juster, Les Juifs dans l' Empire romain.

(註七) これに關しては、彼の自叙傳中、ことに自分の教育について記す所を讀むがよい。

(註八) 一一ノ二五。こゝに使つてあるギリシヤ語は行衛不明の人を探すやうな熱心なる搜索の意味を有する語である。

(註九) 俗にオマルのモスクと云ふ。

(註十) アクロコリントに關しては、ルイ・ベルトランの『太陽のギリシヤとその風影』を参照されたい。

一 迫害者サウロ

ステファノの殉教

聖パウロの生涯は、最初より最後まで、吹き荒ぶ暴風のやうであつた。この物語も凄絶、悲壯な場面で始まる。

それは十二使徒が、靈の教役と物の分配との職務を別つ必要を感じて、『食卓の給仕の爲に』七人の執事を選んだ、その日からである。〔使徒行録、六ノ一〕

『生命の爲に何を食ひ、身の爲に何を着んかと思煩れ勿れ』〔マテオ、六ノ二五〕との御言は、弟子等の耳にいまも響いてゐた。これを戒律のやうに實踐する爲に、彼等は萬事を共有にした。富める信者は、或はその歳入をさき、或は己が田畑又は住宅を賣つて、その代價を獻げ、或は貧しい兄弟を己が家に宿した。その當然の結果として、信者はみな貧困になり、その人数は頗つべき金品と反比例して増加したから、貧しい兄弟の需要を充たすと云ふ仕事は、至極複雑になつていつた。

個人にとつては、清貧は幸福でもあらう。しかし、教會にとつては、『五羽の雀が四錢で賣られ』〔ルカ一ノ二六〕一壘の油が二錢だつた(註一)エルサレムに於ても、さう簡單には行かなかつた。完徳を追はんとする望は萬人に平等ではない。或人々は日々の施物の分配に不平を起した。恐らくは、子供等を抱へてゐた寡婦等は、他人よりも多くを要求したであらう。かくて彼女等を中心にして嫉妬の吠の聲が起つた。

彼女等は、所謂『ヘレニスト』即ちギリシヤ語のユデア人で、シリア、クレネ、エジプト、ローマ等に棲み、當時の世界語であつた卑近なギリシヤ語を使用してゐた。

是等『ヘレニスト』が、後にパウロの面前で不平を鳴らし、罵り喧ぐフテオチツク狂信者であつたのである。彼等は、外國から聖都エルサレムに歸來したばかりなので、その狂信はさらに劇しく、自らヘブレオ語のユデア人に對して、特殊の一團を造つてゐた。後者は放蕩息子の比喻の長子のやうに、たえず父の傍に居た爲に、他國から父の家に歸還した末子に對して、輕侮の念を抱いてゐた。ヘレニストと云ふ名稱さへ一種の疑惑を含んでゐた。恰も、多年、異邦人の間に居を構へ、その言語を使用してゐた事實が、直ちに彼等の汚れとなつたかのやうに。

ヘレニストは商賣人である。彼等はユデア教を擴める爲に、それにギリシヤ風の假漆ニクスを塗つた。智的

教養は、奸計と金銭とがさうであるやうに、征服の爲の一つの手段である。彼等は、ユデア教の新信者を作る事を以つて、自ら誇としてゐたが、要するに、打算的國民主義者に過ぎなかつた。彼等は、靈の宗教の實現をはかる人々が、その醜い手段を否定する時、牙をむいて之に反抗する徒輩なのである。

キリストの教を信じた者にさへ、(新宗教は彼等の中での純良な人々の心を捉へたのであるが)、やはり何處かに猜疑嫉妬の念が残つてゐて、彼等の仲間の寡婦等の爲に、兄弟等に對して口やかましく眩きだした。十二使徒は、教會の平和の爲を思ひ、この共同生活に、經濟的の組織を決する必要を感じて、此の事件を機會として、七人の執事を選定した。(註二)

恐らくは、信者等が七人の名を選んだのであらう。七人はみなギリシャ風の名を有つてゐた。さうして、アンチオキア出身のニコラが異邦人出身であつたのを除けば、他は残らずユデア人であつた。使徒等は祈禱しつゝ、彼等に按手して、靈の權能を與へた。單にパンを頒つばかりが彼等の職務ではなく、執事等は、なほ、ユカリスチヤの秘蹟に參與し、洗禮を施し、説教をしなければならなかつた。

かくて、愛徳の業の爲に選ばれたステファノは、『恩寵と勇氣とに充ちて』不思議なる賜物を身に有してゐた。彼は『大いなる奇蹟と徴とを人民の中に行ひ』慰め勵す貧民、奇蹟的に癒す病人にイエズスの教を説いた。ステファノ殉教の動機は、彼自ら進んで、ギリシャ語のユデア人の會堂に行つて、宗論を

挑んだ事であらうと解する學者がある。しかし、それよりも寧ろ、彼の奇蹟と傳道とに業を沸したユデア人が、己の會堂シナゴグの狂信的な過激の説教者をやつて、公に爭論し、彼を辱しめ彼の勢力を挫かうとしたと考へる方が正しいだらう。

その中には、シリシアの會堂シナゴグよりの人々もゐた。タルソのサウロもこの會堂に屬してゐた。サウロは紀元一〇年乃至一二年の出生であるから、三六年の當時には、二十三歳乃至二十五歳の青年であつた。ファリザイ人の攻撃は、主としてキリストに關する事であつた。ところが、爭論の結果は明に彼等の敗北で、彼等はステファノの智慧と、彼に於て語り給へる聖靈とに、抵抗することが出来なかつた。

こゝに於てか、彼等は最後の手段に出で、彼を葬り去る爲に、モイゼと、神殿と、律法に對して冒瀆したと偽證した。神殿に對する冒瀆は最も恐るべき冒瀆である。嘗て、イエズスが法廷に牽かれたのも、この訴の爲であつた。

神殿は、イスラエルの國運の興隆、長久の徵、ヤヴェの民の誇りと富との結晶であつた。唯一の神の宮居、世界の眞の中心、神の光榮の棲まひ給ふ所。すでに遠くより之を望んでも、恰も、白大理石の小山の如く人の目を眩じた。屋蓋の尖端に閃く黄金。廻廊に並列する大理石の柱。黄金と白銀との延板に飾られし九の門。第十の門はコリントの青銅で造られて、歴史家ヨゼフスの傳ふる所によれば、その重

きこと之を鎖すに二十人の青年の力を要したと云ふ。「ユデア戦史」二ノ一七其の内部では、朝まだきより夕に至るまで、絶えず犠牲が屠られて、牡山羊と牡牛との鮮血は祭壇にほとばしり、燄々と燃える火焰に交つて、燔祭の脂の煙が雲のやうに舞上つた。喇叭の聲、角笛の音は、詩篇の唱和に應じて聖都に響き渡つた。神殿の藏する財寶、コルバン「マルコ、七ノ一二」の富は、吾人の想像を許さない。神殿の梁木の中に黄金の桁構けたぐみが隠されてゐて、その重量は三百ミナであつたと傳へられてゐる。(註三) 神殿と巡禮と犠牲とが無くなつたならば、エルサレムの商人も、パレスチナの牧者も忽ち糊口に窮することゝなる。

されば、今、ステファノが神殿の尊嚴を傷け、その滅亡の可能を語つたとすれば、それが、ユデア人にとつて、許すべからざる大罪なるは不思議でない。まして彼等が滅亡の豫言の實現を、何となく豫感せざるを得なかつただけ、憤懣は深かつたのである。

ステファノの讐敵は、恐らく神殿の構内で、人民を煽動して彼を捕へたのであらう。乞食と、激し易い巡禮の旅人との多い、また、數百を算する會堂シナゴクの間に連絡があつて一齊に行動することが出来るエルサレムに於て、この舉に出づるは極めて易々たるものであつた。しかし、ステファノは群衆を恐れなかつた。彼自身を害さんとするイスラエル人によつて殺された義人、「人の子」の爲に證言するを憚らなかつた。

彼等は、長老と律法學士とファリサイ人とを證人に立て、飛掛つて彼を捕へ、獄につなぎ、次で衆議所の法廷に牽き出した。

もしタルムツドを信んずべくんば、『神殿の滅亡に先立つこと四十年、死刑執行權はイスラエル人の手より奪はれた』と。しかし、實際は、ローマ官憲の壓迫の手がゆるむを感じるや否や——ステファノの裁判はピラトの失脚、不在の時機に當つたに相違ない——衆議所は、自己の裁判權を恢復しようと努めた。もつとも、ローマ人も、宗教問題に關する犯罪の裁判權は、之を認めてゐたので、たゞその宣告がローマ人なる總督によつて認可さればよかつたのである。しかし、ファリサイ人は、これに大なる屈辱を感じて、機があれば獨立的に行動したいと、常に考へてゐた。

ステファノに對しても、彼等は、嘗てイエズスに對した時のやうに、暴力と詐謀とを混用した。まづ人民を煽動して騷擾裡に彼を捕縛する。嫌疑者は正式の裁判を受けずに刑場に牽かれる。しかし、その全體を通じて、一種の法的形式に似たものが適用される。それで實際は法的形式が裏切られる。ステファノの最後は、ヤヴェに獻げられた赤い外套と二百シケルの銀とを盗んで、アコルの谷で民衆に石で撃殺されたアカンの死を思ひ出させる。「ヨシユア記、七ノ一八—二六」

衆議所の議員は、神殿の境内で集會した。會議室は半圓形で、其處に居並ぶ議員達は互に顔を見合は

せたり、合圖をしたり、眼くばせを交すことが出来た。(註四)その左右の両端には書記が控へてゐて、問答を速記した。中央の座席は大司祭の座である。大司祭は、かゝる公の場所では、眉間にきらめく純金の板(註五)と、胸にかけた、イスラエルの十二族の象徴なる十二の寶石を嵌めたラシヨナル〔又は胸當〕で、一目にそれと認められた。

裁判官の前には、二十三人づゝの弟子の三列が座を占めてゐた。恐らくは、その中に、物凄い眼付でステファノを瞰んでゐるサウロが居たのであらう。

嫌疑者は今や法廷の只中に立つた。彼は純潔な若者である。

我等は、かのナザレトのイエズス、此の所を滅し、モイゼの我等に傳へし例を變ふべし、と彼が云へるを聞けり』と、證人等が云つたその言も、殆ど彼の耳に入らずして、恍惚の状態にあるかの如く、彼を憎悪する人々の眼から出る憤怒の焰も、彼の顔面に於て天使の輝と變ずるかの趣があつた。古、イスラエルの王等の進み出た豫言者のやうに、彼は己が裁判官を責め、且、審くのである。すこし後に、神殿より突落され、次で石責に逢つた小ヤコボと、彼ステファノとは、實にユデアの最後の豫言者であつたのだ。

大司祭は彼に應答を促がすやうに、しかも罪狀はあまりに明白である、と云ふかのやうに、『是等の事

果して然かる』と問うた。

ステファノの應答は、莊嚴な大説教であつた。パウロは、後日、その眞意を了得するであらう。自己を辯護する代りに、彼は、アブラハムの受けた約束の日よりの、イスラエルの歴史を回顧した。さうして、それが神殿の存在、モイゼの律法以上のものたるを證しようとした。

數百年に亙つて、イスラエルも、その神も、漂浪の日を送つたのである。ヤヴェの幕屋は、遊牧の牧人が一夜を明す天幕であつた。モイゼが燃える茨の焰の中で、主の聲を聞いた土地が眞實の『聖地』である。その後、ヘブレオ人は、沙漠の中で、アアロンに『汝は我等に先んづべき神々を我等の爲に造れ』と云つて、偶像の前に拜跪し『天軍』に事へた。ヤコブの神の爲に家を建立したのは、サロモンであつた。『然れど最高き者は、手にて造れる所に住み給ふ者に非ず、即ち、主曰く、天は我座なり、地は我足臺なり、汝等如何なる家をか、我に造らん……、と豫言者の云へるが如し』

夜、暴風雨が近づく前、稻妻が忽然と遠い地平線の光景を浮出させて見せるやうに、ステファノはその大事件を通じて、己が民族の歴史を物語つた。彼は、兄弟等に棄てられ、賣られる『認められざる義人』の受難を、ヨゼフとモイゼとの前徴かたどりの中に明に示して、この物語に挿んだ。又神殿に對する物質的の信仰は、偶像拜禮と何等の異なる所なきを告ぐるを憚らなかつた。

聴衆は、彼の言を聞くにつれて、忿懣の益々高まるを感じた。老ファリサイ人は、長い筒袖の中で手を組んで、不安の氣に驅られてゐた。若者等は身ぶるひをしたり、小聲に呟いたりした。ユデア人等は被告の一身上の辯護の權利を尊重した。先祖の過去の物語、ことにそれが光榮の再來、昔日に於けるが如き國運の隆盛の豫言を交へて語られる場合には、彼等は何時までも聞飽くと云ふことはない。ステファノは、師イエズスに等しく、律法學者、演説家と異つて『權威を有する者の如く』語つた。しかし、彼の説教が固陋なるユデア教に對して、漸次に鋭鋒を現し來るにつれて、人々の憤怒は堂に満ちた。しかしながら、敢てこれを避けんとせず、反つてそれを無視するかの如く、俄然彼の高聲は法廷に響いた。恐らくは、使徒行録に今日つゞられてゐるその儘が、この熱情の響であつただらう。

『頸強くして、心にも耳にも割禮なき者よ、何時も聖靈に逆らふこと、汝等の先祖の爲し、如く、汝等も亦然す。汝等の先祖は、豫言者の中の何れをか迫害せざりし。彼等は義者の來臨を豫言せる人々を殺したるに、汝等は今この義者をば賣り、且殺したる者となれり。又天使によりて律法を受けしも、汝等は之を守らざりき』と。

聴衆は身慄をして怒つた。彼等の胸はステファノの一言一句に裂くるが如く、切齒をして怒つたのである。東國で群衆の憤激する光景を見たことがある者は、この恐ろしい瞬間の衆議所の状態を、容易く

想像することが出来る、白い上衣の動搖、火を吐くやうなすさまじい眼付、食ひしめた顎、とがつた鼻今にも被告を引き裂かんばかりにわななく手指、兇暴な口笛、嗚れたうなり聲。

ステファノは萬事に無關心であつた。彼は頭の上に渦巻く死の脅嚇に氣が付かなかつたのだらうか。彼は、恍として、約束の喜悅、天國の幸福に酔つて、之に心を奪はれてゐたのだ。あたかも光明の柱の如く、法廷の只中に直立してゐた彼は、俄然、神の其の場の實在を告げんとするかの如く、天を仰ぎ、見えざる光に兩手を擴げて叫んだ。

『看よ、我、天開けて、人の子が神の右に立ち給へるを見奉る』と。

冒瀆の極み。彼は、ナザレト人の光榮、その復活を證するのである。

ユデア人は、もう堪へ切れなくなつた。満場狂せるが如く總立となつて耳を覆ひ、こぞりて撃つて掛つて、冒瀆者を衆議所より追出せば、群衆は鬨の聲を作つて口々に罵り合ひ、彼を取圍んだ。しかし、彼は、すぐに其の場で、石撃にされなかつた。

レビ記の命によれば、『冒瀆者を營の外に曳出すべし』〔二四ノ一四〕と。群衆はステファノを市街の外に牽出した。恐らくは、エルサレムの北にある、小高い丘に連れていつたのであらう。

律法によれば〔タルムッド〕『刑場より凡そ十肘を隔てたる所にて』罪人を赤裸となし、次で罪惡を告白

させる。『あらゆる處刑人は罪惡を告白す。告白したる者は來世の生命を得ん』と。刑場は人の身長の二倍の高さの場所で、まづ立會人が、罪祭の犠牲に對するやうに、罪人に接手する。次で、その一人が罪人を壇上から突落す。この時、罪人は腹を下にせず、背を下にして倒れねばならぬ。かくて、既に死したれば最早何事をもせず、死せざれば他の立會人は石をとりて、その心臓に擲つべし。かくてもなほ死せざれば一同石を以て彼を擊殺すべし』と。

しかし、ステファノ處刑に於ては、ユダア人は以上の規定に従はなかつたらしい。二人の立會人は、身輕になる爲に、上衣を脱いでサウロと云へる青年の足下に置いて、すぐにステファノに石を擲つたステファノは跪き、やがて倒れるに至るまで、其の場に立つてゐた。されば、この刑の執行は、半ば法律的、半ば騷擾的で、彼の殉教は、キリストの受難の短い繰返しであつた。彼はキリストの苦惱を默想して、ステファノと云ふ己が名の表はす『王冠』を受けんと心がけた。弟子の苦は、師の受難に比すれば遙に輕かつたが、少くとも、獻身の覺悟は完全でありたいと願つた。

『主イエズスが魂を受け給へ』と。

次で地に跪き、聲高く呼ばはりて、

『主よ、此の罪を彼等に負はせ給ふこと勿れ』

と祈つた。

赦宥の教は救世の根本である。神にして人たる御者が、己が血によつて、赦し難い罪惡を赦し給ひたる後、何人か敢て仇敵に復讐を誓はらう。しかし、ステファノは仇敵を赦したばかりでなく、死刑執行人の爲に一身を犠牲にして、彼等のうちの或者、恐らくは彼の知人なりしサウロの改心の爲に祈つたのである。

サウロがステファノの裁判及び處刑を通じて、どんな心持でゐたか、我等はそれを知り度いと思ふ。ステファノに對する彼の憤怒は、傷けられた愛から生じた。律法とあらゆる聖なるものとは正義を要求する。冒瀆者は、死を以つて、罪惡を償はねばならぬ。

サウロがステファノの説教でどんな印象を受けたか、我等は毫もそれを知らぬ。彼の恍惚^{エキスタシス}、及び『我天開くを見る』との叫聲を、共に己の承認せざる異端の冒瀆的證明と思つたであらう。何物よりも強い、熾烈な信念に一事實が矛盾すれば、すくなくとも其の人の意識生活の中に於ては、此の事實は存在しないと同等である。

殉教者の周圍に賤民が罵聲をあげ、死刑執行人が彼を取巻いて道傍の小石を拾つてゐる時に、サウロは憤怒に蒼白となつて、胸を轟かせつゝ棒立ちに立つてゐた。彼は自分では石を擲たなかつた。人々が冒瀆者を打殺すのを見るだけでよい。さるにしても、自ら守ることを爲さざる此の人の冷靜さよ。亂投

する石礫は、彼の額をうち、さし延べた其の腕かひなに當つた。赤裸々の其の胸から、腹から鮮血が迸つた。しかし、苦悶の呻はその口から洩れず、反つて幸福なる犠牲として神に祈る聲は朗であつた。やがて、ステファノは心臓部か、或は頭部かに致命傷を負つて、己が鮮血にまみれて地上に臥したが、その状は恰もこゝろよき眠についた人のやうであつた。何と云ふ頑固な偏見だらう、とサウロは考へたに違ひない。ナザレト人の異端には憐憫なき嚴罰が必要である。たとひ心中に一種惻隱の情を感じても、彼は直ちに之を女々しい感情として退けた。さうして、再び城門をくゞつた時には、キリスト信者に對する彼の憎惡は、更に一段の劇しさを加へてゐた。

(註一) シユワルム『ユデア人の家庭生活』

(註二) この七と云ふ數字については種々の憶説がある。十二に對する七は使徒に對する服従の象徴であつたらうか。イエズスが奇蹟的にふやした七個のパンの記念であつたらうか。或は天主の御前に待てる七天使の象徴であつたらうか(トピア書二二ノ一五)。或はエルサレムに、七ヶ所の集會所があつて、執事は各々その一所を司會したものであらうか。すべて假説である。彼等が悉くギリシヤ語の人であるのを見れば或は既にヘブレオ語のユデア人出身の執事がゐて、信者が増加すると共に、執事に不足を感じて、新にギリシヤ語の人々から七人を任命したのかも知れない。

(註三) ヨゼフス『ユデア古代史』一四ノ一二。一ミナはヨゼフスによれば一〇六八瓦餘りであるが、ヨゼフスの言には誇張が多いから三百ミナと云ふ數字も直ちに信用する事は出来ぬ。

(註四) タルムドによれば、これが議員座席の半圓形なりし所以である。

(註五) それには『ヤヴェエに聖なるもの』と鏤刻つてあつた。

(註六) 『かく云ひ終りて主に眠りけるが』使徒行録。

サウロと『教會』

司祭長のカイファも、民の長老達も、この點ではサウロと同じ意見であつた。一度血を見ればもう其の儘には治らぬ。ステファノの弟子等と敬虔な新信者達とは、殉教者の遺骸を收めて、悲哀の裡にも盛大な弔をした。(註一)

このやうな次第で、執拗な異端を抑壓する爲に、組織的の迫害が決められた。此の事はカリグラ帝の治世の初期、ユデアに於けるローマ總督が帝の怒にふれて遠ざけられ、其の後任者は未だ來らず、ユダヤ人が多少自由に行動する事が出來た時機に於てのみ、實現が可能であつたのである。

この時の迫害は、ナザレ派(註二)の中でも、ヘレニストを目標としてゐた。彼等はステファノのやう

に、神殿、及び一步進んで律法をも安定せんとするの大膽さを示してゐたからである。十二使徒等は生粹のパレスチナ人として、モイゼの律法を尊重することを怠らず、エルサレムに止つてゐたが、此の際には差當つて危険を感じなかつたらしい。之に反して、ヘレニスト等は迫害によつて各地方に離散したが、これが自然に福音の頒布の機会となつたのである。

サマリア、シリア、アレキサンドリアの教會の濫觴は、この頃に求むべきであらうか。アンチオキア及び、ダマスコには、夫々一群の信者が住んでゐた。サウロはこれから間もなくダマスコに信者を捕縛しに出向いてゆくのである。

ステファノの殉教に際し、助手として、即ち上衣の番人としての役をつとめたサウロが、暫くの後に衆議所から派遣され、今日で云へば高等警察官のやうな役目を、狂氣の如く働くに至つた経過はどうであつたらうか。彼の奮發、事に當りての熱心が衆議所の注目を惹き、また、生來、人に長たるの性格が自然に彼に備はつてゐたせいもあらう。革命、暴動等の『恐怖時代』には、いつも、青年が運動の首領となるものである。

使徒行録の記者は、當時のサウロの凄じい活動を好んで回顧し、三度に互つて之を證言してゐる〔八ノ三、二二ノ四―五、二六ノ九―一二〕サウロは疑はしい家々を搜索し、男女を引出し、拘留し、笞刑を加へ、

背教を強ひ、或は、彼等をエルサレムに引來つて、法廷に付し、處刑を求めた。

パウロ自身も四度に互つて、迫害者たるの過去を、己が書簡の中に物語る。〔ガラチア書、一ノ一三―一四、コリント前書、一五ノ九、フィリッピ書、三ノ六、チモテオ前書、一ノ一三〕彼が更に之を繰返すことをしなかつたのは、此の物語は、すでに、各教會に知れ渡つてゐたからである。

『蓋し、ユデア教に於る前の行狀如何は、汝等の聞きし所なり。即ち、我は、神の教會を甚しく迫害して之を荒し、わが族中なる同年輩の人々に優りてユデア教に進み、わが先祖の傳の爲に一層熱中して奪發し居たりしなり』とは、彼がガラチア人に書贈つた一節である。

吾人は、パウロが十五年、二十年の後に於て、己の過去を誇張して、自分の改心は、己の意志に出たのでも、自己に功德があつた爲でもなく、全く突然の間に、何等の準備的行爲なく行はれた、と云ふことを力説する爲に扮飾を加へたのであらうと疑ふ理由はない。

怪むべきは、寧ろ超然たる彼の告白の態度である、彼の迫害の過去の記憶も、こゝには一言片句の悔恨の辭となつて現れない。彼は後年至極自然に、チモテオに、神の恩寵を得た其の理由を告げる。

『我を堅固ならしめ給ひし我主イエズス・キリストに感謝し奉る。其は我を聖役に任じて、忠信なる者とし給ひたればなり。即ち、我、曩に冒瀆者、迫害者、侮辱者たりしかど、信ぜざる時、知らずして爲

しゝが故に、慈悲を被りたるなり』と。

サウロの憤激は、これによれば、唯一の眞理なりと、信じ切つてゐた宗教に對する、熾烈なる熱誠より迸つてゐたのだ。パスカルの左の一言は、サウロの兇暴の理由を充分に説明するに足る。曰く、

『凡そ良心の命令によりて、惡を行ふ時よりも、更に徹底的に、更に愉しく、之を行ふ事はなし』と。

しかし、吾人は、同時に、第一世紀に於るユデア人の靈魂、及びその周圍の世界を充分に知悉して置かねばならぬ。

イスラエル人を、全然、兇惡殘忍の民族と解したならば、非常な誤謬である。イスラエルの歴史には慈悲柔和の物語も決して例外ではない。ヤヴェエの戒律は生來苛酷の性分をも、柔げ得たのである。

『汝、心を盡し、精神を盡し、力を盡して、汝の神を愛すべし』〔申命記六ノ五〕

ヤヴェエとヤヴェエの民との間には、恐怖のみにあらずして、一脈の春風が通つてゐた。

『汝の神ヤヴェエは人のその幼子を肩に背負ふが如く、汝を背負ひ給ひき』〔同上、一ノ三一〕とモイゼは教へる。

家庭生活に於ても、父子の間、兄弟の間、親族の間に『心の割禮』〔同上、一〇ノ一六〕を命ずる律が存在してゐた。そこには愛と赦宥とが、やはり存してゐたのである。福音書の比喩以前にも、エサウは辱

弱く、恥ぢ恐るゝヤコボを、涙ながらに抱きしめる。ヨゼフは兄弟等の奸計を赦す、ダヴィドは兇惡、不孝の子アブサロンを嘆いて『あゝ、われ、汝に代りて死にたらんものを、わが子よ、わが子アブサロンよ』と云ふ。

モイゼの律に従へば、法官はヘブレオ人と外國人との區別なく、小き者にも、大いなる者にも同様に聽き、人に依怙なく審かねばならぬ。『審判は神の事なればなり。』〔同上、ノ一七〕戦争に際しても、敵城を包圍し、之を襲撃する以前に『平穩に降服すること』をまづ勧めねばならぬ。〔同上二〇ノ一〇〕俘虜の婦女に對しては、一月の間、その喪を嘆くことを許さねばならぬ。〔同上、二一ノ一一―一四〕

モイゼは、また、主人の許を脱走する奴隸を故主に付す事を禁じ〔同上、二三ノ一五〕貧しき人の質物は其の日のうちに返却すべきを命じ〔同上、二四ノ一二―一三〕富者に、貧民を憫みて、孤子と寡婦との爲に橄欖樹に幾分の實を遣し、葡萄園に數房の葡萄を残すべき事を命令した。〔同上、二四ノ二二〕動物に對する哀憐も、モイゼの教の中にある。

『汝、鳥の巢の路傍、または樹の上、または土の上にあるを見んに、雛又は卵その中にありて、母鳥、その雛又は卵の上に伏せをらば、その母鳥をとるべからず』と。〔同上、二三ノ六〕歴史家ヨゼフスは、ユデア國の法規の人道的なるを誇つて、『動物の己が家に入り來りて命を乞ふあらば、』之を殺す事を得ざる

旨を記してゐる。(註三)

雅歌、詩篇、豫言者の巻を書き、又、之を解したる(少くとも字句の上に)この民族にして、人間相互の愛、及び、神人間の神祕的愛の情味と力とを知らぬと云ふ筈はない。實に、愛は憐憫に基くと云ふ事實を、この民族よりも痛切に感じた民族は他になかつたのである。

しからは、ユデア人は、セミチック東洋人の通性とも云ふべき残忍性にあづからなかつたらうか。アッシリア、其の他の國々の兇暴なる専制國王の物語、是等の地方より發掘される、古代建築の浮彫や碑銘に現れる偶像神の祭式の残酷さなどに考へ合はすと、イスラエル人が是等の兇暴なる隣國と戦ふに際して、老幼男女を問はず敵を殺戮し、家を焼いて、軍の過ぐる所、一草一木をも剩さざるの概があつた所由を了解する事が出来る。ヘブレオ人は偶像教徒を赦したならば、其の結果が何であるかを、よく知つてゐた。彼等の行動は敵に對してヤヴェの正しき復讐であり、又偶像禮拜の蠻風よりの自己の豫防であつたのである。

イスラエルは狂信的ならざるを得なかつた。然らずんば、イスラエルの破滅であり、これは同時にヤヴェの契約の破滅、即ち、唯一の眞神の證言の終局であつた。彼には、自己が地上のあらゆる民の中より、神に選ばれしものなりとの自負があつた。その故に、彼の倨傲、慢心はまた比類がない。この點に

於ては、如何なる貴人の誇と雖も、ユデア人の誇に比べ得べきはない。この大傲慢心が他より傷けられた時には、自ら正しとするだけに、非常な残忍性を帯びてくる。即ち、これが、彼等に燃ゆるやうな復讐心の存した所以で、スペインの貴族の復讐精神も、これに比すればまことに淡々たるものであつたと云はねばならぬ。

彼等の居住する國土も、豊沃なる土地の散在するにも拘らず、全體として見れば、その氣候の如く酷薄であつた。

谷は深く、山は険しい。海岸より入る道路は困難を極めて、異邦の旅人が攀づることは困難であつた。夏の六ヶ月間は雨ふらず、冬は寒氣が強い。丘の中腹にある村落は、たゞ見る、一堆の石塊のやうであつた。世界の國々の何處に於ても、此の地ほど石塊の累々たる地方はない。律法の刑罰として、石刑の存した理由も肯かれる。道傍の石片の堆積せる箇所には、刑死せるものゝ骨片も交つてゐよう。私は、ことに、秋に、エルサレムからエリコに下る道路よりも、荒涼を極めた景色を知らない。露出した赭土の小丘がある。これに次いで、ところ／＼に茨が生ひ茂つてゐる。又、處によつては、それが癩病患者の皮膚の色を思はせるやうな灰色をしたり、鉛色に腫れ出^はしてゐる。その下を通ずる隘い赭土の小路には、渴ける野獸が、口を開き、舌を垂れてゐるやうな恰好の巖石が突出してゐる。

かくの如き土地は、強盗追剥の團體か、さもなくば、頑固一徹の民族——その種族の風俗、慣例を破るあらゆる事物を一切受けつけぬ——の住居に適するのみである。

モイゼの掟は、戒律と祭式との墻壁、不淨に對する極めて細心なる規定の裡に、彼等をとちこめてしまつた、同じ掟は、是等の貪慾な百姓に牧畜の犠牲を命じ、時としては、數へることも出来ぬ多數の獸が神殿に獻げられた。

〔サロモンの神殿の獻堂式の日には、歴代志略下、七ノ五によれば、牡牛二萬二千、羊十二萬頭が屠られた。ヨゼフスの『ユデア古代史によれば』、犢一萬二千、小羊十二萬頭であつたさうである。〕

大祝日には、神殿の境内は一大屠殺場と化し、動物の末期の悲鳴で、司祭の叫聲も聞えなくなつた。かゝる日には、司祭等は疲勞を知らざる屠丁に過ぎなかつた。レヴィ人が、横溢する鮮血に脚を汚さぬやうに、踏臺に上つてゐなければならぬやうな事もあつた（マルナス、『ミリアム』）十月の大斷食節、『キツプール』の朝には、一頭の牡山羊の上に按手して人々の罪惡を負はせた。會衆はそれに唾を吐きかけたり、針でつきさしたりした。（註四）山羊には羊毛で織つた眞紅のリボンがつけてあつた。やがて、司祭は鞭を揮つて之を市街より追ひ出して、荒野に牽出し、其處で背の毛をむしりとり、その毛を茨の上へ播き散らし、牡山羊が死ななければ、何人も餌をやらすに、これを呪はれたものゝやうに洞穴の中で

野倒死させた。

我等から見れば、この贖罪の祭式は、如何にも野蠻極るが、それでも、信者等が自分の子をモロク神の犠牲として焼殺したり、又は、シベール女神の祭司等が、公衆の眼前で、無我夢中に己が身を壁く状に比ぶれば、まだ穩なものである。この祭式は、眞神を忘れて偶像に走り、又は姦淫の大罪を冒した祖先等に對して下されたヤヴェの神罰を想起させて、ユダア人を罪の痛悔に導くと共に、また完全に眞正なる犠牲、即ち、自ら進んで世の罪を一身に擔ひ、茨冠にてさゝれ、鞭うたれ、恥辱をうけ給ふべきキリストの前徴であつたのである。しかし、蒙昧粗野な人々には徒らに血を愛し、殺伐を好むが如き一種の銘酹状態、肉刺戟を生ずるだけであつた。

不義の君主に項を屈しなければならぬ時には、ユデア人は、陽に服従を示しつつも、陰に恐るべき復讐を策することを忘れなかつた。もしも、外國の君主にして、彼等の信仰、彼等の律法に一指をだに觸るゝ事あらんか、彼等の反抗は殆ど手も付けられぬ程になる。嘗て、アンチオクス・エピファヌスが、エルサレムをギリシャ化せんと思ひ立つて、神殿に一基のゼウス神像を建て、國民に割禮を禁止した際にも、ファリサイ人等はあらゆる初生男兒の割禮を廢さなかつた。此の事が露見して告發されたユデア人は、悉く、答うたれ、或は手足を斷たれ、或は十字架につけられた。絞殺された自分の嬰兒の屍體

を頸に吊下げられた十字架の父親もあつた。「ヨゼフス『ユデア古代史』ヘロデ王が神殿の正面に金鷲像をかゝげた事があつた。これに憤激したユダ及びマタチアスと云ふ二人の律法學士は、白晝、衆人環視の前でこれを剝取り、斧で打碎いてしまつた。二人は直に捕縛されたが、その辯解の辭は、我等はヤヴェと律法との門弟なれば、これに對して行はれたる冒瀆は復讐せざるを得ず」との一言であつた。ピラトが、エルサレムの市街に、セザルの牌を付けた軍旗を通行させたと云ふ事だけで、劇烈な暴動が市中に生じた。「同上」カリグラ帝が、ジュピテル神に肖つた己の肖像を、神殿の内部に建てようとした時には、全ユデア國がローマに對して反亂を起した。

ユデア人が、漸次にヘレニスムの壓迫を感じ、ローマの倨傲、貪婪の壓制下に悩むやうになると、その反抗心も次第に増大して來た。しかし、この反抗心は、同時に到底收拾することが出来ないやうな黨派の分裂を來した。一方には、懷疑的な貴族階級のサドカイ人があつた。他方には、恰も今日の赤化分子のやうなファリザイ人が居た。ファリザイ人は民衆を煽動する熱狂家で、又、一種の盲目的な理想家で、サドカイ人とファリザイ人との間柄は犬猿もたゞならずの狀であつた。武装した強盜も横行した。大司祭は、喧嘩口論を事とする暴力團を備つて置いて、その中には殆ど餓死せんばかりの貧乏人もあつたが巡禮の十分一税からなる獻物の倉庫を襲はしめて之を掠奪した。「ヨゼフス『ユデア古代史』短刀を外套

の蔭にかくして、祭日にエルサレムに上つてくる刺客の群もあつた。彼等は祭式の直中に人を刺した。さうして、斃れた人を救助するふりをして、嫌疑を逃れた。「同上、及び、ユウゼビウス教會史」

ユデア人の兇暴無殘な性格は、當時に於て、既にこのやうな状態であつたが、エルサレム滅亡の際に於ける英雄的殘虐、悲惨なるマッサダの物語に於て、その頂點に達した。ヨゼフスは教養ある一個の學者である。そのヨゼフスが、チベリアデのある暴徒の一人をどう處分したか、平然として自ら記載してゐる所を読むがよい。この暴力漢は、單に、彼の許に多少の金錢を強要して來たばかりであつた。

『我は命じて此の者を答うたしめ、その偏手を切斷して頸に懸けしめそのまゝ追放たしめたり』〔自叙傳〕
また彼は他の暴力漢に、自ら左手を切斷することを命じた。此の者は直に命令に服従して、自ら一刀の下に左手を斷つた。

實にサウロは『ナザレ派』に對して、この通りの偏屈なファリザイ人の一人として、苛酷な態度に出で之に加ふるに、青年の客氣と、善事に努めんとする熱情を以つてしたのである。又、同時に、彼の中に隱然たる惡魔の働きがあつたであらう。彼は、後日、『我等の戦ふべきは、血肉に對ひてにはあらず、權勢及び能力、此の暗黒の世の司等、天空の惡靈等に對ひてなり』〔エフェソ書、六ノ一二〕と書贈つた。下界の惡靈等は、自分等の憤怒の焰をサウロの胸に燃し、キリスト信者を根絶する爲に、彼を此の上もな

い手先としたのだ。

加之、サウロはイエズスの爲人と、その教とについて先入主的見解を有してゐた。勿論、彼は、それを眞正に理解せず、『肉なる人』の如く解釋して、甚しい侮辱を抱いてゐたのである。彼はアアリザイの一人であつた。然るに、イエズスは、アアリザイ人の傲慢と偽善とを攻撃して剩す所がなかつた。イスラエルの期待してゐたメシアは、外國の暴君の羈絆より國家を解放し、進んで、イスラエルをして世界を統一せしむるが如き國王であつた。イザヤは『王國はその肩にあらん』と豫言した。この豫言は誤解のまゝで、諸國にひろまり、ローマ人さへも之に注意を拂つてゐた。(註五)ところが、イエズスは、この地上のイスラエルの希望を否定した。故に、サウロの眼よりすれば、イエズスの弟子等は、永遠の律法を冒瀆し、神の選民の將來を汚す僞豫言者の群である。もしも、すべての國々が一樣に神の國に招かれたらば、イスラエルの誇は何處にあらう。かくして、サウロは『ガリレア人等』を迫害しながら、これが『神に盡す』以所であると信じてゐたのである。(ヨハネ、一六ノ二)

彼が、パレスチナ以外、シリアに於てさへ、キリスト信者を迫害する事を得たについて、疑惑を挿む學者がある。しかし、政情の紛亂せる際を利用して、衆議所は能ふ限りの刑罰權を獲得せんとした。シリアは當時、ガリレア分國王ヘロデの外舅、アレタ王に屬してゐたが、ユデア人がアレタ王と親密なる

關係にあつた事は、パウロ自身の手記によつても窺はれる。(註六)

事實上には、何處に於ても、ユデア人町が存在してゐる都會では、衆議所より派遣された者は警察權を有してゐた。

凡そ、迫害者は被迫害者である。何人かその手を逃るゝ者があるに相違ないとの豫想の爲に、彼は、もはや、安眠を得ぬ。嫌疑者の人數を増加する爲には、間諜は幾人居ても、足りることがない。その活動は、自己の前に恐怖の作る空虚が生ずるに至つて止むのである。それ故に、今や、サウロは、『脅喝、殺害の毒氣を吐きつゝ』捕吏の一隊を従へて、ダマスコに向ひ、其處に隠れ潜めるキリスト信者を根絶せんと勇立つた。

しかし、灼けつくやうな路の上で、彼がキリストを見奉りし物語を叙するに先だちて、吾人は彼の爲人と、それまでの経歴とをよく識つて置かねばならぬ。

(註一) 石刑にあつた罪人の遺骸は、律法によれば、夕方まで梟木に曝されるのであるが、ステファノがこの恥辱に逢つたことは使徒行録にない。

(註二) これが當時のキリスト教徒の呼稱であつた。

(註三) 『アピオンを駁する論』一、二、第四章。

迫害者サウロ

(註四) パルナバの書簡参照、牡山羊の物語は他よりの引用であるが、その出典は詳でない。

(註五) タジトウス『歴史』並に、スエトニウス『ヴェスパシウス』

(註六) 『ダマスコに於てアレタ王の下なる州長我を捕へんとしてダマスコ人の都會を守りしかば云々』コリント後書、一一ノ三二。ユステルはパレスチナ以外に於る衆議所の權利について明瞭には分らぬが、しかしその可能はあると云つてゐる。ヘロデは、外國に逃走した犯人の引渡をローマ官憲に求むる權利を有してゐたが、この權利殊に宗教的犯罪人に關するものが、ヘロデの手より衆議所に移りうべきは見易い事である。

サウロの過去

これについては彼自身の手記がある。しかし彼が自分の身分を簡単に録したのは、直にこのユデア的貴族の誇を、自ら嘲殺せんが爲であつた。

『他人もし肉身に頼むを得とせば、我は尙更の事なり。我は八日目に割禮を受けて、イスラエルの裔、ベンヤミンの族、ヘブレオ人よりのヘブレオ人、律法に對してはファリザイ人……』(フィリッピ書三ノ四、五) 今日では、右の記載を、やゝ物足らず思ふ人もあらう。しかし、サウロが『ヘブレオよりのヘブレオ人』にして、ベンヤミンの族、ファリザイ人なりしと言ふのは決して忽にするを得ない證言である。

彼は、パレスチナの外に生れたので、一層、自分の家系の純粹なる事、自己の有する一切のものが、ユデア教の賜なる事を誇り得た。しかし、彼の誇はそれだけではない。彼の家は、ベンヤミンの一族である。ベンヤミン族は、イスラエルがエジプトより出づるに際して、第一に紅海を徒涉した故を以て、其の後、各種の行列に、常に先頭を勤めてゐた。又、かの俘虜時代の後に、たゞひとり、ユダ族と共にシオンの城壁を補修した。「エズドラス後書、第十一章」更に、サウロはファリザイ人で、ユデアの智識階級に屬してゐた。ファリザイ派とは『分離派』を意味し、ファリザイ人は普通のユデア人に對して、特殊の優越感を持してゐた。彼等のみが高等の學識を備へ、彼等のみが批難する所なき徳行を有する。悉く律法に通ぜずして、如何にしてヤヴェエに嘉せられる事を得よう。彼等は日夜、律法を忘れざる事を以つて自負し、戒律を嚴ならしむる程、負擔を重からしむる程、神の御前に偉大なるものと信じた。

サウロも、またこの大なる矜を有してゐた。後日、彼は、血肉の矜は憐むべき虚榮にすぎず、須く野犬に投與すべしと告白するであらう。(註一)しかし今暫く、彼の傲慢を許さう。なぜならば、もし矜るべくんば、イスラエルの如く、その起源を誇りうる民族は他にないからである。彼等は、最も貴重なる眞理を保管し、且、やがて神人キリストが肉をとるべき種子を宿すべき民として、全能なる神に選まれその榮枯盛衰を通じて、主に導かれた唯一の民族であるから。

沙漠に生える小樅木が、眞紅の花を枝頭につくるに及んで枯死するが如く、ユデア民族も、メシアの來臨と共に滅んでもよかつた。此の民族の以後の存在は、單に證人としての存在に過ぎない。神の使命を宿すとの自信は、實に、この民族をして、没落の日に於ても、王者の民たらしめた。數世紀の長きに亙つて、屈辱を飲むこと水の如かりしも、彼に何の關する所かあらん。彼の口には、師父等（豫言者等）の美酒の芳味が未だ残つてゐる。彼は、いまだ嘗て、自己を疑つた事がない。この頑な自信が、彼をして諸國を支配させる理由であつた。さうして、今や、彼は、諸國民を、己が『脚下の足臺』としたのである。

エルサレムに於て、あの金曜日の午後四時頃——これが、敬虔なるイスラエル人が『嘆きの城壁』の下に蠟燭を點じて、詩篇を唱へる其の時刻である——私は一人の小さい佝僂の男が、反身になつて口中で祈禱を呟いてゐるのに逢つた。彼は一冊の本を手にして、殆ど尊大に近いばかりの満足の表情を顔面に宿して、身をゆすぶつてゐた。『これがサウロだ』と、私は思つた。

サウロに於て、ユデア人の矜持は、ファリサイ人たるが故に數倍してゐた。イエズスは、この傲慢に對して、恐ろしい呪咀を放ち給うた。聖マテオが略記した〔第廿三章〕イエズスの聖書は、實にファリサイ人等の眞に迫る描寫たると共に、あらゆる時代の社會の傲慢に對する譴責である。ファリサイ人の一言一

行は、たゞ人に見られんが爲であつた。彼等は經牌を闊くし、上衣の縫を大きくし、宴席にては上席、會堂にては上座を好み、衢にては人に敬せられ、『ラビ』、『ラビ』と呼ばるゝ事を愛した。

サウロは、ユデアの然るべき身分の家に生れたことを、誇とする事が出来た。しかし、彼の父は、パレスチナ在住のヘブレオ人ではなくして、かなり以前から外國に移住してゐたヘレニストであつた。彼は、ローマ公民の稱を有して、その子に之を傳へる事が出来た。

聖パウロの書簡には、タルソの名は一回も現れない。パウロが——アラメアン語で——『我はシリシヤのタルソに生れ』と言つたとの記事は、使徒行録に存するのである。（註二）

タルソは、海に近く、小アジアからの隊商が、『シリアの門』と名付けられた山路を越えて出て來る、唯一筋の街道の出口に當り、當時の東方諸國の最も繁華な市の一であつた。シリア平原は、木綿と麥とを産する、豊饒な沃土で、もしも、西の方が、雲で閉されてゐるタウルス連山によつて仕切られてゐなかつたならば、自然にエジプトを連想させるやうな土地であつた。

タルソは、アジア内地と海岸との交通の焦點に當り——地中海を航する大小の船舶は、シドヌス河を遡つて、タルソに着くことが出来た——諸國文明の合流地點となつてゐた。其處では、アッシリア、ペルシヤ、フェニキヤの文明に、ヘラスの文明が混つてゐた。この市の古貨幣には、屢々バアル神がゼウ

スに肖られて、一頭の鷲をその傍に従へてゐる像が現れてゐる。タルソでは、古代東洋の奇怪な祭式や淫樂と、ギリシヤ風の美的趣味との交錯が行はれた。クレオパトラが、錦繡の帆蔭、黄金に飾られし船首に坐して、アントニオを待つてゐたのも、この町であつた。『我等いざ飲食せん、そは明日死ぬべければなり』(註三コリント前書一五ノ三二)と、パウロがギリシヤの俚言をコリント人に引用した際にも(註四)彼は、タルソから程遠からぬ、サルダパルスの像銘の事を、考へてゐたのかも知れない、その像は、指の關節を鳴らさうとしてゐる姿勢をして、シリア語で次の銘が刻してあつた。わが前を過ぐる者よ、飲み食ひ、戯れよ、その他には、之に若く事なければなり』と。

タルソ人は、一般の東洋人のやうに、外國語を習得する不思議な能力を有つてゐた。タルソの學校の出身者で、ローマに於て語學者、哲學者として知られた人も少くない。また、ストア哲學も、此の市に流行してゐた。

シドススの河岸には、有名な學校があつて、善い先生が澤山居た。少年サウロは、其處に通學したであらうか。それとも、會堂シナゴグの傍にあるユデアの小學校で、ギリシヤ語を習つたであらうか。はた、父の家に雇はれた家庭教師に於てであらうか。それは不明であるが、とにかく思想界一般に通用し、自分の教説を世界の隅々までも擴める爲に必要なだつたギリシヤ語を彼は完全に手に入れてゐた。若しも、彼がエルサレムに生れたならば、かうはいかなかつたらう。ラビ等は、子供等に、之を習ふことを禁止した。さうして冗談に、『晝間でも夜でもない時だけ之を勉強してもいゝ』と云つた。「タムルッド」彼等にとつては、ギリシヤ語は異教の虚偽を傳へる爲の道具にすぎない。ヘラスの神話の蜜をなめた人には、聖書の眞理が膽斗のやうに苦くなる惧がある。

サウロは、ギリシヤ語よりも、すべてのヘブレオ人の子供が習ふ、アミダの十八の祝福、ハレルの讚美歌をよく記憶えた。彼は會堂シナゴグで、讀師が、律法の書卷がはひつてゐる容器を、戸棚から引出す状や、父の家で、金曜日の晩になると、安息日の蠟燭を點す状を見慣れた。

彼は、また、極く簡単な手工を習つた。我等は使徒行録によつて、彼が『幕屋製造業』(一八ノ三)であつたことを知るのだが、彼の父もやはり職人であつたとの證據はない。ユデアの學者によれば、善いユデア人はみな手工を知らねばならぬ。かの有名な學者のシャムマイも、よく耳朶に木工の木屑を挟んでゐたと傳へられてゐる。

サウロは、今でも、シリシヤの牧人達が、野營する時に使ふ、山羊の毛で織つた黒い天幕を作ることを知つてゐたのだ。私はタルソの近傍で、恐らくパウロの時代から少しも變遷しなかつたであらうと思はれる、ごく原始的な、幕屋製造業者の仕事を見物した事がある。

其處には、三人の男が、四方開け放しの小舎の中で働いてゐた。三人とも瘠せて、少し禿げかゝつた半白の中老人で、しかつめらしい顔付をしてゐた。一人は起立つて、綱の両端がたれてゐる車を廻してその仕事着の胸の所にぶらさがつて居る袋の中から、山羊の毛をとり出しては、動いてゐる綱によじ合せてゐた。彼は、小舎の奥から入口まで、後じさりにしぎつて來ては、こゝで綱を垂らして、仲間の傍に置くのであつた。

二人の仲間のものは、地に羊の皮を敷いてその上に蹲り、兩脚を穴の中に入れてゐた。二人とも、自分の前に、すこし後方に傾いてゐる大きな機械器械を据ゑて、まづ經糸たさいとをならべ、木製の小刀様のものを以つて之を整理し巧に梭を働かせ、それから牛の軛によく似た(その齒を除けば)磨き上げた木製の大きな道具を使つて、經糸たさいと、緯糸よこいとを伸してゐた。

パウロがこの重い道具を使つて、幾時間も働いた後には、手が自由にきかなかつたのも無理はない。彼がガラチア人に、『看よ、わが手づから如何なる大字にて汝等に書き贈れるかを』〔六ノ一一〕と云つたのは、別段、眼が悪くて小さい字が書けなかつたのではない。彼は、重い道具を使用して手が強ばつた労働者の手蹟で、書いたのである。〔註六〕

私は、タルソの職人にたゞして、パウロの生活の或方面を知るに足る、二三の事實を發見した。彼等

の仕事は仲々金儲になる。(註七)昔からさうであつた。それ故、パウロは、自分の必要と貧民に施すに充分なだけの貨を儲けて、他人の世話にならなかつた。さうして、『興ふるは受くるよりも福なり』との、主イエズスの教訓を、立派に實行する事を得たのである。〔使徒行録三〇ノ三五〕

私はなほ、彼等、使徒の遠い伴侶からして、——彼等は彼の名を知つてゐただらうか？——彼等も、亦、彼の如く、晝夜労働する事を聞いた。(註八)彼等は袋の上に眠るのである。或は、彼、パウロもさうしたかも知れぬ。しかし、彼等の手業は、單調で、機械的であるから、思索する事が好きな者は、全く自由に、精神を働かす事が出来る。パウロも、梭を働かす手を休めずして、諸教會の事を考へたり、説教する事を得たであらう。

しかし、パウロが、少年時代、半ば素人としてこの手工を習つた頃には、山羊の毛を織ることが、やがて、自分の宣教師の生涯を準備する所以なるを、もとより知らなかつた。彼には、聖書の研究と、ラビの教訓の勉強の方が、遙に興味深く思はれた。

彼の父は、ファリサイ人として、並に律法學者としての、彼の教育を仕上げたかつた。十二歳の頃に彼はユデア少年の慣習に従つて、エレサレムへ巡禮に行つた。彼がユデア人に語つた言葉を文字通りに解すれば、(註九)エレサレムで成人したやうにも考へられるが、すぐその後『ガマリエルの足下に教

へられ』と云つたのは、どうしたものであらうか。彼の有名なる碩學、ラビ、ガマリエルの門下たるには、すでに相應の年齢に達した青年學生たるを要しなかつたらうか。

我等は、容易く、師の脚下に膝を兩手でかゝへながら跪つて居る、サウロの面影を想像する事が出来る。それは恰度、今日、回教寺院の中に見る一光景、即ち、若い回教青年が、イマン(教師)の周圍に輪形に坐して、小さい卓子を前にして、一種の豫言者的情熱を湛へて話す師の言を恍惚たる眼光でぎょほれてゐるのに、彷彿たるものがあつたであらう。

ユデア學生の教育の實際は、カトリック教會に於ける神學生の養成に酷似してゐた。彼の研究は、聖書と律法とを中心にして、モイゼの五書を全部知悉し、豫言書を讀み、聖書解釋者たり、神學者たるにあつた。彼等は、また、エノック書、或はモイゼ被昇天書等の外典をも讀んでゐた。(註十)

しかし、ユデア教的聖書解釋學は、好んで殆ど豫想外の決論を導き出し、^{アレゴリア}寓喩的本文に、穿ちすぎや^{パドック}反語のやうな解釋を附した。例へば、人祖アダムに就いて、下のやうな記載がある。『聖なる者は、(その御名は讚へられよかし)地上の一切の人間を、アダムの模型によりて造りたまへり。然るに、互に相似たる人は存することなし。されば各人、世界の造られたるは己が爲なりと云ふべきなり。』

『神は、人々につきて、三の事に變化を與へ給へり。その一は顔貌にして、これ錯誤を避けしめんが爲、

第二は思想にして、これ偷盜を避けしめんが爲、第三は聲にして、これ(夜間に於る)姦淫を避けしめんが爲なりき』(ババ・バトラ)

聖書さへも、律法の註釋の爲に、ともすれば^{ないがしろ}蔑にされてゐた。ノートを取らずして、——ラビの判定を書留めることは禁止されてゐた——律法のあらゆる例、相矛盾する如き解決、その一切の可能性を暗記すると云ふのは、あだかも、かの複雑極まる支那文字を記憶するにも比すべき、困難な仕事であつたのである。

主の聖名を祝福せずしては、如何なる事もしてはいけない。さうして、各祝福の爲には、各々異なる祝文が要求されてゐた。食卓に對して、細長くきざんだ蕪菁を祝する時と、四角にきざんだ蕪菁を祝する時とでは、既に祝文が異つてゐた。フアリザイ人は、杯の水を飲むに、豫め手指を洒がねばならなかつた。シャムマイによれば、手指を洒いでから、水を杯に注ぐべきであつた。しかし、ヒレルは、まづ水を注いでから、手指を洒ぐのが正式だと云つた。

それから、律法上の不潔に關し、又、安息日に許されてゐる事と、禁じられてゐる事とに就いて、繁雜、且、枝葉に亘る議論があつた。(註十一)その他、損害賠償に關する、極めて精密な規定があつた。

『家雞が或る地點より、他の地點に飛躍した時に、何物かに觸れて之を破壊したならば、家雞の飼主に

損害の全部を賠償する義務がある。しかし、損害が翼の風によつて生じたならば、飼主は損害の二分一を賠償すればよい』〔ババ・ガマ〕

『二頭の驢馬が連れ立つて行く。甲が道に倒れ、次いで乙が甲に躓いて倒れた時に、もし丙なる驢馬が来て、乙に躓いて倒れたならば、甲の持主は乙の損害を賠償し、乙の持主は丙の損害を賠償せねばならぬ』〔ババ・ガマ〕

『或る人が、父、又は母を傷け、或は安息日に他人を傷けたならば、此の人は死刑に處せらるゝ故に償金を拂はない。又、異教徒たる自分の奴隷を傷害しても賠償する義務はない』

聖パウロの論理が時として理屈に走る傾向を宿し、又、思想の連鎖に突然の屈折を示す事があるも、敢て怪むに足らぬ現象である。聖パウロの師なりしラビ・ガマリエルに關して、タルムッドに記してある一挿話は、もし實話とすれば、如何なる難問に對してゞも應答する事を得る、詭辯家の狡智を示す好例である。

『ラビ・ガマリエルはアツコなるアフロディテの女神に屬する浴場にて沐浴するを例としたり。(女神の神殿、祭司、其の他の人員は、この浴場の収益によりて維持せらるゝなりき)。一日、プロクルス・ベン・フィロゾフォスと云へる異教徒、彼に、異教の神々に獻げられたる事物より利益を得るは、モイ

ゼの律法の禁する所なるに、何故に偶像の爲に造られし浴場にて、沐浴するを得るやと問ひたゞしぬ。

ラビ・ガマリエルは浴場を出で、答ふるやう、我は偶像の支配下に入らず、反つて彼、わが支配下に來るなり。浴場はアフロデテの爲に建てられたるに非ず、彼女は浴場の一裝飾のみ、と。』〔アボイダ・ザラ〕

ガマリエルはシャムマイが極めて嚴格、苛酷なる主義を奉じたに反して、其の祖ヒレルと共に、比較的寛大なる律法の解釋をしたので有名である。即ち、彼は、フアリザイ人中の自由學派の代表者であつた。彼が、衆議所に於て、使徒等に關して主張した演説は、放任論、或は運命委託説であつた。

『今も、我、汝等に謂はん。かの人々に遠ざかりて、之を措け。そは其の計畫、若しくは事業、人よりものならば崩るべく、神よりのものならば、汝等之を壞すこと能はずして、恐らくは神にも逆ぶ者とせらるべければなり』と。〔使徒行録、五ノ三五―三九〕

この曖昧な態度は、神の靈示によつたものだと解釋がある。又、ある傳説に従へば、彼は隠れたるキリスト信者であつたとも言ふ。

それはともかく、彼とサウロとは正反對の人物であつた。師は溫和、中庸を重んじ、寛大を説くに、弟子は己の確信を最も徹底的に實行しようとする。

これを問題とするのは、パウロがラビなりしや否やの問題を、解決せんと試むると等しく、全く無用

の試である。弟子が師匠と正反対の見を持ち、子が父の裏合せなる事は、極めて屢々見る所である。ガマリエルは、キリスト信者に對して憎惡に燃える、狂信的の弟子を有つてゐたのだ。サウロの青年時代は、極めて我がまゝであつた。さうして、極端に走つて、渾身のエネルギーを傾倒して憎惡、憤怒を恣にした。假令、ガマリエルの學識權威は、之を推重したにせよ、師の自由主義的學風は、彼の危惧する所であつた。而して、ユデア人の立場から見ても、彼の態度を誤れりと、何人が斷言し得よう。

キリスト教の信仰が、萌芽時代に於て、窒息され得たと云ふ假定は、我等にとつて、有り得ざる、且恐るべき假定である。しかし、人間的に考へれば、もし、この最初の時代に、何人かが繼續的に、徹底的に迫害したならば、さうなつた譯である。しかし、ローマ皇帝の迫害は、第二世紀乃至第三世紀で、キリスト教を根絶するには既に遅すぎた。ユデア人の加へた迫害は、無方針であり、斷續的であつた。即ち、見えざる不思議の能力が之を麻痺したのである。ヘロデ王はペトロを鐵鎖につなぎ、二人の兵士に守らせたが、天使がこれにふれると、鐵鎖は地に落ち、鐵の門扉は自から開いた。サウロがナザレト人イエズスに勝ち誇つた時に、彼は、その奴隷となり、『選ばれし器』と化した。

(註一) フイリツピ書、三ノ八『糞土の如し』とは犬に投與すべきものとの原意である。

(註二) 二二ノ三、恐らくは、彼は、幼時から、ユデア風のサウロと云ふ名と、ギリシヤ風のパウロと云ふ名と

を有つてゐたのであらう。

(註三) ラムセイ『パウロの町々』

(註四) この諺はメナンドルの『ダイス』にも出て来る。しかし、イザヤ、二二ノ一三にもあるから、彼は恐らくこゝから引用したのであらう。

(註五) ストラポー。タルソには、今日いまだサルダナパルス王の墓と稱せられる非常に厚い壁の建築物が残つてゐる。

(註六) この道具は、ほぼ二キログラム程の重量がある。

(註七) 毎日五六十フランの収入がある相である。

(註八) 『汝等の一人をも煩はさざらん爲に、我なほ晝夜勞働せり』テサロニケ前書二ノ九又『手業を營みて勞し』コリント前書、四ノ一二。

(註九) 使徒行録二二ノ三『此の市中に育てられ』

(註十) ラグランジュ『ユデア人の間に於るメシア思想』参照。

(註十一) 祭日に生れた卵を、其の日のうちに食する可否が、ヒレルとシヤムマイとの二大學者に、極めて重大問題として論争されたのは有名な話である。

(註十二) 又、異なる本文を組合せに引用することもラビの慣用方法の名残である。

二、異象を見る

ダマスコの途上にて

眞晝である。天幕の入口に坐つて居たアブラハムが、突然、三人の男子が自分の前に佇んでゐるのを見たのと同時刻、又、イエズスが旅に疲れ、井戸の縁に腰を下して、水を汲む女に『我に飲ませよ』と仰せられたのと同時刻である。

岩鹽で出来たやうな、きらすくする巖石が、道の兩側に聳立つてゐる。一筋の砂煙が立つのは、ダマスコに急ぐ旅人の一隊だ。灰色の丘の裾に纏はる幾許かの緑色は、市街をめぐる果樹園である。一週間の旅行の後に、目的の市街に近づくとともに、空氣も何となく涼味を宿して、呼吸する胸に快い。驢馬を追ふ馬丁も歩を早め、荷を積んだ駱駝の陰影も、眼に灼きつくやうな砂埃の上に忙しく動揺する。

杖を手にした捕吏の一隊を指揮して、サウロも急いで歩む。倭軀にして精悍の氣に溢るゝ彼は、軍隊を率ゐるセザルのやうに進んでゆく。(註一)彼は、頭上に輝く太陽の威力を感じたか。彼が横斷して來

た炎熱の王國、岩石さへ太陽の光線の下に震へてゐるやうな限なき沙漠、一切の空虚なる光華の幻影は殆ど彼の眼中に存しなかつた。遠くよりダマスコの城壁を望見した時に、此の市街が、既にアブラハムの時代に於て、エリエゼルの故郷で、東方諸國の隊商交通の中心の一なりしことを、彼は想起したであらうか。或は、然らん。しかし、現在に於ては、夢中になつて追求してゐる差迫つた目的が、遠い古昔の思出を、心の片隅に推付けてしまつた。

彼は、ダマスコに、ナザレ派の集團があつて、種々の謬説を流布し、ユデア人の躓きとなれるを知つてゐた。ナザレ派は、この地よりアンチオキアを経て、シリシアに至るまでも蔓延する憂がある。サウロは、一網打盡的に彼等を檢舉して、背教者の氏名を發見しようとして欲したのである。彼が持參した逮捕状には、司祭長カイファの證印が押捺してあつた。彼は彼等を捕縛して、エルサレムに牽き行き、衆議所の法廷に引渡す豫定であつた。

野猪が、確實に突破することが出来る墻壁に跳躍する時のやうに、サウロは心中愉快だつた。憤怒を交へた、この快さが、彼の歩行を早くした。彼の眼光には、仇敵を捉へた時の勝利者の皮肉が、既に潜れてゐた。

一點の雲影もない晴れた空から、突然電光のやうな一道の光明が、彼を地に打倒した。遠くから恐ろ

しい聲が、雷鳴の如く、天上に響いて、彼に命ずる、『サウロよ』と。その次に、今度は、同情に充ちた叱責の調子で、近く、低い聲が繰返す、『サウロよ』と。サウロは、恐怖に痙攣した眼を無理に開いて、光榮の焰につままれて途上に立つ人、或は、人以上の人の姿を見た。それは、エゼキエルとダニエルとが、麻の衣を着、電光よりも輝ける面貌、溶爐に白熱する眞鍮のやうな腕を有すると見た、『人の子』である。しかし、その頭、その両手の掌、その兩足よりは朱の火焰の如き光が發し、その胸側には、槍の穂先に貫かれた眞紅の創があつた。

失神したやうに、サウロは彼の面を塵埃に隠した。もし、此の『識らざる者』が、もつと明に御姿を現し給はゞ、自分の身體はこの幻の爲に、灰の如く萎えくだけてしまふだらうと感じたのだ。しかし、主は、彼の方に身をかがめて（永遠の慈悲、柔和）彼の行動の理由をたづね給うた。

『何ぞ、我を迫害する。』

『我は汝を知り奉らず。如何で汝を迫害せん』と、サウロは答へない。一瞬間の直感で、彼は『識らざる者』の何人なるかを豫想した。彼が地に投げ出された間に、外面とひとしく、心の中にも光明がそゝられた。火の呼氣が唇に觸れて、彼は言語の自由を恢復した。

何と彼は云はんとするか。彼の口より洩れるのは、悲嘆と痛悔との呻きだらうか。否、彼は知らうとする、さうして問ひかける。

『主よ、汝は誰ぞ。』

大膽極まる質問である。塵埃なる彼が、全能なる神に其の名を問ふ。彼は、理由なく服従する事を厭ふ。これがパウロの本來の面目である。悟性を有する意志の飛躍、神の面前に於る『自我』の叫び。『主よ』と呼ぶからには、服従せんと欲することは實である。しかし、彼は、主の誰なるかを知らんとする。恰も、天使と相搏つたヤコボの如く、サウロも、自己の敗北を認めきるまでは、敢て抗争せんとする。しかし、彼の敗れしは、主の能力に壓倒されたからではない、彼が主を了解したからである。『識らざる者』は御名を告り給ふ。

『我は、汝が迫害せるナザレトのイエズスなり』と。

御應答は、イエズスも、パウロも、用ゐなれてゐたアラメアン語であつた。『汝、我を迫害す』と二度までも繰返して、審判者は己の被迫害者なる事を告げ、彼の罪を明示すると共に、直ちに之を赦し給うた。サウロは、一瞬の間に、終生の彼の最愛の眞理を悟つた。キリストとその弟子とは、一體である！彼は、後悔の悶々の情に堪へざると同時に、全身に漲る希望を感じた。口に云ふべからざる、あるものが、一刹那に彼を更新したのである。さきには、之に對して、全身、憎惡に慄へてゐたものが、今や、

全く、愛に變化した。眼に見える異象以外の玄義が彼に啓示された。しかし、この啓示も、恍惚裡に彼を没しない。直ちに、活動せんが爲に、彼は振立つた。

『主よ、何を爲すべきぞ。』

これは服従を示す、單純な心情の聲である。

主は答へ給ふ。

『起きて、市中に入れ、汝の爲すべき事は、彼處にて告げらるべし。』

サウロは、恰も愚人の如く、よろめきながら立上つた。異象は消失したが、眼を見開いても、何物も見えぬ。黒い魚鱗のやうなものが、瞳孔を鎖したかの如くだつた。彼は烈々たる太陽の下に、深夜に於けるが如く、四邊を手探つた。彼の伴侶等は何處に居るか。彼は彼等と呼ぶ。うごめく聲が、之に答へる。恐怖のあまり、地に平伏し、頭をかへて、彼等は恐らく死を期待してゐたのだ。劇しい、不思議な光明は、彼等をも地に打倒した。彼等も、また、或聲を聞いた。何人かが、其處に居たのだ。しかし、彼等は人の姿を見なかつた。眼に見えぬ、神祕のものゝ出現は、異象よりも、彼等をおびやかした。

彼等の隊長は盲目になつた。こゝに出現したのは、如何なる天使、如何なる精靈だつたらう。彼等の隊長、今や、小兒のやうに、或は囚人のやうに、或は市中をさまよふ盲目乞食めくらの一人のやうに、手をさ

しのべて手引を請うた。

サウロは、此の状態でダマスコ市に入つたのである。

出現の續いたのは、數秒間にすぎない。しかし、この不思議は、一宇宙の創造よりも重大なる意義を有した。又、現に有しつゝあるのである。キリストの御托身と御復活とを除けば、人間の歴史に、これよりも重要な事件が起つたことがない。

使徒行録は、此の事件について、三ヶ所に別々の記載を残してゐる。〔九ノ一九、二二ノ五一―二、二六ノ二―三〕破壊的批評家が、誇大に強調した、この三様の説話の差違は、要するに、色調ニユアトスの差違にすぎず、従つて之を調和させることも困難でない。第一の傳によれば、『伴へる人々は、聲をば聞きながら、誰をも見ざれば、惘果て、佇』んでゐた。第二の傳によれば『伴侶なる人々は、光を見たれど、語る者の聲をば聞分け』なかつた。

第三の傳は、イエズスの言を敷衍する。『何ぞ、我を迫害するや』の次に、『刺ある鞭に逆ふことは、汝にとりて難し』とある。それから、

『我が汝に現れしは、汝を立て、役者となし、且、汝の既に見し事と、又、我が現れて汝に示すべき事とに就きて、證人たらしめん爲なり。我、此の人民、及び、異邦人の手より、汝を救はん。汝を彼等に

遣すは、彼等の目を開きて、暗より光に、サタンの權威より神に立歸らしめ、我に於る信仰に由りて、罪の赦と、聖徒中の配分とを得させん爲なり』とある。

パウロは、この第三の口述の中では、ダマスコ途上に聞いた所と、其の後の啓示、又はアナニアに聞いた所とを綜合したのであらう。

かくの如く、以上の三個の記載は、其の間に多少の相違を示すけれども、要點に到つては、みな同一で、主要なる言詞に變化がない。

また、彼の書簡にも、ダマスコ途上の出來事に、明かに觸れた所がある。「コリント前書、九ノ一、同上 一五ノ八、ガラチア書、一ノ二一―一七」パウロは、必ずや此の事件を、屢々、信者等に語り聞かせたに相違ない。故に、書簡中に、之を記述する必要を見なかつたが、しかし、例へば、コリント人に、『我は使徒ならずや、我主イエズ・スキリストを見奉りしにならずや』と云つた言は、明に使徒行録の物語の裏書である。彼は、他の使徒等が復活後の主を見奉りしが如く、即ち、神性に光り輝く御姿にて、五の傷を示し給ふ主を見奉つたのである。最後のもの、最終のもの、月足らぬ流産兒の如き彼にして、しかも敢て使徒と自稱する所以は、彼の肉眼が、イエズスの人骸を仰ぎ奉つたからである。

されば、此の物語の眞實性に關しては、歴史家中、何人も異議を挿む人がない。たゞ、その解釋が、

キリスト教的學者と、懷疑的學者とに於て異なるのみである。後者にとつては、キリストは神にあらず、復活も事實にあらず、従つて、パウロの經驗せしは一個の幻覺である。即ち、彼は幻影を見、次で他の人々に物語つて、それに一定の形式を與へ、最後にこれが彼の信仰中に入つたのである。

しかし、彼が、彼にかゝはる此の奇蹟を、眞面目に信じてゐたことは疑もない。この驚くべき執拗な妄想を、いかにして合理的に説明するを得べきか。

『福音書中のあらゆる奇蹟を否定する爲に、一生を費したパウロも、パウロの改心は、如何なる（歴史的、論理的、心理的）分析法によつても説明し得ないと告白した。かく、たゞ一個の奇蹟を保留した爲にパウロは他の一切の破壊を不徹底なるものとし、彼の生涯の努力を空しからしめたのであつた。』(註二)

ホルステンは、パウロを奇蹟に導く、推理の連鎖を作り上げようとした。彼によれば、偏執觀念が幻覺を生んだのである。しかし、彼の理論は、一個の空中の幾何學の如く、その假定は本文に何の據所なきのみならず、また、人間の心理作用を無視してゐる。定理の連鎖が、一個の人間を、最後までもその眞實性を信じつめた幻覺に導くことは、あり得ないことである。

プアイドレルは、サウロの心が、二の異なる方向に動いてゐたと假定した。サウロは、キリストを劇しく憎惡すると共に、潜かに彼を慕つてゐたのであらう。さうして、突然、異象を見ずして、第二の感情

が第一を壓倒したのであらう。

ルナンは、パウロの幻覺、及び改心の動機としての、一の偶發的事件を假想して、學者の物笑となつた。(註三)彼は、また、パウロの證言に反して、使徒が、時々、律法の價值に關して、疑問や不安を感じてゐたと主張した。

ロアジーでさへ、『近世の批評學者も、使徒行録の記載の中に、此の事件を準備する心理作用の痕跡をも、認める事が出来なかつた』と云はざるを得なかつた。

しかしながら、ロアジーも、全力を盡して奇蹟を否定せんとして、ホルステン、プアイドレル、ルナンの所説の折衷にすぎぬ、甚だ非獨創的の假説を下して、何事をも説明することなく、曖昧裡に問題を離れてゐる。

『彼の心は、それと反對の努力にも拘らず、彼が敵對するキリストに捉へられてゐた。さうして、これが、一日、彼の理性、意志を感亂して、是等をその中に葬つてしまつた程に、はげしい幻覺となつて彼を壓倒した……』

幻覺にもとづく彼の改心は、それまでの彼の精神の動搖、煩悶の結果である。パウロの信仰は熱烈な宗論を經る中に、漸次に形造られたのだ。さうして或時機に於て、推理的研究の論理的發展でない一の

飛躍をするに至つた。これは、寧ろ、革命であり、神祕的信仰の突然的變化であつて、當人の頭腦の狀態に關係し、正規の普通人の心理現象と精神現象と精神病心理現象との中間にあるものである。』

ロアジーも、ルナンの如く、サウロは、それ以前に、既に、『律法に關して、即ち、その完全さ、その道德的效力、異邦人を惹附ける能力について、疑惑を抱いてゐた』と假定してゐる(「ロアジー」使徒行録註解)

しかしながら、使徒行録によれば、サウロは『脅喝、殺害の毒氣を吐いて』ゐたのだから、以上の假定は、事實と大に矛盾すると云はねばならぬ。又、これは、パウロがガラチア人に、自分は改心の前はファリサイ派の傳説に凝り固つてゐた、と書き贈つた言にも矛盾してゐる。

然らば、かくの如き假説は、心理的に見て、すくなくとも可能性を有するものであらうか。しばらくキリスト教を除外して、左の假定を考へてみるがよい。自分が國家に大害ありと信ずる謬説に對して、義憤に燃え、且、あらゆる残酷な手段を盡して、これを根絶すべき使命を受けてゐた或人が、一朝、突然、從來蛇蝎の如く憎み嫌つた教説を承認する。のみならず、非常な勇氣、智慧、聰明を以て之を宣傳し、萬難に屈せず、遂に所信を證する爲に生命を棄てる。さうして、此の人の一生涯の大變化が、一分もかゝらぬ中に、一の單純なる幻覺の結果として行はれた、と。

かう書いてくれば、此の假説は、あり得べからざる架空談としか思へない。パウロの場合に於て、錯覺を以て事實を證明するは、困難である。一般に、錯覺が生ずる場合には、空想がそれまで動きつゝあつた形態に従つて、幻像が現れるものである。パウロは、從來イエズスを偽豫言者として憎悪してゐた。これは、彼が迫害者として狂奔してゐた事實から、容易に推知することが出来る。されば、若しも、この偏執的憎悪が幻像を生んだのだつたならば、彼は、キリストを醜怪なる姿に見、その口から厭ふべき言を聴く筈であつた。彼は幻像の前に屈服せず、反つて、益々昂奮する筈であつた。

同様に、假令、時として不安が心中に湧いても、當然、かゝる不安は直に抹殺せられるのである。正規なる精神を有する人は、自分がその誤謬なる事を確認してゐる思想に壓倒されず、却つてすぐに撥反する筈である。さうして、パウロは、絶えず反撥的に行動する天性を有してゐた。しかも、彼が一度なりとも、キリスト教徒となりし事を悔悟したことがあつただらうか。

彼の一生涯を、最後の日に至るまで、全然、變更し了した、この革命を成就する爲に、外的因子、即ち、疑問の餘地なき、忘るべからざる、重大な事件が必要だつたのは明瞭である。

ルナンの所謂『頭腦の逆上』説、或は、サウロが雷鳴をキリストの聲と錯誤したとの説明の如きは、今日に於ては一顧の價値なき假説である。但、ルナンにとるべきは外的因子の必要を解した一事である。しかし、ロアジが、『飛躍』と云ひ『神祕的信仰の突然的變化』と云ふが如きは、畢竟、空疎なる無意味の言にすぎない、パウロが改心したのは、改心したからだと云ふに歸著する。

『精神的心理現象』云々の字句は、パウロを目して、なかば白痴となし、その改心を以つて、病的發作なりとするのである。しかし、神學者としての彼の思索の驚くべき平衡性、並に、使徒としての彼の生涯の一般は、かゝる假説を覆すに充分である。

超自然的現象と混同するのは、説明能力を喪失した自然科学者の、常套の逃避場である。

彼の信仰が、宗論を経る間に潜かに成長したとの説は、如何なる根據を有するか。むしろ、事實がその正反對なるは、ほど確實である。ガリシヤ人等と論争すれば、する程、彼等に對する憎悪の念は深くなつたに相違ない。恰も、ロアジが、聖書の破壊的批評にいそしめば、いそしむ程、キリスト教の信仰に敵意を抱くやうになると同一である。なほ、ロアジは、使徒行録の記述を否定する爲に、パウロの伴侶なるものは假構の人物であると想像する。「註四」これは、『伴侶』の存在が邪魔になるからである。一體、東洋に於て、單身の旅行などは、考れへらるものでない。ことに、公的の使命を帯び、犯罪者を逮捕に向つたサウロの場合に於て然りである。

かくの如き詮議は、まことに愚の限りなのだ。ダマスコ途上の出現は、破壊的批評家に唯一の態度を許すにすぎぬ。即ち『説明し能はざるもの』、破壊することの不可能なる證言を前にしての、謙遜の態度がそれである。

この奇蹟、即ち、一個の靈魂が、突然、且、完全に改心したことは、パウロの傳記以外に意味が深い。それが、神に背いて遁るゝ人類を、探し覓め給ふ神の大慈悲の眞の象徴として、時代と民族とを超越した出來事ならずして何であらう。

使徒が、この後、ユデア人と異邦人(即ち、我等)とに説教する一切は、この否定すべからざる經驗から出發する。キリストは蘇り給へり、そは、我、汝を見るが如く、彼を見奉りたればなり、と。

(註一) 偽經『パウロ行録』の第三章に、彼の外觀に關する傳説が残つてゐる。ことに依ると、多少の根據ある説かも知れない。曰く『オネシフォロは、身長低く、頭禿げ、兩脚やゝ曲り、膝の突出せる人の來るを見たり。彼は長き眼を有し、双肩相連り、鼻すこしく屈り、愛すべき顔貌なりき』と。

(註二) 一八六〇年、パウルの墳墓に於てランドレルのなせし演説の一節。

(註三) 『彼は、恐らくは、眼病を患つてゐたのだらう。彼の痼疾の初期にあつたのだらう。……又、恐らくは炎熱に灼かれた沙漠から、急に淋しい樹陰に入つたことが、この狂熱的の旅人の疲勞し、困憊しきつた機能に一種の衝動を與へたのだらう』(『使徒』)又、ルナンは、使徒行録に『日中に』と明記してある

にも拘らず『或は突然の暴風雨のおこつた事も想像される』などとも書いてゐる。

(註四) 同上、一般にロアジは東洋諸國を知らず、推理と書籍によつて机上の議論をする傾向がある。

三、サウロの召命

サウロは、ダマスコで、三日間、盲目のままであつた。且、彼は飲食を攝らなかつた。

彼の眼が盲いたるは、かの『光明』による眩くらめきであつたらうか。吾人は、むしろ、神の出現の残した物的の痕跡だつた、と信じたい。彼はこれを以つて神の正しき復讐なりと做し、生涯づくものと覺悟したかも知れない。しかしながら、彼は、さきに出現し給うた異象に服従したやうに、——最後まで反抗する事も出来ずに拘らず——この苦しい恥辱をも、至福なる試練として受け奉つた。悪人のむくいなる永遠の死が、彼に相應しい刑罰なのだ。彼は、イスラエル民族の如く、憐むべき『盲目者』であつたのである。心眼の開けたる今日、肉眼の盲いたるも、何の事かあらう。キリストの御眼光まなざし、其の御聲、光榮裡の御姿は、彼の心にいつまでもやきつけられて、失はれた世界の代りに、彼を慰めた。

三日間、彼は斷食した。堪へ難き渴を覺えたであらうが、一滴の水も、彼の唇をうるほさなかつた。彼は沈黙裡に、祈禱しつゞけた。

唯一の、至高なる御像と共に、三晝夜の瞑想。識り、且、愛する者の法悦。自己を與へ給ふ『眞理』の裡に於ける恍惚。これまで、おぞましくも謬りたる事の後悔。

靜思、黙禱によつて、彼は何を識り得たか。或はパウロは之を洩らしたかも知れぬが、何人も之れを書き留めて置いてくれなかつた。たゞ、彼の書簡中の數語が、電光の如く、此處彼處に閃いて、我等をして彼の思念こころの跡を、覺束なくもたどらしめるのである。

彼は、キリストが生者と死者との主なるを悟つた。神の御獨子は、——蓋し、彼はさうであつたのである、——『奴隸の貌を取り、人に似たる者となり、』己を無きものとして、『死、而も、十字架上に至るまで、従へる者となり給ひ、』〔フィリッピ書、二ノ七、八〕而して、悪人等の爲めに死に給うた。

『それ、義人の爲に死する者は稀なり。』〔ローマ書五ノ七〕然るに、キリストは、罪人なる我が爲に死に給うて、我をして彼に於て眞正の生命を得しめ給うた。

主が、死に至るまでも彼を愛し、主を憎んだ彼に出現れ給ひしは、彼が全力を盡して主の奥義に愛着して（彼がこれまで迫害した信者等が、主を模倣したるが如く）彼もまた、主を模倣し奉らんが爲ではないか。パウロは即時に、『死も、生も、天使も、權勢も、能力も、現在の事も、未來の事も、高さも、深さも、他の如何なる被造物も、わが主イエズス・キリストに於ける神の寵いつくしみより、我を離し得るものなし』〔ローマ書、八ノ三八、三九〕と誓つた。

しかし、彼は一切の眞理について凡ての智識を、この時、賜はつたであらうか。ダマスコに於ける他の啓示の中に、イエズスは彼に宣うた。

『我が汝を選みしは、汝が既に見し事と、又、我が現れて、汝に示すべき事とにつきて、證人たらしめん爲なり』と。

即ち今後のイエズスの出現、他の使徒等につきて學び得る信仰の智識、繼續的の神の靈示、彼自身の體驗する所、このすべてが『彼の福音』を、やがて形成するに至るのだが、今のところでは、肝要事を確信するだけで充分である。己が眼に見たものを、自己に證明する必要はない。

次に、彼は過去の錯誤を悔んで、悲嘆の涙にくれたであらうか。彼は『至誠者』を侮辱し、冒瀆し、是を愛し奉る人々を迫害した。彼もまたペトロの如く、一生涯かゝつても償ふ事が出来ぬ大なる過失を、泣いたであらうか。彼は、後年、チモテオに書き贈るであらう。

『信ぜざる時、知らずして爲し、が故に、慈悲を蒙りて、』〔チモテオ前書、一ノ一三〕と。

彼は神の尊前にへりくだつた。しかし、彼は何時までも、後悔のくり言を繰返へす人ではない。後悔とは、過去の繼續である。パウロは未來を希望した。彼は、知らざりし自分の心に行はれた奇蹟について、單純に神を讚美する。彼は、一瞬にして、かく單純化した自己を驚異した。彼の裡なる一切が、後

悔さへも、單純化したのであつた。

しかしながら、一思想が、傳統に生きるユデア人としての、彼の心を寒からしめたに相違ない。彼は、從來、律法を以て完全なるものとなし、黄金の規範、永遠の契約と信じてゐた。それ故、一切の改革家は、欺瞞者であると考へてゐた。彼が、イエズスの弟子を憎んだのも、律法の敵としてゝあつた。今後、律法と彼の新信仰との關係は如何に。更に、もし、ユデア人にして、眞のメシアを頑に拒みつゞけるならば、イスラエルの使命は、どうなるであらうか。

サウロは、今さらの如く、神の選民の歴史を記憶の中によび戻した。モイゼが、石板に刻されたる律法を宛めんとてシナイ山に登攀する以前に、太祖等を支配してゐたのは他の律おきてであつた。アブラハムの義とせられたるは、律法の命ずる所業を行つたが爲ではない。彼は『約束』を信じたる後、契約の徴なる割禮を身に受けた。さうして、約束に於る信仰が彼を義としたのであつた。果して、然らば、律法は救靈の爲に不必要なるか。

律法を貶くだすることは、サウロにとつて堪へ難い。律法は神の與へ給うたものである。然らば、神が之を廢棄し給ふ事はあり得べきか。こゝで彼が想起したのは、キリストの言として、弟子等がよく反覆した一言である。

『新らしき酒を古き革囊に盛るものはあらず、』と。

豫言者が告げた『新しき契約』は「エレミヤ、三二ノ三一—三四」『赦宥』の律、即ち、完全なる罪惡の解脱であり、新しき酒、完全なる奠酒は、救世主の聖血である。これより、後、神は牡牛と牡山羊との鮮血を望み給はぬ。眞正の『犠牲』は。たゞ一度にして、一切を淨め給うた。しかし、若し、贖罪の獻物にして廢らば、神殿は畢竟、無用の處とならう。サウロは、神殿の廢止と云ふが如き思想を受け入れまいとした。人々、靈と、眞實とを以つて、此處に神を拜禮すべしとは、彼の聽ける所であつたのである。

ユデア人は、この變化を、承認するであらうか。彼は、ステファノを前にして、罵り騒いだ衆議所議員の喧噪を遠くに聞く思がした。その中には、彼自身の聲も交つてゐる。

『主よ、此の罪を彼等に負はせ給ふ勿れ』との、殉教者の祈禱も、まざまざと想ひ出された。あゝステファノが祈つたのは、サウロの爲であつた。彼の死は、自分の爲の犠牲だつたのである。いま、彼、サウロも、兄弟等の爲には、ヘレム（棄てられし者）となつても、神の尊前に彼等の靈魂を贏け得んかな。（ローマ書九ノ三）

いな、イスラエルは棄てられない。神の賜は、假ではない。イスラエルは神の御言を受けつぎ、キリ

ストは、肉に於て是より出でたではないか。彼、サウロが、月たらずの流産兒にして、慈悲を蒙つた以上、イスラエルは神に棄てられたのでない。（ローマ書一一ノ二）

しかしながら、もし、ユデア人の大部分にして、光明の賜に身を背けたならば、——サウロは彼等の頑なることを洞察した、——彼等の特典をつぐは何人であらう。神はイスラエルのみの神ではない。神はすべての國民を創造り、且、統治し給ふ。アブラハムは、己の裔に於て、一切の國民の祝さるべきを識つてゐた。彼の裔とは、イスラエル全體の事ではない。エッセの莖より咲き出でし一輪の花は、豫言者イザヤが

『是ぞ我選みしわが僕、わが心によく適へる最愛の者なる……彼は異邦人に正義を告げん。……折れたる莖を斷たず、煙れる麻を熄す事なからん、又、異邦人は彼の名を仰ぎ望まん』（マテオ一二ノ一八—二二）に引用せられたるイザヤ、四二ノ一—三）と告げしものである。

死の陰に坐せし國民の上に、光はさし始めた。神の御子は、たゞユデア人の爲のみならず、全人類の爲に、御血を流し給うた。いまや萬人、みな天父の食卓に坐して、共にこの葡萄の美酒を汲むことが出来る。

使徒等は聖主の『往きて、萬民に教へよ』との御意志を帶した。『七人』の一人、フィリッポは既にエチオピアの閹者に洗禮を施し、ペトロも、また、イタリア隊の隊長、コルネリオに受洗を許可した。

サウロが、己が使命を識つたのは、天啓によつたのだらうか。彼の特殊の天職が、この時、どれほど彼に自覺されたかは、到底、不明である。しかし、少くとも、異邦人を天國に導くことが自分の使命であるとの自覺は既に生じた。彼は神の奴隸となつて、反つて自分の將來を擴げた。雄大なる企畫が自ら眼前に展開した。

此の使命は、何故に彼のものにして、他人のものでないか。若し彼が、かく自問しても、それに答はない。何故ぞ。陶師やきものしは己が土器の主であるからである。〔ローマ書、九ノ二〇〕。神が彼を『母の胎内より選み』給ひしは、〔ガラチア書、一ノ一五〕恥辱の器を『恤あはれみの器』となし、主の哀憐と光榮とを顯し給はんが爲である。

サウロは、この不可思議なる召命が、反抗す可らざる神の聖旨なりと悟つた。しかし、なほも之に裏書をする爲に、一人の人が彼の許に遣されて、盲目の暗夜に學んだものと、同じ使命を彼に傳へてくれた。

この頃ダマスコにアナニアと云ふ人があつた。使徒行録によれば〔九ノ一〇〕、彼はイエズスの弟子、

即ち、サウロが改心以前に、逮捕する豫定の一人であつた。ダマスコに於るキリスト教徒の一團は、既に、かなり多數の信徒を有したのだらう。然らずば、迫害の手が、此處まで延びる筈がない。此の地に於ける信徒は、主として、此の大商業市に多數ゐたユデア人より成つてゐた。アナニアは、キリストの御名に於て洗禮は受けてゐたが、『律法を遵奉し』會堂シナゴグの敬虔なる一員であつた。〔二三ノ一二〕。彼はユデア人にも信用厚く、實に、正義の爲には、潜かに獻身盡力する事を惜まざる義人の一人であつたのである。

主は、幻影まぼろしにアナニアに現れて、曰ひ給ふ。

『起ちて、直すくと云へる町に往き、ユダの家にサウロと名付くるタルソ人を尋ねよ、看よ、彼祈り居るなり。此の時、彼はアナニアと名くる人の入來りて、視力を回復せん爲に、己に接手するを見るなり』と。

アナニアは答へる。

『主よ、此の人が、エルサレムに於て、主の聖徒たちに爲し、害の如何許なるかは、我、多くの人に聞きしが、此處にても、彼は司祭長より受けて、主の御名を呼び頼む人を、悉く、捕縛するの權を有せり』と。

主は更にアナニアに曰ふ。

『往け、蓋し、彼は異邦人、國王、及び、イスラエルの子等の前に、わが名を持行く爲に、我が選みし器なり。故に、わが名の爲には、如何許苦しむべきかを、我、之に示さんとす』と。

是に於て、アナニアは往きて家に入り、彼に按手して云つた。

『兄弟、サウロよ、汝の來れる路にて、汝に現れ給ひし主、イエズス、汝が視力を回復し、且、聖靈に満たされん爲に、我を遣し給へり』と。

忽ち、サウロの目よりは、魚鱗の如きものが落ちて、視力を回復した。彼は立つて、洗せられ、聽て食事して力づいた。〔使徒行録、九ノ一〇—一九〕

極めて卒直に記述された此の奇蹟談は、主がサウロに其の使命を明瞭に指示する爲に、如何ばかりの煩勞を惜み給はざりしかを、吾人に示すものである。サウロの許に、洗禮と聖靈の賜とを齎らして往けと、アナニアが命じられる其瞬間に、サウロもまた神の使者の來るを見る。この二つの幻影の、時を同うして與へられたのは、それが天上よりのものなる證據であつた。

聖靈の賜りし後に、彼に將來の新生涯についての、より、精細なる啓示が與へられたと思はれる。キリスト、自ら聖書の豫言を以つて、己が受難を證し給うた。サウロは苦惱の眞意義を解し、之を愛する事

を學び、フアリザイ人としての彼の眼に閉されてゐた、イザヤの神の下僕を識るに至つた。曰く、

『悲哀の人にして、病患をしれり、また、面をおほひて避くることをせらるゝ者のごとく侮られたり：

・彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれたり』〔イザヤ、五三ノ三—五〕と。

サウロは、いまや、キリストが、其の御杯よりの一大滴を彼に頒ち給ふべきを知つた。氣力を回復する爲に攝つた食事は、必ずや主の御死去の紀念なるパンをさく事によつて終つたであらう。サウロは、まことに主の御死去に與るの覺悟を以つて、之に列つたであらう。

殉教の覺悟が——殉教に對する狂信的の慾望ではない——彼の入信の證印であつたらう。たとひ、未だ『死ぬるは益なり』とまでに云はなくても、『我にとりて、生くるはキリストなり』〔フィリッピ書、一ノ二一〕と云ふのが、此の際に於る彼の心持であつた。

此の超人間的の存在を己が裡に宿して、彼は世界征服の途に上つた。神、彼にあり、彼、神にあり。さらば、何人か敢て彼に敵對せん。

四、使徒の第一歩

アナニアは、サウロを『兄弟、サウロよ』と呼びかけた。ダマスコの『聖徒等』は、兄弟としての信頼を以つて、彼をうけ入れたのである。改宗者はいつも信者に歓迎されるものである。彼は、或は、期待されなかつた客人か、或は、生家に戻る放蕩息子なのだ。サウロの悔悛と、洗禮とは、人々をして、其の過去を忘れさせた。假令、その記憶が残つてゐたにしても、それは、もはや、彼の奇蹟的改心について、神を讚美し奉らんが爲のみであつた。彼が主を見奉つた事は——弟子等の了解する所によれば——十二使徒の證言と異なる種類の、主の復活に關する有力な證據なのである。強ひられし告白と、之を實證する盲目状態、並びに一對の幻影の後に行はれた、此の盲目状態の奇蹟的治癒が、即ち、これであつた。

イスラエル人も、頑なること異邦人と異ならない。彼等の肉心の心を擾すには、かゝる具體的の事件を要したのである。キリスト教徒が、サウロの口づからその改心談を聞けば、恰も、物語の火焰ほのほの彼方に、見えざる『訪問』に觸れるの感がした。『キリストは、その約束し給ひしが如く、還り來り給ふま

で、我等と共に在し給ふ。而して主は、教會を滅さんと計りたる者を用ゐて、之を救ひ給ふなり』と、彼等は、更に確信を以つて繰返した。彼等にとつて、サウロは勝利のトロフィーであつた。彼等の中の達見者は、多少の程度に於て、彼の將來を、既に豫想した。戦車のやうな、此の倭軀の人は、嘗て『真理』に反抗する爲に使役した、彼の全勢力を一轉して、『真理』の爲に、しかも、聖靈の扶助によつて、それを百倍にも倍加して、用ゐるやうになるであらう、と。さうして、既に此の頃から、すべての兄弟等が、彼の奮發を感じた。彼の新しい愛徳の火は、火事の焰のやうに燃えひろがつた。

洗禮の水に洗はるゝや否や、彼は直に會堂シナゴグに入つて、イエズスの『神の御子たる事』〔使徒行録、九ノ二〇〕をたくましい聲で宣べつた。

彼が此處に用ゐ始めた方法は、ユデア人等のはげしい反抗に拘らず、最後まで彼の慣用手段となつた。彼は己が兄弟、即ち同種族の民を熱愛する。彼は、餘人よりも、先づ、彼等の救靈を冀ふ。彼等こそ、まづ福音は傳へられたのである。その故に、彼は、行くさきぐの都市で、まづ、彼等の改心の爲に働くであらう。

布教の手段として會堂シナゴグに於て説教する事には、なほ其の他の理由があつた。會堂とは、割禮を受けたユデア人のみが參集して、祈禱をする所でない。その壁に沿うて設けられた大理石の腰掛には、集會の

時刻になると、『神を畏敬する人々』〔同上、一三ノ一六、二六等〕と呼ばれるものが座を占める。是等は偶像禮拜に嫌悪を感じ、イスラエルの一神教と、簡潔明瞭なる『十誡』と、ユデア主義の非妥協的氣力とを愛し始めた人々である。パウロは、是等、ユデア教の『準信者』のことを思ひ、彼等の改心が、ユデア教々師の改心よりも有望であると考へたのだ。

イエズスが神の御子たる事、これは非常な新主張であつて、ユデア教々師がパウロにすこしも耳を假さなかつたのは當然である。パウロは、此の主張を證する爲に、單に主が彼に現れ給ひし事をのみ、己が體驗をのみ、語つたであらうか。否、彼は舊約の豫言者の書卷を披いて、その成就を告げたのである。これは、爾來、正統神學が、引つゞいて繼承する護教論の方法である。(註一)我等は、詩篇を披いて、『主、わが主に宣ふ、わが右に坐せよ、∴曙の星の前に、我、なんぢを生めり』〔詩篇一〇九〕との一節を以つて起句とする一篇を引用しつゝ、語る彼の面影を彷彿させる事が出来る。

『この子、いまだ我父、我が母とよぶことを知らざるうちに、ダマスコの富と、サマリアの財寶はうばはれん』〔イザヤ八ノ四〕と云ふイザヤの有名な一節も、パウロの説教に忘れられなかつたであらう。三人の博士は、アラビアより來り、王なる嬰兒に、東洋の富なる黄金と香料とを獻げた。サマリアとは偶像教徒の義である。即ち、イエズスは襁褓むちの中から、異邦人の讚美を求め給うたのだ。パウロはこれ

を、一切の正しき心の人に與へられた、生命の約束として説教したに相違ない。

彼が、異邦人の成聖の爲に必要な外面的條件、即ち彼の教説中、最も異色ある一點に關して既に何等かの主張を有してゐたか、否かは、興味深い問題である。異邦人が、イエズスの救済に與る爲には、まづユデア教を経て律法は一切の規定に従ふ必要があるか、或は、單に洗禮を以つて教會に入ればよいか、生れたばかりの幼稚なキリスト教會は、間もなくこの岐路にさしかゝらねばならぬ。さうして、教會の運命は此の際の選擇に關することが多いのである。此の選擇をする爲に、パウロの經驗は不足であつた。彼自身の過去から推論すれば、律法及び戒規は悉く新殿堂、些くとも、その入口の扶壁材たる筈である。

パウロは自ら律法を廢する事を敢てしなかつた。(註二)彼はチモテオに割禮を命じ、又、自らナジルの誓願をたて、模範的のユデア人のやうに、此の敬虔なる規則を完全に遂行した。

しかし、彼は、イエズス・キリストに於る信仰あらば、律法とその所業とは、人を義とする事を得ずと宣言し、且、熱辯を振つて、エルサレムの教議會に於て、從來のモイゼの禁令の單純化を要求する。矛盾してゐると云つて彼を批難するは、當を得ない。彼の主張する原則(原則としては、妥協を許さざるもの)を一身上に、實際的に緩和したのは、神のインスピレーションによつてであつた。パウロ

は、使徒としての生活の最初から、既に、自ら『我が福音』と稱ぶ教説の大體を、明に認識してゐたらしい。(註三)即ち、洗禮を受けた異邦人は、教會内に於て、ユデア人と同等である。あらゆるキリスト教徒は、ユデア教出身のものさへも、自由に律法に對してよい。聖徒一同は、キリストに於て、キリストと共に唯一の靈體を造るのである。

彼は、ダマスコで、會堂シナゴグより會堂シナゴグへと、この大膽な新説を説き廻つたらうか。使徒行録は、此の點に關して、何も語らぬ。たゞ彼の布教は、特に、『是は會て、彼の名を呼頼める人々をエルサレムに於て迫害し居たりし者にて、又、彼が此處に來りしは、彼等を捕縛して、司祭長に引渡さん爲ならずや：：然るに、このイエスはキリストなりと斷言するなり』との、一般の驚愕を惹起したやうである。

ユデア人の中にも、最初のうちは、好奇心に驅られて、彼の言を聽く者があつた、しかし、間もなく、彼等は彼を警戒し始めた。嘗ては、彼がキリスト教徒を迫害したが、今度は、彼が背教者と見做されることゝなつた。しかも、彼の背教は、公人としての反逆である。危険なる異端者を逮捕すべき命令を衆議所より托せられし彼が、背教者の先頭に立つとは。かほどに、不合理、且、怪しからぬことがあらうか。

ダマスコに於るユデア教々師等は、切齒して彼を攻撃した。しかし、彼は一步も譲らない。急端が嚴に激する如く、彼の全勢力は、この反抗に直面して、更に一層熾烈になつた。彼は一切の難問を説破した。彼等は憤怒のあまり、彼に危害を加へようとした。彼は、敢て死に直面する事を避けて數日の後に跡をかくした。

『我はアラビアに至れり』〔ガラチア書一ノ一七〕と、彼自ら沙漠に退いたことを告げてゐる、しかし、三年間の動靜を語るに、三語を以つてするのは、あまりに簡單である。

アラビアに於て、彼は何を爲てゐたか。

サウロも、古のモイゼの如く、荒涼たる高原の中に隱遁したと、昔から想像されてゐる。舊約及び新約を、シナイ山麓で、冥想する彼の面影は、物語として美しい題材である。彼も、また、シナイ山のこととは書いたが、それは全然、寓喩アレゴリであつた。

『蓋し、シナイ山はアラビアにありて、今のエルサレムに當り、其の子等と共に奴隸なり。』〔ガラチア書、四ノ二五〕

彼が是等の地方に滞在した痕跡は、一つも残存しない。勿論、彼も靜思する爲には、道路もなく、家屋もない、曠野の寂寞を愛したであらうが、沙漠と雖も、大洋と等しく、長らく彼を引留める魅力は有つてゐなかつた。この點に關しても、他の多くの事物に於ると等しく、彼は、豫言者よりも、むしろキ

リストを學んだのである。彼の談話に際し、自然に舌上に上るは、都會人の比喻であつて、石工が石を刻む狀、武装した兵士の一隊、競技場ステヂヤに於る選手、節儉の價値、商賣の取引を解する人々等が、交々説教に利用される。

キリストが彼を選び給うたのは、異邦人にその御名を宣べしめんが爲であつた。されば恐らくは、此の期間にも、彼はペトラの地に於て、或はファランの山に棲む人々に、福音を説いたことであらう。ペルシャの絨纒、インドの眞珠を運ぶ隊商の通路に當るこの地方には、ユデア人も少なからず居住してゐた。それにも拘らず、彼が一度も、この布教について語らないのは、何等の永續的效果が残らなかつたからである。それは、恰度、自分がクプロ島に建てた教會の管理を、バルナバに委托してから後の、同島の布教旅行を略してしまつたのと同じ筆法である。

やがて、彼は大なる信頼を以つて、ダマスコに歸つて來た。これも、後年、彼が、リストラ、イコニオム、プシチアのアンチオキアを追はれ、リストラでは石撃にさへ遇つた後に、再び是等の町々に歸つて來たのと、同一のやり方であつた。

ダマスコでは、既に、會堂シナゴグの司等は、彼の棄教を、エルサレムなる衆議所、特に、司祭長の許に通知し、衆議所から、この反逆者を引捉へて裁判所に拘引し、相當の刑罰を加ふべしとの命令を受けてゐたに相違ない。

しかし、その當時には、サウロは、ダマスコを遠く離れてゐた。この度、彼が此の町に歸還してみると、留守の間に、ローマの統治力は著しく發展して、何人も、ローマ公民たる彼を不法に逮捕し、或は、追放する事の出來ぬ状態になつてゐた。ダマスコのユデア人は、遂に彼を暗殺しようと計つた。彼は此の陰謀を知るや、直ちに市中に潜伏し、次で、ひそかに逃亡しようとした。ユデア人等は之を防ぐ爲に、アラビアのアレタス王の配下なる州長の援助を求めた。市内の警察權を有する州長は、命じて城門を警戒させた。(註四)

弟子等はサウロを遁がす爲に、冒險を敢行した。即ち、パンや魚を容れる柳製の圓籠の中に彼を忍ばせて、城壁の傍に棲んでゐた或信者の家の窓から、一夜、城壁づたひに之を吊下げ、無事に彼をダマスコから落してやつた。

パウロは、後年、其の頃の事を追想して、讐仇の劍より、己を救出し給ひし主に光榮を歸した。「コリント後書、一一ノ三二—三三」

彼は、それより、エルサレムに向つた。この擧は、もし聖靈が彼を特に導き給ひし所ならざりせば、好んで危険に身を曝したとの譏を免れ得なかつたであらう。聖都には、彼の爲に、他の陷罪が設けられ

てゐたのだ。

十二人の首長なるペトロに親しく見えて、相語らんとは、パウロの年來の希望であり、「ガラチア書、一ノ一八」又、教會の柱たる主の兄弟、ヤコブと、ヨハネにも「同上、二ノ九」近づきたいとの希望があった。

しかし、エルサレムに於る此の滞在は、彼に、大なる試練の機會となつた。

最初の中には、ユデア人は、格別、彼を煩はさなかつたやうである。ダマスコの事件も、もはや三年の昔となつて、ユデア教側の迫害も終熄してゐた。ローマは衆議所の一切の暴力的行爲を禁止したので、それでも、サウロは、そのローマ公民の特權にも拘らず、多少の復讐を免かれる事は出来なかつたが、しかし、彼にとつての最大の苦痛は、むしろ、聖徒等の側から來た。彼は弟子等の列に加はらうとした。記者は、彼が『彼等の中に連らん』とした〔使徒行録、九ノ二六〕と、卒直に書いてゐる。しかし、弟子等は彼が信者となつた事を信じなかつた。彼の奇蹟的改宗は、遠隔の地で行はれた爲に、偶々その物語を傳ふる人があつても、諸人の疑惑を解くには足りなかつた。又、弟子等の中でも、ユデア主義の人々は、彼が洗禮を受けた異邦人を、教會の中でユデア教出身の人々と同列に置くことが、自分に托せられた使命であると稱してゐるのを聞き知つて、惡意より出た風評をひろめてゐたに相違ない。サウロ

にとつては、自分の眞率が疑はれ、神の大能の事蹟が論議せられるに増して、辛い事はなかつたであらう。

十二使徒は、首領たるに相應しい慎重の態度を持して、彼を近づけなかつた。しかし、サウロは、彼に似た性格を有し、大膽にして、熱烈なるバルナバに交を求めた。二人は直ちに莫逆の友となつた。バルナバは奇蹟を信じ、サウロの受けた啓示を信じ、かゝる伴侶の將來を豫測する事が出來た。それで、バルナバは、サウロの手を携へて彼を使徒等の許に導いた。

パウロとペトロの邂逅、二本の杖を、十字架の形に組合せて、將に世界を征服せんとする二個の英雄の邂逅は、あらゆる意味に於て、眞に驚くべきものであつた。

サウロは、主が途上に於て彼に現れ、語り給ひし次第、さては、彼がダマスコの諸會堂シナゴグの中で、イエズスを神の子なりと宣言した事などを話した。

彼の談話は、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを驚喜させた。サウロの熱情と確乎不拔の信念より生るゝ魅力とは、三人の使徒を魅了して、三人とも、即座に彼の親友となつた。彼等は、共に、エルサレムの街を歩んだ。サウロはキリストの受難の記念を尋ね、又キリストの復活の後に、彼と共に飲食した人々に、彼の事蹟を問ひ質した。

彼は他の使徒等の布教方針と、自己の布教方針とを比較した。ペトロは、此の時、未だヨッペの異象に接してゐなかつたのであらう。彼は、忠實なるユデア人として汚れし食物を避けねばならぬと信じ、又、未だ、偶像教徒に對する、國民的輕蔑の感情を脱しきれず、割禮を受けたキリスト信者と、洗禮を受けた偶像教徒との間に、絶對の平等を容認することを困難に感じた。併しながら、ペトロもまた、悔悛と救靈との恩寵は、萬人に共通するものなることを肯定した。

サウロは、ペトロの心眼を開いて、彼をもつと宏量ならしめんとした。又、同時に、彼より福音的聖傳に關する豊かな智識を頒け與へられた。主はサウロに親しく、多くの事柄を啓示し給うたが、(註五)しかし、特殊の教義の解釋、秘蹟の授與方式等に關しては、彼は、この會談によつて、學ぶ所が少くなかつた。

エルサレムで、サウロは、また、彼自身の改宗前の知人と邂逅した。特にシリシア、シリア、シレネの出身の、ヘレニストのユデア人等と語を交へる機會を發見した。彼は、やがてメシアの既に來り給へること、萬民、救靈に與るべきこと、等を説いて、彼等と爭論を始め出した。

ユデア人の誇を傷けること甚しき、かゝる邪説は、彼等の到底許容し得ざる所である。サウロは社會的害毒である。如何にしても、彼を葬り去らねばならぬ。かくの如き次第で、ダマスコに於ると同じく、彼の暗殺が再び茲に計略されるやうになつた。

サウロは之を探知したが、今回は敢て所在を昏まさうと考へなかつた。彼の仇敵の偏執も、ユデア主義キリスト信者の猜疑も、彼が、兄弟の救靈の爲に働かうとする熱心の前には、何の恐怖をも生まなかつた。しかしながら、一日、彼は異象に接して、その計略を變更した。即ち、彼が神殿にて、祈つてゐた間に、彼は恍惚たる脱魂エキスタシスの裡にイエズスを見た。主は曰うた。

『急げ、早くエルサレムを出でよ。そは、人々、我に關する汝の證明を承容れざるべければなり』と。

サウロは、自分の考を述べて、主の命に反對した。

『主よ、我が曾て主を信する人々を監獄に閉籠め、之を諸會堂にて鞭うちしこと、又主の證人ステファノの血の流されし時に立會ひ、且、賛成して、之を殺す人々の上衣を守りたりし事は、彼等の知る所なり』と(即ち、我が證明は、彼等にとりて、他人の證明よりも、一しほ有力なるべし、との意である)。されども、イエズスは反覆し給うた。

『往け、汝を遠く異邦人に遣すべし』と。(使徒行録、二二ノ一七―二二)

此の異象は、聖パウロの生涯を飾る、他のすべての異象の如く、全然、彼の意志でない所に特徴がある。彼は啓示を求めない。しかし、彼が光明、或は慰藉を必要とする時に、神は忽然として之を去り給

ふ。さうして、彼は其の中で、精神的方面を記憶するのみである。彼はエゼキエルの如き、ヨハネの如き、幻視ではなかつたのである。『黙示録』を彼の筆になつたと、想像する事さへも困難である。此の書に記載された、種々の繪畫的幻影は、彼の天分と全く異つてゐる。世界終末に關する警告に於ても〔テサロニケ書後、第二章〕彼は、詳細を嘗て口頭に物語つた所に譲つて、キリスト再臨の際に生ずる二三の事件について、注意を述べるだけである。彼もまた、光榮裡のキリスト再臨を希望する。これは、すべての弟子等の希望する所であり、また、我等も希望する所であらねばならぬ。『主よ、來り給へ』とは、キリスト信者の唯一の期待である。(註六)パウロが、其の後、或は屈辱、或は勝利のメシアに關する豫言者の言を、引用してユデア人にイエズスを告げる際には、他日、テルチュリアンが彼等に説教するに用ゐると同じ論法を以つてする。(註七)即ち、吾人は二種のキリストの來臨を區別せねばならぬ。キリストは、まづ、犠牲として來り給うたが、次で其の御言に應じて、光明の榮譽と、喇叭の響との中に、天の諸軍を従へ、稜威を以つて、雲の上に現れ給ふであらう。

今も、パウロはキリストの神祕的存在、靈の交通を有してゐる。時として、彼は、第三天にまでも擧げられて『得も言はず、人の語るべからざる言』を聞く。〔コリント後書一二ノ四〕。彼は、その生涯の廻轉期に、彼を正し、彼を強める言を聞く。

エルサレムに於る彼の最初の異象は、彼の將來の目標を確定した。ペトロは、ユデア出身の諸教會を牧すべく、彼には、賤しい任務、未割禮の異教徒が托される。

彼がガラチア人に書贈つて、彼がエルサレムを去るや『キリストに在るユデアの諸教會は、わが面を知らず、たゞ曾て、我等を迫害しつゝありし人、今や、己が曩に亡ぼさんとしたりし信仰を宣傳ふと聞き、我に就きて、光榮を神に歸し奉りつゝありき』〔ガラチア書、一ノ二二―二四〕と云つたのは、其の爲である。

使徒等は、彼に、イスラエルの不信に關する、イエズスの有名は比喻を語つたに相違ない。小作人が遣された主人の子息を殺した爲に、他の人々に貸與へられた葡萄園の比喻、婚宴に招かれた者は、手足を縛せられて、外の暗に投げ出され、路傍の不具者が、之に代りて宴席に連る比喻等。神殿の破壊、エルサレムの滅亡に關する豫言も聞いたに相違ない。しかし、驚くべき事には、彼の書簡は、是等の有名な物語に、一度も觸れてゐない。彼が聖體制定を語るのは、主親しく之を告げ給ひしが故に他ならぬ。彼は共通的の教訓を繰返へさぬ。彼の使命は『彼の福音』即ち、直接に啓示を受けし眞理に限る。但、それらは、『柱とも見えたる』人々の同意を経たものである。

彼がケファと共に、エルサレムに留りしは、十五日間に過ぎなかつた〔ガラチア書、一ノ一八〕。此の地

を去る時、信者等は、カイザリアまで彼を護衛した。サウロは此處で兄弟等に別離を告げて、船に投じて、シリアに向ひ、己が故郷なるタルソに歸つた。彼は其の地で何をしたか。アラビア滞在期間の如く、吾人は、この間の彼の詳細の行動を窺ふことが出来ぬ。彼の生涯は、時々沙漠の中に吸込まれて姿を隠す河流に譬へることが出来る。さうして、假令、其の所在を明にするを得ざる時にも、地底に激する水勢を想像する事が出来る。河流が再び地上に現れる時、吾人は水量の増加して、さらに豊に養分に富めるを發見するからである。

(註一) これが、聖ユスチノの『トリフォンに與ふる書』テルチュリアン、聖アウグスチノの各自の『對ユデア人論』等、諸護教家のユデア教徒に對する慣用法である。

(註二) 『さらば、我等は、信仰を以て律法を亡ぼすか、然らず、却て律法を固うするなり』ローマ書ノ三ノ三一。

(註三) 『我が福音』なる名稱に關しては、ローマ書、二ノ一六、一六ノ二五、チモテオ書二ノ八、コリント後書四ノ三、コリント前書一五ノ一、ガラチア書、一ノ一一、一〇ノ八を参照されたい。

(註四) 此の當時に於るシリア地方の歴史は極めて複雑である。しかしながら、一地方にローマの威令が行はれ、然も、同時に一部の警察權が地方人に存してゐた事は、必ずしも不可能でない。今日のシリアの状態もこれに類似してゐる。

(註五) コリント前書、一一ノ二三参照。

(註六) 初代の信者等は集會毎に、マラン・アタと誦へてゐた。この二字のアラメアン語は、この期待の表現で『主よ、來り給へ』或は『我、速に來らん』との義である。

(註七) テルチュリアン、『對ユデア人論』第十四章。

五、タルソにて不明の歲月

タルソの町のある家の中庭にごく古い井戸が残つてゐる。庇の下の、低い大理石の井戸側には、釣瓶の繩の摩擦によつて自然に生じた、狭い溝さへもある。此の井戸の水は、非常に甘い。あの時、此の井戸から、ギリシヤ文で『パウロス』と鏤つた、玄武岩の一片が発見されたので、爾來聖パウロの井戸と呼び慣られてゐるけれども、これが本當に、聖パウロに關係があつたか否かは勿論、不明である。しかしながら、自分が生れた此の町、或は、附近の何處かに、恐らく隱修士のやうに、山のある洞窟にかくれて、何等特筆すべき外面的の事件もなく、神祕的の生活を營んでゐた、サウロの快い暗黒の數年間を象徴するには、極めて適當だ。想ふに、彼は、人里を離れた何處かに、沈黙の裡に、永遠の上智の源泉に渴を醫しながら、時々、町に下りてきて聚め得た神の賜を、兄弟等に頒けてゐたであらう。

凡そ大事業を創始する者は、同時に觀想者である。イエズスが山に上つて祈禱に夜を明かす模範を、弟子等に遺し給ひしも、蓋し偶然ではないのである。エルサレムに於るサウロの脱魂エクスタシスは彼が祈禱中の出來事であつた。又、一時も休息することなき此の使徒は、後年、テサロニケ人に『絶えず祈れ』(テサロ

ニケ前書、五ノ一七)と命じてゐる。

彼がタルソに隠れてゐた間、祈禱し默想し、聖書の照應を研究した以外に、何をなしたかと詮索するのは、寧ろ無用の業である。

假令彼が、布教したとしても、(これを全然しない事が、果して可能であつたらうか)それは親戚、故舊の間に於る個人的傳道であつた。彼が故郷の町に教會を建てた形跡は全然ない。彼の書簡には、一度もタルソの名が現れぬ。彼もまた、その故郷に於て豫言者でなかつた。

彼が故郷に長く留つたのは、彼自身の志意であつたらうか。それとも、忠實なる奴隸の如く事へ奉る主より、試練として彼に課せられたからであらうか。

この間に、彼の思索はどう發展したか。彼の内部に於る、教説の神祕的成長は如何に。これみな、萬人の知らんとする所である。

パウロのギリシヤ化に努力する歴史家は、タルソに於て、彼はギリシヤ哲學、並に、密儀教を研究して、後に、その神學中に之を合成したと想像する。(註一)

ロアジールは、『神の死によつて、萬人が救濟すくはれるとの思想は、古來、各種の密儀教に存在する』パウロは、これを換骨奪胎して、單純化し、普遍化したるユデア神學に當嵌めたばかりである、と主張す

る。

かくの如きは、パウロの信仰の由來を尋ねる時、實に、一顧の價値もない臆説である。彼が救主なるイエズスを信ずるに至りたるは、その眼を以つて眺めたからである。彼は架空の一人物を中心として、その周圍に自己の創造になる一教説體系を作り上げたのではない。彼の思索は自己の製作ならで、單に自分が記憶する事實を材料として、その上に建設したのである。

彼は、アダムの墮落が、死の種子を傳へたと教へた。しかし、それは彼の新説でもなくギリシャの神話によつたのでもなく、『わが母は、罪惡の裡に、我を懐胎めり』〔詩篇五〇ノ七〕と歌つた詩篇作者、即ちユデアの聖傳によつたのである。

彼は、また、その改宗以來、キリストは、萬人の罪惡を贖はんが爲に、罪人となり給うた、彼は神の子に在して、死に打勝ち給うた、又、その奴隸の形をとり給ひしは、我等をして彼に於て神とならしめ給はんが爲なるを知つてゐた。彼は罪と赦との間に、論理的關係を發見して、神の偉大なる攝理の一端を、その能力に應じて説明したゞけである。

救済に關する彼の思想は、決して密儀教より假り來たものでない。密儀教に關する彼の智識は、恐らくは、聽いたことがある位の程度であつたであらう。若しも、彼がディオニズス、イシス、ミトラの祭

典を研究したならば、惡魔禮拜として、恐毛をふるつたに相違ない。彼の精神に對して、密儀教の影響は皆無である。

彼が密儀教を名指して批難した事はない。しかし、それは、

『彼等は、朽ちざる神の光榮に易ふるに、朽つべき人間、鳥、獸、蛇等に似せたる像を以てせり』〔ローマ書一ノ二三〕

との、一般偶像教に對する嘲罵あざけりの中に含まれるのである。

彼が密儀教を魔術、偽瞞、若しくは妖法を用ゐて、不思議を覓むる徒と同視して、之を嫌惡したことに就ては、一點の疑問もない。魔術に對する彼の態度は周知である。クプロ島に於て、彼は魔術者エリマを罵り、神罰の徴として、彼を盲にした。又エフェゾにては、彼は、兄弟等の集會の面前で妖書を焼き棄てた信者を賞讃した。

魔術と、密儀教とは、古來極めて因縁の深い間柄であつた『言語の表現する所は、必ず實現すべし』とは、魔術者と、密儀教の信者とに共通の原理であつた。エリウシスの密儀に於て、暗黒中、一道の光明裡に一穂の神麥を仰いで『慶きかな、光明よ』と叫ぶ歸依者は、自分が陽春の日光の活力を受ける大地の働を本當に扶助たすけてゐるのだと思ひ込んでゐた。さうして、彼等は下界の暗黒中より、不朽の歡樂

世界に導かるゝ眞實の祭祀に與つてゐるのだと信じてゐた。

密儀教の神話と祭典が、もし、キリスト教の教理と祭典とに類似してゐたとしても、それは極めて粗大な類似であつたのである。『見えざる者』に對する憧憬、至福の願望の萌芽が、密儀教の中では、殘酷、或は、醜猥な儀式と、漠然たる象徴とに混じてゐた。後年の護教家——例へばユスチヌス——の如きは、之を以つて、惡魔の發明した偽物だと論じてゐる。

オルフェウス教のザグレウス神話も、決して、キリスト教の救済の犠牲、或はユウカリステアに於ける神人の合一と同意味のものではない。

ザグレウスは小兒であつて、ティタン等の襲撃を避けんが爲に、牡牛と化る。ティタン等は之を捉へて八裂とした上で、煮て食べてしまふ。たゞ心臓だけが忘れられる。ザグレウスの妹、アテネは、之を拾つて、ゼウス神の許に持つて来る。ゼウスは、此の心臓を食べる。すると、ザグレウスは生れ替つてディオニゾスとなる。ゼウス神は神罰としてティタン等を雷撃する。ティタン等の死灰から生れ出たのが、人間で、人間は其の祖先の罪を擔つてゐるのである。それ故、此の祖先の罪を淨めようとするならば、密儀の祭祀によらねばならぬ。

此の物語の中で、第一に注意すべきは、ザグレウスが、世を救ふ爲でなく、逃れきれずに死ぬ事である。彼の心臓が、ゼウス神に食せられて、再生すると云ふが如きも、ユデア人の眼より見れば荒唐無稽のギリシヤ的空想である。又、歸依者と雖も、ザグレウスの受難と復活とに、自己を一致せしめて、其の功德によつて救はれると信ずるのではない。(註二)

オルフェウス教徒によれば、物質と精神との間には、絶對的の矛盾がある。靈魂は、肉身の牢獄より、徐々に脱出しなければならぬ。靈魂が肉身の裡にあるのは、前世で犯した罪の酬である。聖徳とは、自己の内部に、神的分子を發見することであり、従つて、吾人は、あらゆる肉的事物を避けねばならぬ。それ故、肉食、屍體に接觸する事、結婚式に與る事は、固く禁ぜられ、沐浴して身體の不淨を減すべきことが命令される。彼等の清淨は、消極的であり、主として身體的である。しかし、さう云ふ、彼等の來世の幸福の希望は、〔註三〕自己撞着ではあるが、天國に於る歌吹海裡の大舞踊、大宴會であつた。(註四)

之を要するに、密儀的偶像教は、地を離れることが出来なかつた。その欲する所は、神人の一致にあるのであるが、これは、畢竟、あらゆる宗教に共通する所である。彼等の神と稱するものは、自然力の總稱に過ぎぬ。ストア哲學者の神と云ふのも、大宇宙のことであり、人間の靈魂は其の本源に歸一して消滅する一分の閃光である。

されば、彼等の憧憬する神人の一致も、この汎神論的涅槃に終るのでなければ、神祕的の神力を假り來らうとする試に過ぎない。

ミトラ教の大司祭が、祭服を纏つて、坑に下り立つと、屠腹した牡牛の血は雨の如く、彼の頭上に注がれて、彼の頬、眼瞼に流れる。彼は、全身、血に塗れながら、口を開いてほとばしる黒血を飲む。犠獸の血の中にひそむ神が、彼の体内に入つて、神通力を與へると信するのである。即ち、彼の祈禱によつて、大地と家畜との生育力はいやゆたかに、彼自ら、また、不死の賜を受けると信じてゐた。

これが、ミトラ教の洗禮であるが、キリスト教の洗禮が、その模倣であるとは受け取れない。キリスト教の洗禮の源は、ユデア教のよめきの式に求むべきものである。キリスト教に於ても、オルフェウス教に於ても、受洗者を、また、被照者と稱した事實から、キリスト教が此の儀式をオルフェウス教より借用したと推論し得るであらうか。

アブレイウスが『メタモルフオセオン』の第十一篇に記載した、イシス女神歸依者の洗禮は、公衆浴場で行はれて、一の儀式に過ぎなかつた。女神の讚美は、あらゆる他の神々の高德を兼ね有する最高の神としての連禱であつた。しかし、イシスは『自然』の大能の象徴であつて、(註五)己が自由意志に基いて天地を創造し、己が像に肖せて人類を造つた、無限の人格神とは非常な懸隔がある。イシスは其の

信者を愛しない。女神は彼等と共に、又、彼等の爲に、苦むことをしない。

如何ぞ、パウロがかくの如き密儀教より、教義と祭典とを假り來らう。彼は、既に、キリスト・イエズスに於て、信仰の光明、祕蹟の不思議と能力とを識つてゐた。

假令、彼がオシリス神の死と復活との神話を聞いたとしても、彼のとつた態度は、輕蔑を交へた無關心であつたであらう。さうして、もし、このエジプト偶像教の信者が、キリストの復活を聞いて、自己の偶像の復活を説いたならば、使徒は、次のやうな質問を發して、彼を困らせたことであらう。

『一體、貴下の神の受難と復活とに、貴下は如何なる關係があるか』と。

『オシリスは、今や、光榮裡の歡樂中にあつて、私共とは關係がない』と、エジプト人は答へたであらう。

それならば、オシリスとイエズスとの間に、何のかゝりがあるらう、イエズスは『見え給はざる神の御像にして、一切の披造物に先だちて生れ給ひし者なり。蓋し、天にも地にも、見ゆるもの、見えざるもの、萬物は彼に於て造られ……彼を以つて、神は萬物を己と和睦せしめ、其の十字架の血を以つて、地にあるものも、天にあるものをも和合せしむ……我、キリストの御苦の欠けたる所を、御體なる教會の爲に、わが肉體に於て補ふなり』(「コロサイ書、一ノ一五―二四」)。

又もし、エリウシスの歸依者が、彼に、その齋戒を誇つたならば、彼は、無遠慮に應へたであらう。『謂ゆる、觸るゝ勿れ、味ふ勿れ、扱ふ勿れの類は、皆、用ふるに隨ひて盡くるものにして、人間の誠と教とによれり。彼の崇拜、謙遜、身を吝まざる點に於ては道理めきたるものなれども、其の實は尊き事なく、唯、肉慾を飽かしむるのみ』と(註六)同じく、エリウシス教の歸依者が、キリスト教徒は、神祕的聖血の杯をかたむけ、その神の肉を嚼つと聞いて、パウロに己が宗教の聖餐式の事を語つて、自分等も、また、大麥粉と薄荷とを水に温めて飲んで神を祀ると云つたならば、使徒は此の盲目者を悲しげにみつめて、ユウカリスチヤの祈禱をつぶやいたであらう。

われらの父よ、我等、主に感謝し奉る。

御子、イエズスによりて、識らしめ給ひし

主の下僕、ダヴィドの聖き葡萄の故に。

世々に至るまで、主に光榮あれかし。(註七)

パウロの書簡に散見する『奧義と云ふ文字、其の他の用語や、又は、彼が用ゐた比喻の或者は、密儀教の歸依者に、全然、耳新らしくなかつたであらう。例へば、パウロが『父は暗黒の權威より我等を救出して、最愛なる御子の國に移し給へり』(コロサイ書一ノ一三)と云ふのは、ハデスの冥府と、地上世

界、生者の國の光明との對照に、外觀的に似通つた所がないと云へない。しかしながら、彼は、此の通俗的、民衆的の比喻に藏して、新しき教、神の眞理、異象と奇蹟との徴に保證された、未來の眞實の事實を説くのである。

密儀教は、キリストの靈への世界の改宗の妨となつたにしても、その扶助とはならなかつた。密儀教は、簡便な神祕を餌にして、人間の宗教的不安を麻痺させた。その歸依者等は、今日、回教徒を満足させてゐるやうな儀式や、外面的の洗滌式を以つて、安價に救靈を獲てゐた。テイアソイ *Thiasoi* と稱する彼等の集會は、キリスト教の進歩につれて、一種の慈善團體のやうになつていつた。しかしながら、キリスト教への改宗と云ふ立場から見れば、彼等は、無力な古くさい偶像神の信者たちよりも、もつと教化に困難であつた。イシスの禮拜者が、この幸福なる女神に代へて、一個の十字架上の刑死者を拜まねばならぬ理由は、發見するに困難である。況や、此の新しい神が、天國の榮冠を得しめんが爲に、其の信者等に與へるのは、同じ十字架の木なるに於てをや。又、降神術スピリチズムや接神論デオソフワイの歸依者等は、一種の超自然的生活に似たものを有してゐるだけ、救世主に背モヒラをむけ易いのである。

パウロは、福音に利する所があるやうでも、虚偽、且、冒瀆なる皮相の類似を、敢て利用しなかつた。

光明の子の自由は、彼が『世の小學』（註八）と稱ぶものに、之を従屬せしめんが爲に、有するのであるか。

哲學者等に對しても、彼は、同じ獨立不羈の優越的態度を持した。たとひ、時として、プラトンやアリストテレスの用辭を踏襲し、アデンス人のなすが如くクレアントスの一句を引用することがあつても、又は、議論の云ひ廻し方に、ストア哲學者の口調を彷彿するものがあつたにしても、それは大して意味のある事ではない。道傍や、廻廊の蔭や、或は、學校の門前で、彼は度々放浪哲學者と出逢つたであらう。杖を手にして、うす汚い外套をまとひ、髯もぢやくの塵にまみれた長髪の乞食哲學者。彼が彼等の議論を聽いて、その空虚しい智慧を説破したことも、一再ではあるまい。彼にとつては、是等、虚偽の役者は、頑冥なる狂信的偶像教徒より、さらに危険であつたのだ。何故ならば、彼等は、弱者の傲慢に阿つて、完全なる義人なりと誤信せしめたから。

ストア哲學者の神は、自ら運命を作つて、しかも其の支配を受ける。哲學者等の説によれば、それは萬象を抱有する一個の球狀體である。（註九）かゝる説をきいた時、パウロは、抱腹して、其の愚昧を笑ひたかつたであらう。『人の性は善なり。惡は吾人に生來のものにあらず。惡と云ふも、思想の誤謬にすぎず』（註十）。此の説を、キリスト教の原罪説、世界と全く異なる自由神の信仰、此の神が、我等を極端に

愛し、又、愛する爲に我等を豫定し給ひ、本來、救靈に無力なる我等の意志を、聖寵を以つて扶け給ふ、と云ふが如き教義に對照する時、其處に如何なる關係をか發見し得よう。

とは云へ、パウロの時代には、キリスト教徒と、ストア學者とは、その否定の方面に於て類似する所があつた。兩者とも、柔弱なる享樂主義、貪樂心を輕侮し、逆境と刑罰とを雄々しく蔑視した。しかしながら、其の場合に於ても、その原理と態度とは全然異つてゐた。

ストア哲學者は、人間を宇宙の中に獨り尊きもの、神たるが如きものと考へた。智識と聰明とは、彼の福音で、彼以外の民衆に、爲すべき事、爲すべからざる事を教へるのが、彼の天職なりと信じてゐた。自然の理性は、自他にとつて唯一の教師であり、運命の暴力を恐れざる『我』の自由は、其の光榮である。その爲に彼は不正と壓制とを毫も恐れない。溫良と忠誠とは教義の一端である。さうして、恰も青銅の柱幹に刻された戒律のやうに、彼は自己を以つて衆人の模範となした。彼は、平和と正義とを把握し、その精神力は、自己を絶對善の裡に置かしむるに足りた。

キリスト教徒は、これと正反對に、まづ何よりも神と其の御國とを冀求する。彼は、神なるキリストの模範を仰いで自ら謙り、全能者の力を假り奉るが故に強い。彼はそれ自身の爲に、即ち空しく智識慾を充たさんが爲に、智識を欲求しない。彼がこれを欲するのは『常住者』の中に自己を没却せんが爲で

ある。彼は自らの力によらずして、貴き聖傳を奉じ、或は、直接に聖靈より、全的にして確實なる智識を受ける。彼は自我を主張せず、諸聖徒の交りを増さんが爲に之を蹂躪する。彼の眼からは、ストア哲學者の冷かなる相互扶助は、雲の上にさす死んだ月光のやうだつた。彼が世界に齎したのは、單なる哲學體系、單なる人類愛の教ではない。彼が惡の能力ちからを追ひ退けた場所には、何處にも神の國の統一を再現した。

生命の河は若い人類の小舸を載せて流れる。河岸に残してゆくものは、何の價値もないものである。『此の世の智者何處にかある、律法學者何處にかある、論者何處にかある』〔コリント前書一ノ二〇〕とパウロは叫ぶ。彼等は彼の途上に偶々邂逅した盲目者、及び盲目者の手引に過ぎなかつた。無限の財寶の後繼者たる彼が、乞食の檻樓を奪ふ必要はない。しかし、もし、彼等の手中に、何等かの準備的眞理の存在を見れば、彼は當然自己のものとして、之を使用するに躊躇しないのである。

タルソにすごした年月の間に、サウロの心を誘つた過去の或物があつたとしたならば、それは異教哲學が彼を不安ならしめたのではなく、寧ろ、彼の幼時の想出、彼の種族に對する執着であつたであらう。彼は恐らくは、再び古い生家に戻つて來たに相違ない。彼が嘗て一度も語つたことのない老父母も、其處に暮してゐたであらう。或は、祖父や祖母も、まだ生きてゐたかも知れない。彼が子供の時

に、その傍にうづくまつた脚臺も、まだ其處にあつたであらう。安息日の前晚となると、聖油を満したランプは廣間に輝き、平素、戸棚の中に恭しく藏つてある律法の書卷は披かれ、又、食卓に對しては、律法の食物を前に『祝福の祈禱が彼の口から洩れたであらう。しかし、彼は自分の家族にとりまかれながら、孤獨の感に悩んだであらう。家族の人々の沈黙すら、彼には譴責の言辭と取られたであらう。

『サウロよ、汝はもう私共の仲間外れだ。汝は「つまらぬ者等」の弟子となつてしまつた。(註十一)『律法の言を守りて行はざるものは誣はるべし』〔申命記二七ノ二六〕との、モイゼの言を忘れたか。汝がキリストだと主張する、あの受刑者は何の能力もないではないか。彼はキリストではない。彼に注油して告げ知らせる爲に、エリアは來なかつたではないか。彼の復活をまづ第一に證明するがよい。神はたゞ一體である、三體の神を説いたとて、どして我等は汝を信じようぞ』。

サウロは、かのダマスコ途上の異象の不思議な物語を反覆したであらう。彼等は奇異の眼ざしで彼を見つめたであらう。しかしながら、彼が、キリストの聖血は異邦人をすら贖つたと説くのを聞いた時には、老人等は惻然として畏れたに相違ない。不幸の兒の空想は反逆としか受取れない。

『それならば、そのキリストを信じなければ、我々は誰も主の聖山に棲めないと云ふのか。かまはずに措いてくれ。律法は正しい。神を恐れつゝ之を守る身は侮辱を受けぬ』と何人かたれ答へたであらう。

サウロは、アブラハムも、イザアクも、ノエも、ヨブも、律法を知らずして、救はれたと證した。故に、律法は不可缺のものではない。新しい律は古の律を廢し、新約は舊約を無効とする。これよりは、過去の割禮は無益であつて、新しい心の割禮で足りるのである。神の聖書を守る爲に、無酵麴を食するのでは不充分である。御父の愛し給ふ御獨子、約束の爲に自らを捧げ給ひし御者を、力の限り愛し奉るにあらずば、獻物の中に幾斗の小麥粉、幾升の油のあるかを知つても、何の役に立たらざ。 (註十二)

サウロの近親の人々は、彼の言葉を聽くことなく、タルソの市に於ては、たゞ少數の弟子しか出來なかつたと想像される。しかし、彼等が、次の豫言を理解するやうになる日が來るだらうとの希望を失はずに、サウロは彼等の許を立去つた。

『視よ、汝の王、汝に來る。彼は正しくして拯救を賜はり、即ち牝驢馬の子なる駒に乗るなり』(ザカリヤ九ノ九) 牝驢馬とはイスラエルである。それに隨ふ子驢馬は異邦人である。さればこそ、イスラエルは誼はるゝことあらず、主はその勝利の日に喜んでこれに騎し給ひしが故に。

彼は山に退いて、淋しい處に身をかくした。今もなほ、その隱家だつたと傳へられる巖窟が残つてゐる。さうして、バルナバがアンチオキアから來て、彼を尋ね、一緒に働く爲に彼處に連れてゆくまで、こゝに住んで居た。

(註一) トウセン『ギリシヤ主義と使徒パウロ』ロアジ『異教的密儀並に基督教的密儀』参照。

(註二) ラグランジ『聖書雜誌』一九二〇年七月一日。

(註三) ウンベルト・フラカシニ『ギリシヤ密儀とキリスト教』

(註四) アリストファネス『蝦蟇』中にある歸依者の合唱参照。

(註五) 『萬物を抱有するイシスよ』フラカシニに引用。

(註六) コロサイ二ノ二一——二三。肉慾を飽かしむるのみとは、外觀的、形成的の敬虔なりとの意味である。

(註七) 此の祭典祈禱文は『デイダケ』に傳へられてゐる。この書は、第一世期の終末期、或は、なほ早く、使徒時代に、編纂せられたキリスト教教理書である。

(註八) コロサイ書、二ノ二〇、此の名稱は、恐らく日月星辰の神々の禮拜をさすものらしい。

(註九) セネカ『ルシリウスに與ふる書簡』六三ノ二二。

(註十) 同上、四四ノ五三。

(註十一) ユスチヌス『ユデア人トリフォンとの對話』八ノ三。このトリフォンが實在の人物なるか、或は假托の人物なるかは、不明であるが、そのキリスト教に對する論難は、凡ゆる時代のユデア教徒がキリスト教に對する心持をよく表してゐる。

(註十二) 『トリフォンとの對話』

六、門 出

アンチオキアの教會の創立は、迫害者サウロの仕事であつた。彼がヘレニストのキリスト教徒を、パレスチナの土地から追ひ拂つたのは、とりも直さず、斯教の發展を助けたのであつて、追放者等は、その行く先々で、先づユデア人、次で、『神を畏る』異邦人等〔使徒行録、一一ノ二〇〕に感化を及ぼすことが出来た。此の際、此の人々にユデア教的習慣、就中、割禮が要求されたかは不明であるが、多分されなかつたらうと推測される。フィリッポがエチオピアの闇者に、ガザの途上で洗禮を授けた時に、要求した唯一事は、『イエズス・キリストが神の御子たること』〔使徒行録、八ノ三七〕の信仰であつた。これは、既に、所謂『パウロ的』の方法であつたから、パウロがこれについての創見を誇ることは出来ぬ。たゞ彼は、特にそれで充分なる旨を反覆力説して、世界的帝國をキリスト教に歸依させたのである。

アンチオキアは、サマリア及びダマスコに次いで、福音宣教の最前の戦線となつた。一般に、有力な教會が成立した諸都會——例へば、テサロニケ、コリント、エフェゾ——は、いづれも、ギリシヤ人、シリア人、フェニキア人、ローマ人、ユデア人の混交よりなる世界的の都市であつた。地方的小都會や

片田舎では、風俗及び宗教の變更は、極めて困難である。同質の住民等は、その中に異分子の成立を許さない。しかしながら、五十萬も人口がある大都會では、新奇なものが生れたからとて、人の注目をひかない。世界的都市では、これに加へて、種々の人種の雜居、數千の外國人の絶えざる往來は、各種の思想を混交し、風俗の極端な頹敗は、良心の閃きを保存する人々に、遁世的思想を起させて、彼等を英雄的修道生活に導いてゆく。

アンチオキアは、今日では、地方廳の所在地にすぎない、殺風景なルビウス山麓に眠る灰色の町で、眼につくものは十數個の回教寺院の塔のみである。アマムス山脈は、城砦のやうに、單調にその前面を遮つてゐる。黄色く濁つたオロント河は、夥多の地震の爲に崩れ落ちた、無人の丘陵の間をうねつてゐる。散在する果樹園、彼方此方に集團となつてゐる白揚樹ポプラの林が、荒涼たる風景の中に、一味の清新さを添へるばかりである。町の入口には、崩れかゝつた石橋が、狭い、低いアーチに支へられてゐる。パウロとバルナバとの時代にも、このやうな橋が架けてあつた。山の中腹には、多數の洞穴がある。これは、古昔は、隱修士や、町から追放されたキリスト教徒の隱家であつた。もつと下方には、橄欖樹の間に、草に埋れて、約一里程の古い鋪道の痕跡がある。その兩側の古代廻廊の一部は、まだその名残りをとどめてゐる。これは、俄の嵐の多い地方に、便利な、贅澤な散歩道路であつたのである。山寄りの

方にある圓形劇場の廢墟は、エフェゾのものと同じく、原規模の偉大なりしを語つてゐる。チベリウス皇帝は、この所に驛馬を御すディオスクロイ（註一）の巨大な像を建てた。ゼウス・ケラウニオスの神殿はアクロポリスと市街とを落雷より守護し、パンテオンには凡ゆる神々が祀つてあつた。

海の方からは、タルソに於るやうに、エジプト及び地中海を繞る國々の商品が此處まで上り、ユウフラテ河の傍からの隊商は、此の地に、中央アジアの財寶を運んで來た。かくして、此の都會は、歡樂と魔術とに酔つた、^{まはが}噪狂しい、しかし同時に文化的の都會であつた。（ルナン『使徒』參照）チベリウス帝の時代には、アンチオキアは實に世界の第三に位する大都會で、シリア總督も此處に居住し、イスラエルの商人とギリシヤ人とが、市民の多數を占め、その活動で、市の實勢力を握つてゐた。

ヘレニストの『弟子等』、クプロ、クレネの人々が、アンチオキアに來て傳道を始めた時、その際、自然、ギリシヤ人にも教を説いた。これが新宗教の信徒等に、キリスト教徒と、ギリシヤ風の名稱が與へられた理由である。クリスチアノイ Christianoi と云ふ此の名には、一種の皮肉が潜んでゐなかつたらうか。それも可能である。十字架の光榮には、必ず多少の恥辱が附隨するものである。

かくの如くにして、アンチオキアの教會の前途が、甚だ有望であるとの評判が、エルサレムにまでも聞えたので、母教會の有力者、長老等は、バルナバを遣して、新教會を視察せしめ、更に新運動を獎勵

させた。

バルナバは模範的宣教師であつた。彼は廣大な見識と、豫言者の熱情と、權威的態度とを有してゐた。それだから、間も無く、彼の高貴な性格の中、超自然力の存在を感じる、熱情的なギリシヤ人等の衆望を聚める事が出來た。彼の風采も、堂々たるものであつたに相違ない。彼はレヴィ人で、聖職者の中に數へられてゐた。聖職者には風采のすぐれた人でなければならなかつた。又、我等は、彼がクプロ島の出身なることを知つてゐる。（使徒行録四ノ三六）然るに、今日に於てすら、ビザンチン風のキリスト像のやうな人達、何時までも終らない、長々しい祭式を司る爲に、古い壁畫フレスコから脱け出して來たやうな端麗な容姿を有するギリシヤの司祭等は、クプロ島又は附近の島の出身である。彼は、リストラで、跛者の治癒の後に「使徒行録、一四ノ一一」、その典雅な顔貌と、凜々しい音聲との故に、人々にゼウス大神の化現と信じられる、嘗て、彼は、エルサレムの附近に、土地を有してゐたが、これを賣却して、その代價を使徒等の脚下に捧げた。使徒等も彼を深く信賴して、彼の本名ヨゼフを改めて、バルナバ、即ち『豫言の子』或は『慰の子』と仇名した。原始教會に於ては、豫言者とは、未來の出來事を豫言するばかりでなく、なほ人々の『徳を立て、且、之を勧め、之を慰める』（コリント前書、一四ノ三）ことを任務とした。バルナバの裡に滿ちたまへる聖靈は、此の意味に於て、豫言、即ち聖言を解説する能力を彼

に賜うたのである。

彼の説教は、アンチオキアの教會に、更に多數の信者をこしらへた。(註二) しかし、彼は、自分一人では、到底教勢の發展に伴ひきれないことを見てとつた。或は、この時分から既に、割禮を有する信者等は、ギリシヤ人、シリア人等の異邦人が洗禮を受けて、數の上で自分等を壓倒することを感じ、教會が兩者を平等に待遇することに忿滿を覺えたかも知れない。とにかく、バルナバは、サウロを呼び迎へることに定めた。如何に貴重なる伴侶を、聖靈が彼の爲に準備し給へるかを、エルサレムで彼に逢つた時に、既に解してゐたからである。サウロも、彼と同じ靈示によつて、異邦人出身の求道者に、モイゼの律法のうちの無用にして、徒らに彼等の感情を害する事柄を悉く省略してゐた。

バルナバは、サウロが、タルソに於て『空しく走らざらんが爲に』(ガラチャ書、二ノ二) 徐ろに時機の熟するを待ちつゝ、祈禱に従事してゐる事を知つてゐた。神の聖旨に従つて曠野に退き隠れてゐると、告げた人があつたのだ。バルナバは、自ら彼を探しにタルソに出發した。(註三) アンチオキアからタルソまでは、三日の道程にすぎない。バルナバは苦心してサウロを發見し、遂にその出蘆を促し得た。宣教は、パウロの宿望であつたのである『福音を宣傳へざらんは我にとりて禍なり。』(コリント前書、九ノ一六)

パウロが幻覺者、或はわがまゝものであつたならば、福音を自己ひとりのもとの考へ、神の御前に正しければよいと思つて、己が心のまゝにこれを宣べたであらう。實際パウロは、彼の傳道によつて生れた教會を、ひそかにわが教會なりと信じてゐたかも知れない。しかしながら、彼は、衆人之をパウロの教會と呼ぶことを、決して肯じなかつた。

此のキリストに於ける一致に關する配慮は、他の何人にも勝つて、パウロに於いて、特に感すべきである。何故ならば、彼は、最後に使徒の列に加つたけれども、天賦の才能は他のいづれの使徒よりも多かつたから。さうして、生來の熾烈な獨創力によつて、獨立不羈の行動をとるべき人であつたからである。すべての使徒等が、よく自己を棄て、一致を保つていつた事は、彼等の眞率を示す最も有力な證據でもあり、且、彼等の勝利の條件でもあつたのである。

アンチオキアにても、パウロは別途の方法をとらずに、その後輩として、快くバルナバを補佐した。兩人は、一年間と云ふものは、此の市で布教して、弟子等を作つた。が、従順ではあるが、變りやすく、歡樂に溺れ、金錢の慾にまどひ易いシリア人を、十字架の規律の下に忍耐させることの方が、布教それ自身よりも、もつと困難な仕事に相違なかつた。

神々の殿堂から程遠かぬシンゴン街で、唯一の主のことを説教するパウロの言を聴きに、ローマ人も

来たであらうか。彼の聴衆の中には、覺醒した異教徒もあつたらう。しかし、また、所謂『神を畏るゝもの』即ち一步は會堂の中に踏み込んで、未だ全く信者になりきつてゐない異邦人も多くあつた。彼等の心は、眞の安定を得てゐず、社會的にも虚偽の地位で、要するに、中途半端であつたのだ。しかるに、今や、信仰の門扉は、是等逡巡する人々の眼前に開かれた。彼等はキリスト教徒の團體の中に、確實なる信仰の隱家と、眞の兄弟的愛とを發見したのである。

アンチオキアに於るパウロの活動に關して、吾人は不幸にして何等の個人的記録を有してゐない。しかしながら、その勞役の歡喜は絶大なるものであつたらう。救靈の時機は、今や到來した。教會は會堂を否定しないが、しかし、もう會堂の内部より外に出てしまつた。ナザレト人の弟子等は、キリスト教徒と呼ばれるやうになつた。この名稱は、意味の上からはヘブライ的、形の上からはギリシヤ、或は、ラテン的であつて、汎世界的の希望を宿し、西歐及び東歐に、ヤヴーの光榮の御名の印象を印した。

不可思議なる對照よ。ユデア國民が滅亡の途を辿る間に、ダヴィドの御子の王國は、異邦人のうちに建てられた。世界を征服するメシアの理想は、こゝに、最も現實的の實際とならうとしてゐる。パウロは、此の不可思議な事實に注意したであらうか。恐らくは、イスラエル人の國民的將來如何にと云ふが如き問題は、あまり彼の念頭に浮ばなかつたであらう。神祕家なる彼は、彼等の永遠の運命をのみ思ひ

煩つたのである。

さうは云ふものゝ、彼も諸教會の必要に、無關心ではなかつた。

アガボと云ふ一個の豫言者が、この頃、エルサレムからアンチキアに來た。彼は『全世界』に及ぶべき大飢饉を豫言した。これよりさき、エルサレムの教會は窮乏の状態にあつた。即ち、信徒の數が増加するにつれて、その収入と支出との割合は、益々悪化するばかりで、紀元四四年に、此の飢饉の襲來した節には、物價の昂騰の爲に、小麦、油、無花果等の日用の必需品を、信徒にどうして分配してよいかその方策を知らなかつた。しかし、幸にも、アンチオキアの信徒等は、さほどの窮境に陥らなかつたので、彼等は寄附金の募集を思ひ立つた。此の金員をエルサレムに届けることは、パウロとバルナバとに依頼された。多分、寄附金募集を發起したのも、此の兩人であつたであらう。これは、キリストの愛の律の實行でもあつたが、またデアスポラのユデア人が、神殿の寶庫に、『使徒』と名付ける特使に托しておさめる恒例の獻物の傳統に従ふことでもあつたのである。

パウロは第一回のエルサレム行の折に、神殿に於て異象を見た。イエズスは、彼に『往け、汝を遠く異邦人に遣はすべし』と明に宣うた。此の度も、彼は、もつと記念すべき脱塊に陥つた。それは、彼が、後年、コリント人に物語る、その出來事である。(註四)

『我は、キリストに在る一人の人を知れり。彼は、十四年前——肉體に在りてか、肉體の外に在りてか、其は我が知る所に非ず、神ぞ知しめす——第三天まで上げられしなり。我は又知れり、此の人は——肉體に在りてか、肉體の外に在りてか、其は我が知る所に非ず、神ぞ知しめす——樂土に取擧げられて、得も云はず、人の語るべからざる言葉を聞きしなり。』

如何にも神祕に滿つる此の脱魂は、——それを記載する一言一句は、神の祕密を宿してゐる——使徒の内的歴史の上に、極めて重大な事件であつた。

第三天まで擧げられるとは、モイゼが主に『汝の面を我に示し給へ』と祈つて〔田エチプト記三三ノ一三〕之を見奉つた時の如く、又、光榮の輝きの中に、諸天使、諸聖人が之を仰ぎ奉るが如く、神の本體を見ることである。(註五) ユデア人が不潔なりとした動物を載せた布が、天より下るを、ペトロが見たのは、單に、地上に於ける新しい靈示を享けたと云ふにすぎない。パウロの脱魂は、之に反して、復活し給ひしキリストが、天父の御右に、至福なる彼を携へ給うたとの義である。彼自身も、奇蹟によつて、彼の全身が取擧げられたか、或は、單に、精神のみ、其處に到つたか覺えなく、且、その聞いた言、或は、直感の閃きを通じて見た事柄を云ひ現はすことは出来ないのである。(註五)

しかしながら、此の脱魂は、彼にとつて最も貴重な確證であつた。全能者は、彼の指導者である。彼

の前には、人目に見えぬ火の柱が進む。これにさへ隨へば、迷ふことも、倒れる畏もない。

それと同時期に、即ちパウロのエルサレム行のやゝ後に、諸教會の信仰を強めた、他の不思議な奇蹟があつた。その次第は次の如くであつた。キリスト教の發展を妬むユデア人に阿る爲に、ヘロデ・アグリッパ王は、ヨハネの兄弟ヤコボの首を刎ねた。ペトロも捉へられて牢獄に繋がれたが、過越祭の爲に、衆議所への出頭命令が延期されてゐた。然るに、一夜、天使が現はれて、その鐵鎖をどき、眠れる兵士の間を導いて、彼を牢獄の外に出した。ペトロは、かくて、エルサレムを逃れ『他所』に行つた。使徒行録の記者は、故意に行先を明記しない。(註七)

とにかく、天使が消失させた時、ペトロは、人通りの斷えた淋しい街上に、たゞ一人で立つてゐたが、漸く人心地のつくにつれて、數歩の前に、ヨハネ・マルコ(註八)の母で、バルナバの叔母に當るマリヤの家を認めた。信者等は此處に集つて、彼等の主領の救濟を祈つてゐたのである。彼等が、不意に、恙なきペトロの姿を見た時の、驚愕と歡喜とは、譬へ方もなかつた。キリストが後來の大計劃の爲に保護し給ふ時には、その選ばれた者は、何等、人間の迫害を恐るゝ必要がない。

數月の後に、ヘロデ・アグリッパ王は、カイザリア市に於て、異教的祭典の間に、急病にかゝつて、悶死した。驕慢なる迫害者の最後は、聖徒等の希望に、更に、新しい徴を加へた。

パウロは、かくの如き事件の符合に、自分の考へてゐた計劃に對する、成功の保證を認めたのであつた。もちろん、其處に、あまたの困難、危険のある事は知つてゐた。しかし、それはもとより我が期する所である。キリスト・イエズスの光榮を得たまひしは、御受難の後であつたではないか。如何ぞ弟子等が、師の上にある事を得よう。キリストは、其の靈體なる教會を、苦惱の中に於て、御身と一致せしめんと欲し給へば、キリストの御受難に缺けたる所を補ふは、弟子等の任である。しかしながら、パウロは將來の艱苦を豫想して、徒らに心を傷むる事をしなかつた。それよりも、むしろ豊なる靈的收穫の前途を思ひ、己が族祖に對するヤコボの豫言を、精神的に解して、之を自分に當て嵌めたであらう。曰く、『ベニヤミンは物を嚙む狼なり、朝にその獲物を啖ひ、夕にその攫物をわかたん』〔創世紀、四九ノ二七〕と。

彼は、バルナバと共に、エルサレムより歸還するに際して、バルナバの從弟、ヨハネ・マルコ、即ち、後日、兩人の間に、一時的の反目を來す機會を作るべき人を同伴した。

パウロが、主の御名を知らぬ國々へ、これを宣べ傳へん爲に、大旅行を試みたいとの宿願を有したことにについては、疑がない。しかし、教會の——彼自身のやうに、やはり聖靈の御導きを從順にまつてゐた教會の——認可、或は命令を俟たずして、單身、その途につくことは、彼が敢てせざる所であつた。

若い教會は、其の後と雖も、嘗て失つたことのない神の能力、愛の一致を有してゐた。あらゆる重大事は、悉く、長老等が——及び信者等も——共に祈り、聖祭を獻げ、慎重に熟議を重ねた上で、始めて決せられるのであつた。

教會の指導者は、或は豫言者、或は教師として、各別の任務を使徒より、授けられてゐた。豫言者の任務は、神の靈示を受けて、未來の出來事を豫言し、ことに宗教上の眞理、及び信徒等の指導方針を教へるにあつた。教師とは、特別の靈示なくして教へる人々であつた。同一人が、時として豫言者となり、時としては教師となつて教へることもあつた。神の靈が、絶えず常に彼等の靈魂に語り給ふと云ふ譯にはゆかないからである。

エルサレム教會が、迫害の大打撃を受けてからは、アンチオキア教會が、當時のキリスト教團の頭となつた。この教會の豫言者、及び、教師は、全東洋諸國を代表してゐたと云つてもよい。バルナバはクプロ島人、サウロはシリシヤ人、黒人と呼ばれるシメオンはエチオピア人、シレネのルシオはアフリカのヌミヂヤ人、ヘロデ・アンチパスの乳兄弟だつたと云ふマナヘンは、パレスチナの出身であつた。さうして、此のマナヘンを除く他は、所謂ヘレニストのユデア人で、各自生國に傳道の便宜となる種々の關係を有してゐた。此のやうな次第であつたので、彼等は、いづれも、燃ゆるが如き布教的精神を有して、

サウロの計劃を、各人の希望の相一致する所として双手を舉げて賛成した。

しかしながら、彼とバルナバとは、實行の途に上る爲に、靈の與へ給ふ徴を待つてゐた。それで、教會の頭立つた人々は、今日の言語で云へば、祈禱會とでも云ふべき會合を催して、一緒に斷食及び祈禱をなし、相集りて聖きパンを割いた。この祭式の終に、神の聖旨は『汝等バルナバとサウロとを、我爲に分ちて、我が彼等に任じたる業に従事せしめよ』〔使徒行録、一三ノ二〕との御言によつて、人々に傳へられた。

もとより、二人は、世の始期より神によりて分たれ、最も優れたる宣教師として、此の使命の爲に豫定せられてゐた。たゞ使徒としての權力を彼等に頒つ聖別式が必要であつたのみである。即ち、兄弟等は、全會衆の前で、兩人の上に按手した。それは、今日、司祭の叙品式に於て、臨席の司祭等が、新たに叙品さるべき人の頭の上に手をかざすと同一である。

此の任命式によつて、權力を受けることを、パウロは、すこしも、己が福音の恥辱と思はなかつた。

『主は一、洗禮は一』〔エフェソ書四ノ五〕。兄弟等は、彼の如く、キリストに於て生きる者である。カリスマ(異能)は、靈の直接の賜なることもあるし、又、兄弟の手より傳へられることもある。彼にとつて、たゞ一事の希望は、教會の意志、即ち、神の聖旨に従つて、キリストが全世界に宣べられる事であつたのである。

未知の世界を前に、踴躍してその途に上る探險者の心持も、パウロがバルナバと、ヨハネ・マルコと共に、セリュシア港への道を踏み出した時の歡喜に比すべくはないであらう。進むにつれて、道路の兩側の山脈が遠ざかつていつて、その先方に海が開ける。彼は、格別に海を愛する人でない。彼は此の後屢々海路を選んだが、しかし、彼の文章には、海に關する何等の比喻も見出されない。これは、海に對するユデア人の傳統的憎惡に出づるのだらうか。或は、彼の動物や、植物や、水や、天空や、その他あらゆる物質界に關する、一般的の無關心の結果であつたらうか。私は、其處に何等の據所もないに拘らず、パウロが、世界の際涯までも福音を傳へる大道として海を愛したに相違ないと信じたい。

豫言者は、永遠の都エルサレムにむかひて、『もろくの島は、われをまち望む、汝の子等を遠くより載せ來らん爲に』と歌つた。〔イザヤ、六〇ノ九〕

パウロが、クプロ島に向つて出帆した其の日は、實に、島々は彼をまち望み、すべての異邦人は己が救靈の豫感の爲に、心中に雀躍したのである。帆かけにうづくまる三人の貧しい旅人は、帶に財布を持たず、背に袋を負はず、手に杖を持つてゐなかつたかも知れない。しかしながら、彼等は主に義しき民を待ち得て、而して、また歸つて來よう。人類社會の未來の爲に、これより重大なる事件は未だ嘗て起

らなかつたのだ。

(註一) カストル及びポルクスの二神。

(註二) 使徒行録に、單に『夥しき群衆主に屬けり』一一ノ二四とあるのみで、確實な數字が擧げてないのが残念である。

(註三) ルナンはパウロの隠退、及びバルナバの行動を、根據も理解も全くなく、下の如く説明してゐる。曰く『パウロは、彼の如き活動家にとつては、刑罰にも等しい無聊の裡に居た。……彼は我と我身を蝕んで殆ど無益の人なるかの如く感じてゐた。バルナバは、此の非健康的、且危険なる孤獨の裡に、消耗せんとする能力を、その眞個の使命の爲に用ゐることを得たのである。……感受性に富んだ、他人を避ける傾のある、此の偉大なる靈魂を贏ち得て、加之、熱情的ではあるが、同時に非常に狷介な其の人の弱點と氣分との下に自己を屈した……これがバルナバがパウロの爲にしたことであつた。パウロの光榮の大部分は、萬事について、彼の前驅者でありながら、彼の陰に自己を晦し、又すべてを放棄せんと彼の誘惑、並に彼をして將に反逆者たらしめんとした他の人々の偏狭な言論を、一再ならず止めることが出來た謙虛なるバルナバに歸すべきである』(使徒)と。

(註四) コリント後書、一一ノ二、此の書簡はエフェソに於て書かれ紀元五六年、或は五七年の著で、即ち彼の第二回エルサレム行より十四年を経てゐるのである。

(註五) 聖トマ・アキナス、『聖パウロの書簡註』

(註六) 聴くと見るとは畢竟同一事に歸する。

(註七) 一二ノ一七、ペトロはアンチオキアに逃れたとも云ひ、イタリーに向つて舟出したとも云ふ。

(註八) 後來の福音史家。

七、クプロ島、パウロとローマ帝國と

パウロとバルナバとが、クプロ島に向つたのは、ローマンチックな冒険者の亞流を追うて、身を偶然に托ねたのではない。彼等は、實際的のユデア人として、自己の能力と成功の機會とをはかつて、かうしたので。即ち、常識と、神の靈示とが相一致したのである。

バルナバは此の島に生れて、布教に好都合なる種々の事情に通曉してゐた。東海岸の町々には盛大な會堂があつた。エジプトが程近い事、山から銅が出る事、森林には豊富な木材があつて、造船業に好都合なる事、平野にはペディオウス河の水をひいた溝渠が縦横に通じて、小麥を豊に産する事、丘陵には橄欖樹と葡萄とが栽培されてゐる事等は、ユデア人の利得になる、殷賑な商賣が行はれる原因となつた。なほ、パフォスには、アフロディテ女神の神殿があつて、多數の參詣者が金錢を落していつた。ギリシヤ人もまた利潤のある土地をねらつて、盛に國外に發展して、財産を造つた。ローマは是等の東邦諸國民に、兵役と行政とを定めてゐた。さうして、一方には、城砦、水道、圓形劇場等を建て、他方には、工業上の諸原料、食糧、租税、軍隊を徴發した。

このやうな次第で、此の島に於て、兩使徒は、福音に征服せんと冀つた、イスラエルと異邦人との二勢力に對することが出来たのである。しかしながら、彼等がまづ最初に救靈の手をのべたのは、他處に於けると同じく、こゝでも、イスラエルにむかつてであつた。

一行はサラミスに上陸するや——これはギリシヤの植民によつて開かれた一大商港である——まづ會堂の中でイエズスを宣べ始めた。彼等は、暫くの間、此の町で布教してゐたらしい。格別に反對も起らなかつたやうである。しかし、兩人が此の際、此處に教會を建てたと云ふ事は出来ぬ。何故ならば、未だ準備の時代であつて、一群の改宗者を得るわけにはゆかなかつただらうから。

彼等は、それから海岸づたひに、シテイウム、アマトント、パフォスの諸都市を巡歴した。パフォスは今日なほ、過去の享樂的都會の名残りを留め、女神の薔薇花は、いまだに咲き匂つてゐる。アフロディテの生れた海だと云ふ此の海岸に、並んでゐる白い人家は、眠つた鴿のやうに見える。女神の神殿の廢墟も、海から半里ほど隔つた丘の上にある。その神體は、人の形狀のない、缺けた石柱が、紫の絹布につままれてあるもので、大自然の生殖力の幼稚な象徴であつた。さうしてイダリウムの森の中では、戀の女神、アフロディテは宗教的姦淫を以つて祭られてゐた。

パウロは常に偶像教的禮拜と姦淫とを聯想する。「ローマ書、一ノ二一—二六」アンチオキア、コリント、

エフェゾ、ローマ、その他、一般異邦人の頹敗した風俗が、生粹のユデア人たる彼に、此の聯想を産んだのも無理はない。さうして、姦淫をする事が神々の光榮である時まで考へてゐた偶像教徒に、貞徳を守らせるには如何なる超人的努力が必要であるかと云ふ事を、彼は、何處よりも、パフォスに於て痛感したことであらう。

ユウゼビウスの所説にも拘らず、(註一)パウロは、終生童貞を守り、決して結婚しなかつた。しかし彼も『彼の五體に外の法ありて、彼の精神の法に敵對し、彼を虜にして五體に在る法に従はしむる』を感じてゐた。「ローマ書七ノ二三」それ故、彼は、後年、東邦諸國に流行した、禁慾派諸異端が主張するが如き、極端な禁慾説を吐かなかつた。ローマ人も、アジアの風俗を眞似て、或種の背徳を、遂に一種の徳行とまで考へるやうになつたが、彼はかゝる行爲を衷心より唾棄する。ユデア人は、男色者に死刑を課し、同棲した姑と婿とを石で打ち殺した。「衆議所篇第七章」パウロの言の中にも、かくの如き感情が窺はれる。

しかし、彼は、たゞ理路整然たる論法を以つて、人は、己が肉を神とする時、反つて之を汚し、聖靈の神殿となし給ふ肉身を辱むるに至ることを、示すを以つて足れりとする。「コリント前書、六ノ一九」彼は童貞生活を結婚よりも貴いと云ふ。「同上、七ノ一」が、同時に、イエズスを除いて、パウロの如く、

婚姻の神聖を力説したものは嘗てない。「エフェゾ書、五ノ二二、二三」且、彼は、コリントの若い寡婦等に『婚姻するは胸の燃ゆるに優れり』と教へた。「コリント前書、七ノ九」

彼の教説の聰明さは、極端に走らず、福音的原理と、經驗より生れる眞理とによつて、常に之を抑制したことで窺はれる。

彼は孱弱い人性に、神の律の許し給ふ所を寛容したが、決して罪惡の靈と妥協しなかつた。恰度、パフォスに於て起つた事件が、僞豫言者に對する彼の憤怒の激しさを示すものである。

此の町に、エリマ(賢者)と稱せられるバリエズと云ふユデアの魔術者があつた。彼はその奇術を以つて、好奇心の強い地方總督セルジオ・パウロにとり入つてゐた。

占星術、魔術、降神術等は、律法で嚴重に禁止されてゐたにも拘らず、ユデア人の間に、仲々勢力と信用とがあつた。タルムドの中にも「衆議所篇第七章」次のやうな記事がある。

『ラビ・ヨズエ・ベン・ハナニアの言「余は南瓜と甜瓜とをとりて、牡山羊、牡鹿となすことを得。彼等は更に仔を生むべし。」』

ラビ・ハナイの言「われ、セフォリスの街にて、或人の石を空中に投げ上ぐるを見たり。この石地上に落ち來りし時、化して仔牛となりき。』

彼等は、天性、占が上手であつたが、これは利益になる商賣であつた。其の頃の習慣として、王侯は自分達の宮殿に『カルデア人』或は『算數家』と稱する、數名の魔術師を養つて置いた。チベリウス帝は、ロード島に配流されてゐた時に、占星術の秘奥を學んだ。「タシトス『年紀』六ノ二〇ノ二一」クプロ島も、此の種の魔術者の巢窟であつた。かの有名な魔術者シモンも、此の島の生れだ相で、幻術奇術を巧に行つた。

アプレイウスの『金驢篇』を讀めば、ローマ帝國の末期に魔術なるものが、如何に廣く、弊害を流してゐたかゞわかる。魔術者は、呪文や秘薬によつて、人間を禽獸に化し、又は、それを原形に復する能力を有すると誇稱し、媚薬を調合し、呪咀を修め、毒薬を賣り、世人の恥づべき情慾或は復讐心に乘じてゐた。

アジアに生れた以上の秘法は、ローマでも非常に流行し、遂に魔術者も、魔術を乞ふ者も、並に死刑に處すとの敕令が發布されるまでになつた。「『年紀』一二ノ五九」其のくせ、皇帝等がその歸依者であつたのである。

エリマはパウロとバルナバとの行ふ奇蹟の評判を耳にして、兩人の説を聽聞しようとした。兩人の秘法を盗むと共に、他方にそれにも勝る奇術を示して、兩人の鼻を明かさうと思つたのであらう。或は、

彼も、魔術者シモンのやうに、宇宙と神との關係について、ピタゴラスとプラトンとをつき混ぜた曖昧なグノーシス説を抱き、肉慾的享樂主義を奉じてゐたのかも知れない。

パウロとバルナバとは、直に彼の眞意を看破した。かゝる人は偶像教徒よりも危険である。何故ならば、超自然的智識と、不思議な精神力とを有するかのやうに見せかけて、人々を欺く輩であるからである。

とかくする中に、總督も、新説を宣傳する二宣教師の噂を聽くやうになつた。彼は兩人を引見して、その純眞なる信仰に感動した。しかし、エリマは、セルジオ・パウロに對する信用の失墜を恐れて、兩人を中傷して彼等の影響を阻止しようとなつた。

使徒等はこの由を聞いた。パウロは法敵を折伏する決心をした。一日、エリマに出逢つたとき、彼は聖靈に充たされ、火焰のやうな眼を彼の面上に注いで、勵聲叱咤した。

『あゝ、あらゆる狡猾と偽計とに充てる者よ、惡魔の子よ、一切の義の敵よ、汝、主の直なる道を曲げて止まず、今看よ、主の御手汝の上であり、汝替者となりて、時至るまで日を見ざるべし』と。「使徒行録、一三ノ一〇、一一」

忽ち、朦朧、次に、暗黒が、エリマの眼を鎖した。魔術者は、手探りして、同伴者をさがした。

此の驚くべき光景は、使徒行録の記者によつて、原始的の單純さを以つて語られて、何等の註釋も、判斷も加へられてゐないが、しかし、其處には殆ど獨自的の深い意味がある。

これは、パウロの生涯に、悪人を罰する爲に、奇蹟力を發揮した、唯一の例だが、しかし、その目的は、畢竟人々の救靈であつた。(註二) 生者と死者との主なるキリストと完全に一致せる彼は、また、キリストの全能を頌つ。彼は一瞬間も躊躇しない。彼が、それをキリストの光榮の爲に欲する以上は、必ず其の事のなるべきを知る。彼は、エリマに、盲目を豫告する。エリマは直に替者となつた。パウロの行爲は、彼の有した奇蹟力の源なる、その信仰の絶對性を證するのである。しかし、此處に奇異なのは、彼が自分が主より受けたと同一の罰(盲目)をエリマに與へたことである。エリマもユデア人であつた。サウロの腫孔より取除かれたその被覆を、パウロは、イスラエルが、此の刑罰を曉り、主の御前に謙らんとことを冀ひつゝ、彼に與へたのだ。エリマは、『時至るまで』替者である。時とは、彼が慾心を去つて、魔術を棄てるまでである。エリマの改心の可能性は、世の終りに於るユデア民族の改心の前表であつた。しかし、それはともかく、パウロの勝利の結果として、いま、ローマの地方總督の改心が事實となつて現はれた。

セルジオ・パウロは、『其の成りし事を見て主の教を感嘆し、信仰せり。』

神々、及びセザルの祭典に、公式にあづからねばならぬ身分であつた此の官吏に、改宗する可能性がないと、主張した學者がある。使徒行録には、單に、彼が信仰したとあるだけで、キリスト教徒になつたとも、直に洗禮の水を受けたとも書いてない。此の點は不明である。

しかしながら、彼の改宗は不可能でない。クプロ島に彼が居たことは、既に確證がある。(註三)すでに眞理の豫感を抱いてゐた。好奇心に富む此の人の精神は、目撃したパウロの奇蹟によつて完全に征服せられたのである。彼はユデアの魔術者よりも、キリスト教の『魔者』の優れたるを悟つた。ローマ人は能力の證明に感ずるものである。次で、使徒の教を聽いて之に心酔し、聖靈は信仰の賜を與へ給うた。

いま茲に『弟子』となつた此の著明な異教徒は、此の地方に於るローマ主權の代表者で、東桿と鉞との飾を先立たせて行く身分の人であつた。布教の洋々たる前途を示すよい幸先である。パウロよりも以前に、すでに使徒等は、世界の主長なるローマを、キリストに征服することを考へてゐたに違ひない。ペトロは、何時であつたか不明であるが、此の世界の首都に、自分の活動の中心を置いた。しかしながら、彼が百夫長コルネリオ、及び、一家の人々に洗禮を施した際には(使徒行録一〇ノ三四、三五)彼はこれを偏り給はずして、異邦人にもまた永遠の生命を與へ給ふ、神の攝理のなし給ふ所と解しただけであ

つた。

ローマ公民たるパウロは、更に、ローマが世界交通路の中心であつて、ローマにある黄金色の里程元標は、あらゆる道路の出発点でもあり、到着点である、さうして此の道路を利用して、始めて福音の教は、人間の棲まんかぎり世界の涯まで馳するを得ることを見てとつた。彼がローマ人に贈つた書簡は、他の書簡に比して、著しく廣い範圍の人々に宛てられてゐる。又、後年、彼がローマに囚人となつた時に書いたフィリッピ人に贈る書簡には

『我が^{なほ}裸に遇へる事のキリストの爲なるは、近衛兵の全營にも、何處にも明に知られたり』〔一ノ二三〕と云ひ、且、この書簡の結末を『凡ての聖徒、殊にセザルの家に屬する人々、汝等に宜しくと云へり』〔四ノ二三〕と喜ばしさに結んでゐる。

パウロとセネカとの間に、書簡の往復があつたと云ふ傳説は、明白に小説であるけれども、確にその可能性はあつたので、キリスト信者は、賢明の聞き高き學者、或は、勢力ある人々を目かけて傳道する機會を逃さなかつたのである。信者等は、貧しく賤しい人々を招くと共に、智識階級、上流社會をも忘れなかつた。これはユデア教徒の前例にならつて、たゞ、その方法を更へただけであつた。

ローマにはユデア人は多數居た。彼等は陰謀家で、且、巧に皇帝に取り入り、宮中に於る隱然たる一勢

力であつた。クラウヂオ帝が一時彼等を追放した事がある。しかし、最近に發見された一篇のパピールスによつて、帝がルクルス庭園に於て、廿五名の元老議員、十六名の執政官、妃アグリピナ及び女官等の面前で、アレキサンドリアのユデア人迫害の主謀者、イシドーロス及びランポンの二名のギリシヤ人を死刑に處した由が知れる。このやうな、ユデア人の勢力の恢復の事實は、宮中に於る彼等の怪手腕を想像せしめるに足るのである。

ユデア人の中には、醫者が多く、彼等は、これによつて、貴族富豪階級の家庭に近づく便宜を得た。ユデア婦人等は容姿と術策とを協せ用ひた。ローマ人で、ユデア教に歸依したポツペアは、しばらく皇帝ネロの寵姫であつた。

キリスト教徒が君側に寵を得たのは、忠信、溫良、其の他、質實剛健の諸徳の爲であつた。僞經パウロ行録によれば、ネロの寵を受けた侍臣の中には『巨足のバルサバス・ユストウス、カバドキア人ウリオン、ガラチア人フェストウス』等のキリスト教徒が居た相である。なほ、同書には、パウロがネロの面前でキリストの王權を主張したとの物語がある。恐らくは、ある實話が傳説化して是等の物語となつたのであらう。

パウロは、ネロを改心せしめ得ると考へたであらうか。キリスト教が、古代異教の神々とその祭司、

暴逆倨傲なるローマ皇帝、哲學者、魔術者、娼婦等を拜跪せしめ得るまでには、幾代かの殉教者、護教家、聖婦人を要し、三百年の歲月の間に、根氣強く、ローマ帝國のあらゆる組織に侵入しなければならなかつたのである。しかしながら、使徒が善良なるセルジオ・パウロに邂逅したとき、はやくも『ローマは我等のもの、キリストのものなり。世界は彼に屬す』と豫言者的に考へたかも知れない。

紀元五八年、即ち、パウロが囚人となつて、ローマに護送された年、偶々カピトル丘下、コミチウムの廣場にあつたルミナの無花果樹 *Ficus Ruminalis* が枯死した。これは樹齡八百三十年を算する老樹で、ロームス及びロムルスがその下に育てられたとの傳説が附隨した樹である。さうして、その枯死した枝から、また若芽が萌え出した。ローマ人はこれを奇蹟と考へた。ローマが、永遠のキリスト教の奇蹟に生れ出づる爲には、まづ一度死なねばならないのだと云ふ事をさとり得ずして。

(註一) 彼はコリント前書九ノ五『我も他の使徒等、主の兄弟等、及びケファの如く、姉妹なる婦を携ふ權なきか』の句を誤解してゐるのである。(聖會歴史、一ノ三ノ三〇)

『姉妹なる婦』とは、妻の事であるか、或は單に、婦人の協力者の事であるかの問題はさて措き、此の句は、明白に、パウロが婦人を同伴しなかつたことを意味してゐる。

(註二) コリント教會の中で重大な蹟となつた事件—即ち、或人が己が父の妻(繼母)と同棲した事件—を知つた

時にも、彼は、此の人に對して、肉身の罰を含む破門の宣告をする。

『斯る輩をサタンに付す。是肉體は亡ぶるも、精神は我主イエズス・キリストの日に於て救はれん爲なり。』(コリント前書、五五)しかし、この威嚇が實現されたか否かは不明である。

(註三) 彼の名を記した一の銘が発見された。

八 信仰の門

アダリア——古のアッタリア——は聖パウロの時代には、パンフィリアと稱ばれた地方の小アジア海岸にある一小港である。

私は、九月のある朝、此處に寄港した時のことを想出す。私は、以前に、此の地を夢の中でみたやうな気がした。小さな灣の奥に一團の人家がある。灰色の巖礁は帶青色にぼけ、丘陵の上には、古い塔があつて、城壁の銃眼が處々崩れ落ちてゐる。一本の白揚樹の傍に、回教寺院の塔が見える。帶黄色、血紅色の土の間には、菜種の圃の快活な黄色が入りまぢつてゐる。直射する太陽の光線に乾燥しきつた海岸線の中に、此の土地ばかりが、清新なオアシスであつた。町の背後には山が迫つてゐて、その頂は銀色に光つてゐた。

パウロ、バルナバ、及び、ヨハネ・マルコが、クプロ島を後にして、小アジアの奥ふかく入り込み、ペルゲン、それから、なほ山奥のピシチア州のアンチオキアに向ふ爲に、上陸したのは、此の地點か、さもなければ、それよりやゝ東方のチェストロス河々口のあたりであつた。

何故、彼等が、パフォスから直ちにエジプトに向つて出帆しなかつたかは、一寸、解釋しにくい事實である。極めて豊富な收獲を期待することが出来たアレキサンドリアは、パフォスと指呼の間にあつた。しかし、其處には、もはや他の宣教師が働いてゐた。後にアクイルラとブリシルラとが、エフェゾ市で邂逅した。アレキサンドリアのユデア人アポロは、其時既に教の初歩を知つてゐた。アポロが何處でそれを習つたかと問へば、勿論アレキサンドリアの會堂を中心にして出来上つたキリスト教徒からであつたに違ひない。然るに、パウロは自ら一の規則を作つて、出来うる限りそれを墨守した。それは、他人が働いた土地の上に建設するを避ける事である。彼は無智の異邦人に對する傳道を、自己の使命としてゐた。これは、一面、最も困難であるが、若し、成功すれば最も効果の多い仕事である。彼がエジプトを顧みなかつたのは、此の爲であつたらう。聖靈がこれを禁じ給うたのである。

パウロは、嘗て、タルソにゐた頃、タウルスの山路を里の方に下りて來るのを見た、メン（ルヌス）神を禮拜する山の住民の棲む地方へと進んでいつた。

彼の一行も、アンチオキアを出發した時より、同伴者が増してきた。同時に、クプロ島を巡廻してゐる間に、重要な變化が起つた。總督の改心の動機となつた奇蹟、パウロの強烈な人格、豊かな天分は、次第に彼を一行の頭領としたのである。さうして、これからは、パウロとバルナバとの一行が、パウロの

伴侶と呼ばれるやうになる。バルナバは指導者でなくして、同行者となる。ヨハネ・マルコは、パンフィリアに着いてから、不明の原因で、一行と袂を分つた。

パウロは彼の行動を快く思はなかつた。それは、第二回傳道旅行に際して、ヨハネ・マルコの同伴を拒んだのもわかる。バルナバは、このために、パウロに對して感情を害してしまつた。

青年ヨハネ・マルコは、山賊の横行する險阻な山道を超えて、奥地に行くのが恐かつたのだらうと、普通に解釋されてゐる。が、むしろ、それよりも、ヨハネ・マルコは、傳統的ユデア教的偏見に禍されて、パウロと異なる布教方針を主張したのではあるまいか。さうして、パウロが、すげなく、自説を着々實行したので、腹を立て、ひとりでエルサレムに歸つてしまつたのであらう。後に、彼も當時の舉動を悔悟して、第二回傳道旅行には、進んで一行に加りたいと志願したけれども、今度は、パウロがきかなかつた。パウロに云はせれば、ヨハネ・マルコは『共に働かざりし』〔使徒行録、一五ノ三八〕不従順な弟子であるから、一行に彼を加へることは不可能だつたのである。

パウロの此の態度は、屢々、歴史家に批難された。しかしながら、我等は、その真相を知悉しないことを忘れてはならぬ。彼が嚴格だつたのは、決して、無暗に權威をふりまはしたのではない。要するに主義の争であつたのである。さもなくば、彼は、きつと、直ぐに青年を赦したに相違ない。實際、彼は

後にマルコと和睦をした。彼がチモテオをローマに招く書簡の中に、『汝マルコを誘ひて共に來れ、其は彼は聖役の爲に我に益あればなり』〔チモテオ後書四ノ一一〕との一節がある。

パウロの此の言によつても解る通り、マルコは、後年に至るまでも『助手』〔使徒行録一三ノ五〕或は祕書役となつて、使徒の誰彼の傳道旅行に附隨した。彼は、實に、謙遜、聰明、善良なる書記として、ペトロに委托された福音を綴るに恥しからぬ人であつた。

此の事件に紙面を費すのも、パウロとバルナバとが、何故、パンフィリアに滞在しなかつたかと詮索をするのも、共に無益な業である。勿論、彼等が此處に布教することは不可能でなかつた。從來とてもキリストが、此の地に全然知られなかつた譯ではない。火焰の舌が天から降り、使徒の最初の説教があつた後に、改宗した人々の中に、エヂプト人と共にパンフィリア人〔使徒行録二ノ一〇〕即ち、些くとも、パンフィリアに居住するユデア人が居た。パンフィリアには、極めて雑多な人種と雑多な宗教とがあつた。海賊の後裔のシリシア人も、山賊の末孫のタウルス連山の住民もゐた。諸國の商人も、此處に入り込んでゐた。使徒等が、此の集團の中に、教會を建てるに必要な材料をうることは、勿論不可能でなかつた。しかし、恐らくは、既に他の人が此處に働いてゐたのであらう。殊にパウロは、前にも書いた通り、最も信仰に遠ざかつてゐる民族に傳道したい、との慾求に燃えてゐたのである。

彼の伴侶と彼とは——恐らくは隊商の一隊の背後に随ひ——急湍を渡り、險路をよちて、山奥に向つた。

今日でも、タウルス連山の道路は、非常に危険である。九折の細徑や絶壁を下り、兩岸の巨石殆ど相摩せんとする峽谷をわたり、槍のやうに尖鋭な山又山の涯なく重なる間を縫つてゆく。かゝる難所が、たとひローマの管理下にあつても、強盜追剝の巢窟だつたことは想像するに難くない。

しかし、パウロとバルナバとは、恙なく、此の險を越えて、二つの眞青い湖水の北にあるピシディアのアンチオキアについた。此處はギリシヤ風の市街で、ローマ帝國の殖民地だつた。ユデア人も多數居住して居た。

使徒等は、安息日の集會の時間に、會堂シナゴグにはひつた。さうして、部屋の奥の、壁の傍の腰掛に遠慮ぶかく坐を占めた。

會堂シナゴグの司は、まづ恒例の祈禱を誦した。次に世話人が讀師に律法と豫言の書卷とを手渡した。單調な鼻聲で、讀師がヘブレオ語の一節を讀むと、通辯は同じく單調な聲で、會衆の爲に、それを通俗語に翻譯した。その後、會堂シナゴグの司は二人の客人に——一人はレヴィ人他はガマリエルの弟子と知つたので——かう云ふ場合にする習慣しきたりの辭を用ゐて、今讀んだ聖書についての説教を求めた。

『兄弟たる人々よ、汝等人民の爲に勵となるべき話あらば語れ』と。(使徒行録、一三ノ一五)

パウロは起立して、聽衆の注意を喚起する爲に、大袈裟な手眞似をした。これがユデア人の慣用の方法であつたのである。(註一)物を云ふ前に既に聽衆の注意を集め得る講演家がある。さうして、身長たけの低い人は、得て高い人よりも、誇張した身振りをするものである。

記録に残る此の際のパウロの説教は、後人の想像で作り上げた雄辯よりも、遙に興味に富んでゐる。この梗概が、ユデア人を向に廻した彼の説教の模範モダンだつた。彼の調子は壯重だつた。或は稍々不自然の所があつたかも知れない。會堂シナゴグの低い天井が、横溢せんとする説教の語勢を押へ付けてしまつたかして、それで、此の説教には、彼の個性が充分に現はれなかつたやうにも思へる。

まづ、使徒は、聖なる選民の召命と、神が之を導き給ふ徴として、行ひ給ひし奇蹟とを語り、神がこれに約束の土地を給ひしこと、ダヴィドの如く『その心に適へる人』を王等として立て給ひしこと、此のダヴィド王の裔より、ヨハネが『其の履を解くにも足らず』と云つた救主イエズスを起し給ひしことを告げた。

『汝等にこそ、此の救靈の言は送られたるなれ。其は、エルサレムに住める人、及び、其の長等は、彼を認めず、安息日毎に捧讀する豫言者等の言をも知らず、彼を罪して豫言を全うせり。……されど神は

彼を復活せしめ給ひぬ。』

さうして、パウロは、常に引用される『汝の聖なる者に腐敗を見せ給ふことなかるべし』との詩篇の一句を説き聞かせた。(註二)

彼の論據は豫言と、復活したるイエズスを見た人々の證言とが、その全部で、パウロは、自分がイエズスの幻影を見たことを話す事を忘れたかのやうである。ダマスコ途上の出来事も、自分の改心の経路も、此處では語られない。彼は、單に、彼自身のものならざる教の使者として、聽衆に對した。彼の決論は、次の如くであつた。

『兄弟たる人々よ、イエズスに由りてこそ、汝等、罪の赦を告げられ、又、モイゼの律法の下に義とせらるゝを得ざりし、一切の罪に就きても、之を信する人は、皆、義とせらるゝなれ。』

パウロの説教は明に異端であつた。最初の中こそ會衆は沈黙してゐたが、其處には明に不快の空氣があつた。やがて、それが、眩きと變つた。パウロは、衆人の敵意を感じるや、『汝等の日に至りて、我一の業を爲さん、是、人、汝等に語るとも、汝等が信ぜざるべき程の業なり』(「ハバクク、一ノ五」と、神の審判をつける豫言者の三句をひいて、彼等を脅した。

會堂シナゴグの司は、慣例の祝福の祈禱を以つて集會を閉じた。さうして、二人の旅客に、次の安息日にも來

て、説教するやうに依頼した。明白に、彼等の教が、此の人の心情に、不安を播いたのである。

會堂シナゴグの外では、パウロとバルナバとは、或は街上に於て、或はユデア人の家に於て、或は又『神を畏るゝ異邦人』の家に於て説教を續けた。多數のユデア人と、なほ多數の異邦人とが、之に耳を傾けた。使徒等の熱誠は、遂に此の人々を動かして、洗禮を志願する者さへも現はれるやうになつた。

次の安息日には、『殆ど町を擧りて』——即ち、會堂シナゴグに充ち溢るゝばかりに——使徒等の説教を聞かうとする人々が集つた。夥しき異邦人と、彼等の熱心とは、ユデア人の嫉妬を招いた。ユデア人は、常に頑固で、傲慢で、猜疑心がつよい。そのユデア人の一部が、原始教會時代に、ギリシヤ人や野蠻人が、彼等と同格に取り扱はれた教團に、キリストの愛によつて加つたことは、眞に不思議と云はねばならぬ。

パウロか、バルナバかど、恩寵は、キリストの御血の功德によつて、ユデア人と異邦人との差別なく、あらゆる信する人々に頒たれるとの、神の憐憫の奥義を説明した。突然、説教を遮る、暴々あらくしい叫聲が起つた。ユデア人が、キリストの御名を冒瀆したのである。パウロとバルナバとは、此の時、決然として立つて冒瀆者に對して、次の言を云ひ放つた。

『神の御言は、まづ、汝等に語るべかりき。然るに、汝等、之を退けて、自ら永遠の生命を得るに足らずとせるを以つて、看よ、我等、轉じて異邦人に向はんとするなり。蓋、主、我等に命じて

われ汝を立て、異邦人の燈とし

地の極まで救とならしめん〔イザヤ、四九ノ六〕

と曰へり』と。

生命の福音を聴聞してゐた異邦人等は、イスラエルが之を拒みたるにより、今や、此の福音がまづ、彼等のものとなつたと知つて、歡喜に堪へなかつた。此の評判は、國の隅々までも鳴り響いて、茅屋に棲む樵夫も、野に潜む強盜さへも、神人來りまして、世界を救ひ給うた由を聞いた。

しかしながら、ユデア人は、心平ならず、町の有力者、會堂シナゴグに出入する貴婦人より（註三）ギリシヤの商人、ローマの法官、軍人に至るまでを煽動して、使徒等に對して迫害を起させ、アンチオキアの地方より兩人を追放した。

パウロとバルナバとは『總て汝等を承けず、汝等の言を聽かざる人に向ひては、其の家、又は町を出て、足の塵を拂へ』〔マテオ、一〇ノ一四〕との主の戒を思ひ起した。

それで、彼等も、アンチオキアのユデア人に向つて革履サンダルの塵を拂つた。これは、もはや、彼等とは何の關知する所がないと云ふ意味である。さうして、『野生の驢馬と、毛の粗い羊と』〔ストラボ、一ノ一二ノ六〕が草を食むリカオニアの荒涼たる曠野を横斷して、東南方に進んだ。

イコニオムに近づいた時に、パウロはダマスコの事を追想しただらう。此の町も、〔註四〕ダマスコのやうに、塔と重々しい城門とで圍まれて、焼けた禿山の麓にある。ダマスコのやうに、大街道の分岐點で、此の町によつてガラチヤ州とフリジア州とが、カパドキア、アルメニア、ポント、シリシヤ、シリヤの各州に通するのである。

しかし、イコニオムの過去の最大の光榮は、パウロとテクラとの邂逅に求める事が出来る。テクラは、使徒の弟子となつた、他の多くの比較的單純な女性の中での異彩である。神愛に酔つた此の不思議な處女は、原始キリスト教時代のアジアに於るフォリニヨのアンジェラであり、シエナのカタリナであり、聖女テレサである。彼女の傳記は、不幸にして、幾多の空想を交へた小説である。その著者は、（テルチリユアンによれば、アジアの一司祭である相だが）讀者の進徳をはかる心算で、夥しい奇蹟談を捏造して真相を沒了し、加之、禁慾派異端に感染してゐた爲に、童貞を信仰の缺くべからざる基礎として書いた。

しかしながら、聖テクラは、決して架空の人物ではない。オリゲネスも、聖ヨハネ・クリソストムスも、聖アウグスチヌスも、彼女を眞正の殉教者として、記載してゐる。第四世紀に、アクイタニアのシルヴァは、タルソに程遠からぬ、イサウリアのセリシアで彼女の墳墓をたづね、その公の行録を讀

んだ相である。(註五)

彼女の傳記の中には、事實と、象徴と、無意味な虚偽とが混合してゐる。パウロがオネシフォロの家に入つて、微笑すると、オネシフォロは云ふ。

『よくこそ、祝せられ給ふ神の下僕よ』と。パウロは應へる『願はくば、神の恩寵の、汝と汝の家とにあらんことを』と。かくして、一同拜跪し、ユウカリシアのパンをさき、禁慾と復活とに關する神の御名を聞いた。

此のオネシフォロは、パウロがチモテオに托して挨拶した同名の人と同一だらうか。「チモテオ後書、四ノ一九」此の物語によると、彼は、パウロがイコニオムに來た時、既にキリスト信者であつたとせねばならぬ。これは事實として信じにくい。しかし、此の應對は、キリスト教の黄金時代に於る、人々の單純、善良な心情を我等の前にひろげて見せてくれる。

オネシフォロの家で、入口の戸をひらいたまふ、パウロは説教する。テオクリアの娘、タミリスの許婚のテクラは、母の家の、最も近い部屋の窓際に坐つたまふで、見知らぬ異人の説教に日夜聴き入つた。彼女は『信仰の爲に凝結して』身じろぎだにしない。さうして、パウロの許に、多數の婦人や處女が訪ねてくるのを見て、彼女も、どうかして、彼に逢ひ度いと願ふ。彼女は未だ彼に近づいたことがないの

である。

彼女が、いつまでも窓際から動かないので、母は、心配して、タミリスを呼びにやつた。若人は、其の仔細を知らぬ。或は、今日こそテクラと婚姻することが出來ると、喜び勇んで訪ねて來る。彼は、テオクリアに聲をかける。『わがテクラは何處にぞ。われに逢はせたまへ。』テオクリアは答へる『タミリスよ、汝に告ぐべきことこそあれ。テクラは窓際に坐して、今に至るまで三日三夜の間、飲食をさへ斷ちて動くことなく、虚偽の言を教ふる彼の外國人とくにに魅惑せられたり。タミリスよ、彼の人はいコニオムの人々をまどはし、汝のテクラをもまた感たぶらかしぬ。處女等、青年等こそぞりて彼の許に集ひて『唯一の眞神を畏れ、童貞の生活せよ』との教を聞けり、彼の言は、窓際に巢をはる蜘蛛のごとく、わが娘もこれに捉へられたり。されど、彼女に近づきて、よび試みよ。』

タミリスは胸のときめきを覺えながら、戀人に近づく。が、恍惚とした彼女の狀に心中恐れをなした。『テクラよ、わが許婚の人よ、何故に動かさずや。何を思ひて我を忘るゝや。汝のタミリスをみよ。恥づる所あれ』と彼は云つた。

母もまた彼女に乞うた。『わが子よ、何故に坐せしまゝにて階下を見、我を忘れて、答せざるや』と。許婚を失つたタミリスと、愛兒を失つたテオクリアと、主人を失つた若い女奴隷とは相顧みていたく

嘆いた。その間にも、テクラは身じろぎだにしない。彼女の見聞きするのはパウロばかり、正に脱魂エクステイズの状態にあつた。

タミスは眼もくらむばかりの憤怒を感じた。彼は、パウロを、魔法遣ひとして知事に告訴する。パウロは、群衆にひきづられて出廷して、知事の面前で、十字架上のイエズスについて説教する。その後牢に投ぜられる。テクラは夜陰に乗じて牢獄に忍びより、腕輪を外づして門衛に賂ひ、首尾よく中に入る。看守には銀の鏡をやる。テクラはパウロの室に至り、その足下に跪いて、彼の口から神の憐憫の物語をきく。パウロも敢て恐れぬ。テクラは彼の鐵鎖を接吻しながら、己の心中に堅固な信仰の生れるのを感じる。

テオクリアとタミスとは、テクラを探しに来て、此の有様を発見し、連れ戻さうとするが、テクラはパウロの教を聞いたその場所に、地上に泣きふしてしまふ。群衆は、『魔法遣ひを殺せ』とわめく。テクラは、恍惚として、キリストの御姿に見入つてゐる。母も怒に堪へかねて『此の不孝者を焼きたまへ。婚姻の讐なる此の者を劇場にて焼き殺したまへ、世の婦人等のみせしめに』と知事に向つて叫ぶ。

知事は、群衆をなだめる爲に、パウロを笞ち、イコニオムから追放し、テクラを火刑に處す。しかるに、奇蹟によつて彼女は焼けず、オネシフォロ、並に、一家の人々と、墓地にのがれてゐたパウロの許に不思議な力で運ばれて来る。

それからの物語は全くの小説で、それに、すこしく眞正の歴史が混つてゐるに過ぎない。

いかにも貧弱ではあるが、しかし、テクラの傳説は、貴重な材料を含んでゐる。其處には、後に聖パウロによつて、『十字架の愚』と呼ばれる一種の熱狂が漂うてゐる。テクラは、パウロ自身をみて、恍惚としたのではない。彼女は、彼の雄辯に魅せられたのではない。パウロの口唇から流れ出す眞理の言を——それまでは、知らずして、憧憬れてゐた——飲んだのである。さうして、忽ち、永福の御約束を、神より受けたのである。『道』は発見せられ、天は開かれた。神は認められ、彼女のものとなつた。

此の狂熱を、シベール女神の祭司等が、犠牲の鮮血にまみれつゝ昂奮し噪狂する、それと同一のアジア的迷信だと云つてしまつては、非常な錯誤である。テクラが、使徒の言に恍惚となつたのは、説教に酔うたのである。パウロは、テクラに、貞潔の美と復活とを啓示したのである。

異教徒の心情と理性とを虜にする爲には、彼等に、智的確定を示すと共に、愛の幸福、克己の歡喜、無限の福樂の希望を興へねばならぬ。

最初の入信時に於る、此の不思議な熱情を示すものとして、テクラの傳説に比すべき物語は、あまりない。

パウロとバルナバとの、イコニウム滞在に關して、正史に記す所は、極めて漠然たるものである。兩人は、此の地にかなり長く滞在したらしい。徴と奇蹟とが彼等の教を保證したので、多數のユデア人、及び、ギリシヤ人が、これに歸依した。信ぜざるユデア人は、兄弟等に對して、住民の大部分を煽動した。それで、自然に二派が生じて、一方はユデア人を支持し、他方は新教會の味方となつた。かくて、遂に暴動が起つた。暴民は棍棒や石を手にして、使徒等の説教所を襲撃した。兩人は撃たれたり、石を投げられたりなどしたが、やつと其の場を逃れて、東南に五里程を隔てた、リカオニア州のリストラと云ふ小さな町に避難した。此處には、ユデア人もあまり居なかつた。殆ど、みな、土地の人ばかりの町に、福音を傳へることは、使徒等にとつて、大きな喜悅であつた。

實際、リストラでは、最初の中は、彼等の布教に何等の障碍もなかつたやうである。兩人は、附近の村落にまで、傳道の手を延ばして、農夫や牧人に洗禮を授けることが出來た。(これは他の町では出來なかつた事である。)

その中に、偶々パウロが、一の奇蹟を行つたことが——此の奇蹟は、使徒行録に詳細に記録してある、パウロの少數の奇蹟の一である——機會となつて騒動が起つた。と云ふのは、パウロが説教をしてゐると——町外れであつたらう——其處に、一人の生來の跛の乞食が地に坐つてゐた。乞食は、パウロの説

く、永福の教を熱心に聽いてゐた。或は、恰度、主イエズスの『替者は見え、跛者は歩み云々』の御言葉についての説教であつたかも知れぬ。「マテオ、一一ノ五、イザヤ、三五ノ五、六參照」突然パウロは乞食の方に、炯々たる豫言者的眸を向けて、強い聲で命令した。

『汝、眞直に立上れ』と。

ペトロも、嘗て、神殿で、跛者に向つて、『ナザレトのイエズス・キリストの御名によりて、立ちて歩め』と命じ、其の右の手をとつて起したことがある。「使徒行録三ノ一一〇」

パウロは、イエズスの御名を用ゐず、又、跛者に觸れなかつた。しかし、此の人は瞬間に痊えて躍上つて歩み出した。群集は、見知らぬ人が、此の不思議を行つたのを見て、狂喜した。

『神々は、人の姿にて、我等に降り給へり』と。

但、此の歡呼は、リカオニアの方言だつたので、パウロにも、バルナバにも、最初、其の意味が解らなかつた。此の地方ではギリシヤ語が通用したが、平生の相互の會話、ことに、かやうに昂奮した際の叫喚は、方言であつた。それはシリア語、又は、カパドキア語に類するものだつたらしい。ゼウスとヘルメスとが旅人となつて、ソイレモン、及びバウチス夫妻の家に宿り、此の二人に幸福と長壽とを與へたと云ふ傳説は、此の地方で有名だつた。それだから、すぐに、バルナバがゼウス、パウロがヘルメス

だと云ふことになつてしまつた。風采の堂々たるバルナバは、神々の父ゼウス、短軀、精悍にして、病者を奇蹟的に痊し、辯舌流るゝ如きパウロは、健康の神、雄辯の保護者なるヘルメスだと思はれたのも無理はない。

城門の傍に、即ち、騒擾が起つた場所の近くに、町の守護神ゼウスの神殿があつた。(註六) 早速その祭司に、注進が飛んで、奇蹟の行はれた事と、神々の來臨とが知らせられた。祭司も、此の幸福を大變に喜んで、すぐに犠牲の準備がととのへられた。花朵で飾られた白い牡牛、犠牲の司、笛を吹く樂人、麥粉と鹽とを携へた助祭等の、型通りの行列も美々しく揃つた。神々がおいでになれば、すぐにでも、祭は出来るのである。

使徒等は、騒擾が始まると、逸早く身を隠したが、祭典の準備のなつたことを告げに來た人があつて、それと知るや、二人は、聖なる憤怒に身を慄はせ、ユデアの習慣通り、悲痛のしるしに外套を引き裂いて、行列の先頭に躍出て呼はつた。

『人々よ、何ぞ之をなせるや。我等も汝等と同じく有情の人間にして、汝等に福音を宣べ、かの空しき物を離れ、汝等をして、天、地、海及び其の中に在りと有らゆる物を造り給ひし、活ける神に轉せしめんとするなり。神は、前代に於て、萬民が己々の道を歩むを措き給ひしも、自らを證明し給はざること

なく、天より恵を垂れ給ひて、雨をふらし、實の季節を興へ、食物と欣喜よろこびとを以つて、我等の心を満たしめ給ふなり』と。

かう云ふ間にも、使徒等は、直接、偶像教徒に話をしてゐることを忘れなかつた。それだから極めて解りやすい言で、唯一の眞神のことをつけて、イエズス・キリストのことは略したのである。しかし、いくら説明しても、リカオニア人は、二人が神々であると云つて承知しなかつた。が、遂に、それも無駄とわかると、馬鹿を見たときながら、ひどく落膽して散亂した。憐憫ふかい神々がおいでになつたかと信じたのに、奇妙な豫言者が告げた神は出現し給はなかつたのだ。どうして、それが信じられるものか。

ゼウスの祭司たちも、折角用意した祭典が無駄になつたことを悔んだ。そればかりでない。ゼウス大神が侮辱され、ひそかに喜んだ一儲も、ふいになつた。

かれこれしてゐる中に、福音を敵視する或ユデア人等が、商用で、ピンヂアのアンチオキアから、邊鄙なこのあたりにもやつて來た。彼等は、すぐに、パウロとバルナバとの二人、ことに最も活動家のパウロを攻撃しだした。二人が割禮、及び、其他の律法の規定に無頓着なのが、ユデア人の忿懣を感じる所なのだ。彼等は、此の二人は、磔刑にかけられた罪人を神だと偽つて、アンチオキアから追放された

大山師だと云ひ觸らした。使徒等に敵意を抱き出した、浮薄なりストラ人は、輕々しく其の言を信じた。恰度、パウロが一人でゐた所に一揆が押し寄せた。彼は忽ち暴徒に捉へられ、雨霰と降る礫の下に、遂に地に昏倒した。暴徒は、死んだものと信じて、彼を市街の外に引づり出して、野犬と鳥との餌食になるやうに、野曝にして棄てて置いた。しかし、遅れ馳せに馳せつけたパウロの弟子等が近づいてみると、彼は幸にも氣息をふきかへしてゐた。彼は起き上り、彼等に護られて、再び町にひきかへした。

翌日、全身に創痕を負うたまゝ、パウロはバルナバと共に此處を去つた。さうして、間もなくローマ帝國のガラチア州の境界になつてゐた要塞地についた。此處はデルベンと云つて、ストラポーによれば、イサウリア地方の山間の僻地で、タウルス連山の山賊等が時々掠奪に出て来る物騒な土地であつた。流石のユデア人も、此處までは使徒等を追及しなかつたらしく、二人は煩はされることもなく、平和の裏に、素朴な田舎人に福音を宣べることが出来た。後年、パウロの伴侶となつて、危険を冒してマケドニアに行つたガイヨは、デルベンの信者であつた。〔使徒行録二〇ノ四〕

デルベンからタウルス連山を超えれば、五六日の徒歩で、タルソに出ることが出来る。しかしながら彼等はそれをせず——パウロが提議をしたのか、バルナバがしたのか解らない。或は、出發前、シリアで豫定してあつた行動かも知れぬが——リストラ、イコニオム、ピシディアのアンチオキアと、辿つた道

を逆にひきかへした。

思へば、大膽不敵な話である。しかし、今度は、何處でも、外面的の迫害によつて妨げられずに、反つて、非常な効果を擧げた。

それは、さきに使徒等が出發した後で、各地方とも、信者になつた人達が、熱烈な小さな教團を作つて、それが人知れず成長しつゝゐたからである。信者等は、夕方、どこかの『高間』に集合してゐた。彼等の布教は、まだ、從來の宗教を妨げる程でなかつた。一般に、新しい革命運動が成長し得るのは、當局者の無關心の結果である。此の場合に於ても、無名の神を拜禮する人達の小教團が、將來どう發展するだらうかと云ふ事を、考へてみようとするとする人さへ、世間になかつたであらう。

パウロとバルナバとが、リストラ、イコニオム等に引返してきた時には、さきの騷擾から、いづれも數ヶ月以上を経てゐたので、過去のことを思出す人もなかつた。又、二人も此の度は會堂シナゴグやアゴラで公に説教をしなかつた。彼等は、新信者を集めて、或は説教し、或はパンをさき、或はアガペの食卓を共にして、徳行をすゝめ、パウロが後に『信仰の楯、救靈の兜』〔エフェソ書六ノ一〇—一七〕と呼ぶキリスト教的護身の武器を作ること教へるに専であつた。彼等は、又、自分達の模範によつて、神の國を獲んが爲には、艱難を凌がねばならぬことを示した。十二の試練を経た後、神々の棲むオリンパス山に上つ

た英雄ヘラクレスの神話は有名であつた。しかし、それにも拘らず新信者は、使徒等の教訓に些からず驚いたに相違ない。何故ならば、ヘラクレスは、運命の導くがまゝに、試練を受けたに過ぎないので、艱難を愛して、之を凌いだわけではなかつた。又、ヘラクレスは、怪物を退治したとは云ふものゝ、己が身に苦業を課したことはなかつた。最後に、ヘラクレスが求めたのは、自分一人の勝利であつて、世の救済ではなかつたからである。パウロは、此の時、既に『キリストの傷痕』〔ガラチア書、六ノ一七〕を身に負ひ『活ける、聖なる、神の御意に適へる犠牲』〔ローマ書、一二ノ二〕として、己が一身を主に獻げてゐたのである。

使徒等の信用は、爲遂げた聖役、凌いで來た艱難によつて、どこに行つても益々高まつた。それで、二人は、今度は、各地の教會に、秩序と規則とを與へることに、意を向けた。

もとより、從來とても、使徒等が或土地を離れる時に、全く其の邊の事を思はなかつたのではない。會合を司り、詩篇や豫言書を朗讀し、パンをさき、葡萄酒を杯にくんで、後に『ユカリスチア』と呼ばれるやうになる、祝福の聖語を誦へる者の他に、會衆にパンを頒ち、志願者に洗禮を施し、死者を葬る任務を有する人々もあつた。彼等の中には、聖靈の特殊の恩寵によつて、豫言者、教師となるものもあり、又、管理の賜を受ける者もあつた。又、『他國語を語る者』もあつた。これは、神の靈示を受けて、

會衆に不可解な言語を以つて、歡喜法悅の奇異な現象を現はす人達であつた。〔コリント前書第十二章〕

しかしながら、是等の諸教會に、神より授かつた權能を傳へることを得る首長がまだ定めてなかつた。即ち、勝手次第に不規則な藥ことばを出す葡萄樹のやうだつたのである。

それ故、パウロとバルナバとは、エルサレムや、アンチオキアに於ると同様に、各教會に長老會議を置くことにした。これは、元來、ユデア教の長老會議に規つたものである。ユデア教の長老會議は、會堂の利益を擁護し、財産を管理し、(今日の名稱で云へば、法人組織である)、異邦人官憲に對して之を支持し、異端者を破門する權限を有つてゐた。キリスト教の長老等の權能は、むしろ、より靈的で、後年、パウロが、弟子チモテオに書贈つたやうに、その第一の任務は『扞せられしものを守る』〔チモテオ前書六ノ二〇〕こと、即ち、教義、及び、祭式の眞實を失はぬことであつた。使徒等は、斷食し、祈禱した後、各教會の爲に、最適任者を選んだ。我等はパウロが求めた長老の資格を知つてゐる。曰く、『監督は、神の家宰として、咎むべき所なき人たるべし、即ち、自慢せず、短氣ならず、酒を嗜まず、人を打たず、恥づべき利を求めず、旅人を接待し、善を好み、伶俐にして義人たり、信心家にして節制家たり、教によれる眞の談を固く執り、健全なる教によりて人を勸むることを得、反對を稱ふる人に答辯するを得る人たるべし』と。〔チト書、一ノ七—九〕

使徒等は、かゝる人々を選んで、之に按手して、彼等に神の能力を傳へた。パウロは後にチモテオに云ふ『誰にも早く按手すること勿れ』と。(チモテオ前書五ノ二二)それは、七人の執事等が受けたやうな又、自分とバルナバとが、アンチオキアの長老等から受けたやうな叙品式であつた。

長老等を立て、から、二人は『彼等を其の信仰せる主に任ねて』再び出發した。さうして、ペルゲンをさして旅行しながら、途次、パンフィリア州全體に神の御言を傳へ、ペルゲンにも、今度は暫く滞在して、教會を建て、それからアッタリア港より乗船して、オロント河の河口に到着し、河を溯つて、アンチオキアに歸つて、『總て、神の、己等と共に爲し給ひし事』を報告した。

此の旅行は、紀元四四年、或は、四五年から、四九年に至る四、五年間に亘るものだ。布教區域はまだ大きくない。しかしながら、それは將來の象徴であつた。彼等は、新しく建てた七教會が、一も滅びないことを確信し、確知した。しかし、特に重要な事しは『神が異邦人に信仰の門を開き給ひしこと』の確證を得た事であつた。

あゝ、『信仰の門開かる』とは、何と云ふ意味深長な比喻であらう。人祖に賜はりし、原始的啓示の失はれてよりこのかた、人間は、眞に、『死の暗に坐せる者』だつたのである。イスラエルは自分の胸に、十戒を刻した石板をしつかりと抱きしめて、敢て他に示さうとしなかつた。永遠の光は、其の光輝を以

つて他の國民をも照らし給うたけれども、暗々黒々の闇夜の裡に、其の光輝は、たよりの無いほの白い明るさ以上に、出ることには出来なかつた。

智識を求むる人達も、眞鍮の門扉につきあたるばかりだつた。死の謎は不可解だつた。この問題に對して、哲學者の中で最も明瞭な解答を與へたソクラテスさへも、死とは夢のない眠か、然らずば、神々及び聖賢に伍して、光明の國に入ることであらうとの臆説以外に出る術を知らなかつた。

キリストが黄泉に下り、勝利者として天に上り給ひし時、死の門扉は碎かれて、今や、萬人悉くその中に入る事が出来る。開かれし天國、永遠の幸福、神の所有、これが、使徒等の、未だ嘗て、かゝる聲を聞きしことなき國々に、宣べ傳へた福音であつた。此の聲は、恰も昨日の如く、いまなほ吾人の耳朵をうつ。蓋し、世の終に至るまで、世の人々の依つて以つて活すべき生命の福音であるから。

(註一) 聖ヨハネ・クリソストムスの使徒行録に關する説教第二十九參照。

(註二) 詩篇、一五ノ一〇、この句はペトロにより、使徒行録、二ノ二五、二六に、なほ詳しく引用せられた。

(註三) 割禮を受ける必要がないので、異教の婦人等は、男子よりも、ユデア教に歸依しやすかつた。

(註四) 今日のコニアと稱す。

(註五) ドン・ルクレール、『殉教者行録』第一卷。

(註六) イサウリアのクラウディオポリスで、此の神殿の銘が発見された。

九、律法に關する論争

あらゆる成長する力には、一の危機があつて、後日の運命は、これを如何に解決したかに關するものである。戦争も、決断を要する瞬間に勝利がきまる。イエズスさまへも、人間としては、此の例に洩れ給はなかつた。即ち、彼が、公生活の最初に於て、曠野に誘惑を受け給うた時に、悪魔の力を破碎する三の應答、即ち、之によつて『我は世に勝てり』と後に曰ふ事を得た、三太刀の打込みをされたのである。

教會も、他の諸異端に打ち克つ前に、自己がユデア教より出た事に由來する、一の難問題を解決しなければならなかつた。難問題とは、全然、會堂シナゴグの従より自己を解放するか、或は、之に反して異邦人の新信者に、割禮、安息日、新月祭、煩瑣なる律法的汚穢、及び、其の他のファリザイ的規律を守らじむべきか如何にと云ふことであつた。

他にも——例へばエジプト人のやうに——割禮を實行する民族があつた。しかしながら、一般に、異邦人は、割禮をユデア人の特徴と見做して、彼等を嗤笑した。下に引用するのは、聖パウロと同時代の教養あるローマ人、ペトロニウスの言である。

『いくら豚の形をした神を拜し、長い耳殻の獸に祈つても、割禮を受けてゐないと露見すれば、そのユデア人は仲間から追ひ出されて安息日の斷食をしなくてもよい、どこかのギリシヤの町に逃げて行かねばならなくなる。此の民族では、割禮を受ける勇氣が彼が自由民たり、人並ひとなみであると云ふ唯一の證據となるのだ』と。「『斷篇』第十七』

何人かが、新たにユデア教に歸依しようとしても、此の痛い儀式に同意しなければ、教徒の一員となる事が不可能だつた。さうして、此の儀式を敢て受ける、男子の數は實に少なかつた。それだから、もしも、キリスト教會が之を要求したならば、教會は仲々ギリシヤ人や西歐人の許に發展することが出來ずして、何時までも、ユデア教の幹から生へた、一本の冗枝たるに過ぎなかつたであらう。然るに、實は、割禮は象徴であり、期待の印しるしたるに過ぎなかつたのである。即ち、それは、メシヤの約束を信じ、アブラハムの信仰を記念するもので、肉慾の除去を象徴し、罪惡を痊す恩寵のかたどりであつたのである。(註一)人が洗禮の水によつて完全に聖とせられる今日に於ては、象徴と過渡的儀式とは終るべき筈であつた。

しかしながら、ユデア教出身のキリスト教徒は、割禮を有せざる完全なる信者の概念を作るに非常な